
ウルトラマン -Cross Memories-

ももタロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマン - Cross Memories -

【Nコード】

N9302L

【作者名】

ももタロウ

【あらすじ】

M78星雲消滅！？ 迫り来る魔の手 頼れるのは地球の光の戦士達のみ！ 設定はウルトラマンメビウスと大怪獣バトルの時代設定にしています。

第1話 物語の始まり

ここは、M78星雲、光の国。

パトロールにでていた、ウルトラマンメビウスがちょうど帰還したところだった。メビウスは宇宙警備隊長ゾフィーにパトロールの報告をするために宇宙警備隊本部に向かった。宇宙警備隊本部にいたメビウスをゾフィー、ウルトラマン、セブン、ジャック、エースが迎えた

メビウス「只今、戻りました。」

エース「ご苦労だった、メビウス。」

ジャック「パトロールの報告をしてくれ」

メビウス「はい！僕はM78星雲近辺やその他近くの惑星をパトロールしましたが、特に異常は見られませんでしたが、最近兄さん達も感じていると思いますが、パトロール中に怪獣墓場付近で不吉なマイナスエネルギーを感じました。」

ウルトラマン「うーん、やはり何者かが暗躍しているのか？」

ゾフィー「かもしれないな。」

セブン「マイナスエネルギーはかつてエンペラ星人を構成していたエネルギーでそのエネルギーを使うことにより、数々の怪獣達操ったり、宇宙に影響を与えた。だが、40年前の奴の消滅と同時にマイナスエネルギーの発源を断ったと思っただが…」

ジャック「しかし、マイナスエネルギーをすべて断つことは結局で
きない」

エース「侵略を企む宇宙人なら、強力な力になるマイナスエネルギー
を採用するはず。」ゾフィー「最近、M78星雲近辺だけでなく、
Z95星雲やTOY1番星など他の星でもマイナスエネルギーの波
長を感じるそうだ。だから、今日各星の使いが我々の星に来て、対
策を話しあうそうだ。」

メビウス「早急に手を打たないと…」

???「大変なことなるかもしれないな」

メビウスの後ろで声がし、メビウスが振り向くとウルトラマンヒカ
リがパトロールから帰還したとこだった。

メビウス「ヒカリ！」

ゾフィー「パトロールから戻ってきたようだな」

ヒカリ「はい！では、パトロールの報告をします。私は地球や火星
などの付近をパトロールしましたがそちらのほうでは異常はありま
せんでしたが、パトロールから帰る途中、謎の円盤とすれ違いまし
た。その時は見逃しましたが、なにか嫌な予感がします。奴らが先
ほど話したマイナスエネルギーを使ってなにか企んでいるのなら、
きつとまた地球を狙ってきます。そうなる前に手を打ちましょう。」

メビウス「地球か……」

エース「どうした、メビウス」

ヒカリ「エース兄さん、今日はメビウスにとって特別な日なんですよ」

ジャック「特別な日？」

ヒカリ「今日はメビウスが地球を去ってちょうど40年なんですよ」

セブン「そうだったのか…」

ウルトラマン「我々にとって40年は短い年月だが、地球人にとって40年は長い月日であろう。」

ゾフィー「なるほど。メビウス、お前に一週間の休暇を命じる。…

…地球の仲間達に会ってこい。」

メビウス「え！？いいんですか、ゾフィー兄さん？」

ゾフィー「うむ。ただ、もしかしたら地球圏に侵略者が来るかもしれない。気を抜くなよ」

メビウス「はい！行ってきます。」

そういうと、メビウスはその場から飛びたった。

同じ頃、怪獣墓場付近の宇宙では…

謎の声A「フォッフォッフォッフォッ、いよいよだな。」

謎の声B「ああ、あれから40年、緻密にしてきた我らの計画もいよいよ開始だ。これで地球やウルトラの星、いや、全宇宙をフツハツハツハツハツハツ」

謎の声B「フォッフォッフォッフォッフォッフォッフォッ」

第2話 怪獣墓場での暗躍 (前書き)

いよいよ、本格的に物語が進行していきます。ちなみにこの物語の主人公はM78星雲出身ではないウルトラマン達なのですが、しばらくは出てこないと思います！笑っ

第2話 怪獣墓場での暗躍

謎の声B「ほう、この気配、ウルトラ戦士か…」

「???」「お前達何者だ！そこで何をしている？」

謎の宇宙人達が振り替えるとそこには2人のウルトラ戦士がいた。

謎の声A「ウルトラマングレートにウルトラマンパスワードか…」

パスワード「お前達は、バルタン星人にメフィラス星人！」

グレート「何故こんなところに！何を企んでいる??」

メフィラス星人「ふふっ。私達は40年温めに温めてきた宝物を解放しにきたのだよ。」

パスワード「宝物？」

バルタン星人「そう、40年前エンペラ星人が死に際に放ったマイナスエネルギー！」

グレート「何だと！？エンペラ星人の…。だが、いくらエンペラ星人のマイナスエネルギーとは言え、40年で集まるエネルギーなんて、少しのはず。」

バルタン星人「確かに普通なら40年でマイナスエネルギーをたくさん集めるのは不可能だ。だが、我らCCOが手を組めば、マイナスエネルギー増幅装置を作り、通常の何万倍のマイナスエネルギー

を生み出すことも不可能ではない。

グレート「CCOとはなんだ!？」

メフィラス星人「話す必要はありませんよ、何故ならあなた達はここで始末されるのですから!！」

そういつてメフィラス星人は怪光線をグレート達に放った。

グレート&パワー「シユア!」

2人は見事に回避し、グレートはメフィラス星人にパワーはバルタン星人にそれぞれ向かっていった。

4人ともそれぞれ近くの惑星の岩場に降り立った。

パワー「へアツ!」

パワーの連続回し蹴りがバルタン星人に当たろうとするが……

バルタン星人「フオツフオツ」

バルタン星人はさらっと回避、さらにハサミ手攻撃でパワーの軸足を突き、パワーを転ばした。そのまま、ハサミ手でパワーの首を持ち上げ、投げ飛ばす。

しかしパワーはすぐに態勢を立て直し、ジャンプキックをし、バルタン星人を吹っ飛ばす。そのまま、マウント状態をとるパワーだが、バルタン星人の白色破壊光線が放たれることを察知。

パスワード「デヤア」

間一髪パスワードは回避した。バルタン星人はすぐに立ち上がり回転しながらハサミ手攻撃を繰り返す。パスワードはそれをガード。バルタン星人のハサミ手をうまく防いだ。

第3話 死闘！怪獣墓場（前書き）

なんと、海外で活躍したウルトラマン達が勢揃いします！お楽しみ
に。

第3話 死闘！怪獣墓場

パワードはハサミ手攻撃を防いだ後、後ろに転がり距離をとる。

バルタン星人「そういえば、かつて私の同胞はお前に倒されたんだつたな…。」

パワード「また、ずいぶんと根に持ちやすい性格だな。」

バルタン星人「同胞の恨みは絶対だ。パワードメガスペシウム光線を放つ。見事に命中！しかし、バルタン星人には効いている気配はなかった。」

パワード「何故だ！？バルタン星人はスペシウムに弱いはず！」

バルタン星人「フオッフオッフオッフオッフオッフオッフオッフ」

バルタン星人は調子良さそうに高らかに笑った。」

一方グレートはメフィラス星人と組み手の取っ組み合いバトルをしていた。メフィラス星人「どうした、その程度か？」

グレート「ま、まだまだ」

メフィラス星人は強く、グレートの連続パンチをダイレクトにくらつてもびくともせず、グレートは片手を持たれ、投げ飛ばされてし

まった。

グレートはビームスライサーをだし、またメフィラスも怪光線をソード化した技を使う。激しい剣と剣の戦いが続いた。

2人は空中に飛び出し、空中でも剣の突き合いが続き、グレートはメフィラス星人の足を狙った。

メフィラス星人は足を攻撃され、そのまま落下その時、メフィラス星人が一瞬怯んだ。

グレート「今だ、デヤア！」

敵が隙を見せた瞬間に至近距離で必殺のナックルシューターをぶつける。グレートはこれを狙っていたのだ。

しかし、

グレート「?!?!?!」

なんと、メフィラス星人はグレートの戦略を読んでいたのか、怯んだ瞬間にバリアを貼り、グレートの至近距離ナックルシューターを防ぎ、それをグレートに跳ね返し、グレートを吹っ飛ばした。

メフィラス星人「フツハツハツハツ、自分の攻撃を受けた気分はどうだ？」

グレート「くっ?!?!」

「ばごおおおん!!!!」

グレートの後ろの岩場が崩れ、パウードが吹き飛ばされてきた。その岩場の影からパウードを吹き飛ばしたバルタン星人も現れる。

グレート「大丈夫か、パスワード。」

パスワード「こいつら、私達の攻撃パターンを読んでいるみたいだ。」

バルタン星人「フオッフオッフオッフオッフ、動揺しているみたいだな、残念だが、お前達是我々には勝てない。」

グレート「何!?!?!?!?」

メフィラス星人「我々はこの計画を成功させるために緻密に動くと同時に、その課程で邪魔になるであろうウルトラ戦士の研究もしていたのだ。」

バルタン星人「だがらお前達の戦略や光線技の対応策などは我々は熟知している。しかも、私にはスペシウムとゆう欠点も存在したが、CCOの技術を持ってスペシウムに強い耐性を持つ物質の合金を、体に埋め込んだのだ。」

パスワード「くっ!」

????「スペシウム光線がダメならこれはどうだ?」

遠くより、水色の光線が発射されてきた。バルタン星人とメフィラス星人は急いでそれを回避した。

メフィラス星人「誰だ!?!」

四人は一斉に後ろを振り向くと、三人のウルトラ戦士が立っていた。

ウルトラマンスコット、ウルトラウーマンベス、ウルトラマンチャックである。ウルトラチームの三人がパワード達の救援に駆けつけた。

スコット「行くぜ!!」

スコットはその場からビームスライサーを放った。

また、スコットはビームスライサーを円盤型にしてバルタン星人達に複数放った

それはまるで水色の流星のごとく、バルタン星人とメフィラス星人に向かって飛んでいった。

バルタン星人「フオッ!!」

メフィラス星人「フン!!」

2人はビームスライサーを回避し、空中に!!しかし

スコット「へ!かかったな!!」

なんとウルトラウーマンベスとウルトラマンチャックは、バルタン星人達が回避したすぐ上に待ち構えていた。

ウルトラウーマンベスはバルタン星人のハサミ手をつかみ、そのまま地面に放り投げた。

バルタン星人「グフォッ！」

地面に叩きつけられたバルタン星人はさすがにダメージを受けたようだ。

ウルトラマンチャックはそのまま、メフィラス星人の足を捕まえ、投げようとした。

メフィラス星人「こしゃくな！」

メフィラス星人はチャックの胸を蹴り、ペアハンド光線を放つ、しかし、ウルトラマンチャックはバリアでガード、すぐさまメフィラス星人に接近し、連続パンチ！

「シュワシュワシュワシュワ」

そのまま、腹に蹴りを入れ、メフィラス星人をぶっ飛ばした。

「ビッビーーーーー」

メフィラス星人「ぐわっ！」

さらにウルトラマンチャックが下からグラニウム光線を放ち、メフィラス星人の背中に命中！

メフィラス星人はそのまま落下した。

チャック「どんなに、私達の研究をしても、隙を見せてはそれも

意味はない！」

バルタン星人は立ち上がり、ウルトラマンスコットに向かって赤色凍結光線を放つ！しかし、そこには紫色の閃光が飛んできて、スコットへの攻撃を防いだ。ウルトラマンベスである。

ベス「今よ、チャック。」

スコット「ようし！」

スコットはバルタン星人に向かってグラニウム光線を放つ。

バルタン星人「グツフオツツツ！」

バルタン星人は吹き飛ばされ、メフィラス星人の近くまでぶっ飛ばされた。

ベス「どうやら、グラニウム光線は効いたみたいね。」

チャック「よくやったな、スコット！」

スコット「へ、どうだ！俺達ウルトラチームのコンビネーションは！？ただ研究しただけじゃ、俺らのコンビネーションは解析できないぜ！」

パワード「助かったよ、ありがとう！」スコット「全然大丈夫ですよ！お互いウルトラ戦士だし、お互い地球のアメリカを守った者同士じゃないですか！」

チャック「おい！スコット。長話は後だ！」

ベス「そうよ！あんま調子に乗らないの！まずはこいつらは倒してからよ。」

ウルトラ戦士達5人は歩いて、メフィラス星人達を追い詰める。

グレート「形成逆転だな、さあ、観念するんだ。」

メフィラス星人「くっ！まだだ」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

地面が大きく揺れ始め、グレート達全員は膝をつく。

スコット「なんだ！？」

「バゴバゴゴガゴガゴガゴーーン」あたりの地面が徐々に崩れていく。

バルタン星人「まさか、やつが、ついに?!?!?」

メフィラス星人「この気配は間違いない！やつが復活したぞ、我々の40年の思いが遂に!!!!!!」

紫色の玉をしたマイナスエネルギーが一つのところで集まっていた。

メフィラス星人「あとは……」

メフィラス星人「私が持っている、このエンペラ星人のDNAをマイナスエネルギーに与えてやれば……」

そういうとメフィラス星人はマイナスエネルギーの集中する場所に向かった。

パウード「エンペラ星人を復活させる気が？させるか！！」

パウードはパウードスラッシュを放つ。しかし、バルタン星人が赤色凍結光線で相殺させた。

バルタン星人「邪魔をするな！」

チャック「くっ！しかし、なぜマイナスエネルギーがいきなり集まってきたのだ？」

バルタン星人「フォッフォッフォッフォッフォッフォッ全ては作戦どおりだったのだ。」

グレート「何！？」

メフィラス星人「怪獣墓場もしくは近辺で戦闘を行えば、怪獣達の亡霊はその戦闘の誘惑に誘われる。私達の狙いはここで戦闘を行い、怪獣達の亡霊を集めそこからマイナスエネルギー集めるのが目的だったのだ。」

バルタン星人「40年の間に長いことエネルギーを集めた。しかし、それでもあと少し足りなかったのだな！」

メフィラス星人「さあ、復活せよ、エンペラ星人、いや、さらに強くなったネオエンペラ星人！」

マイナスエネルギーが天に上っていき、天に集中したマイナスエネルギーが一気に下に落下。「ズゴゴゴゴゴゴン」

足場がどんどん崩壊し、グレート達の足場も崩壊したが、グレート達はなんとか別の足場へ移動した。

大量のマイナスエネルギーの光の中からかつて、地球を支配しようとし悪魔が姿を現した。

第4話 悪魔の復活（前書き）

ネオエンペラ星人の強さにパワー達5人は勝てるのか!?

第4話 悪魔の復活

グレート達は威圧感に押しつぶされそうだった。

かつて、40年前に全宇宙を混乱に落とし入れたエンペラ星人がパワーアップし、ネオエンペラ星人として復活したのだ。

全てを見透かすような紫色の眼光

ボディは以前は全身黒色のボディだったが、濃い赤色の縦ラインが体に数10本引かれ、

また、40年前の傷痕なのか、体の部分にくぼみが見えるが、その傷痕が余計に恐怖を漂わせている。

右手にはエンペラソードが進化したネオエンペラソードが握られている。

そして、なにより、周りの全ての者を恐怖させる覇気。

仲間であるはずのメフィラス星人、バルタン星人もその覇気に捕らえられ、動けずにいた。

グレート「エンペラ…星人、だが、前となにか違う。」

スコット「なんだ、こいつの覇気は？動けない」

チャック「かつてのエンペラ星人にここまでの覇気はなかったはず」

ベス「他の怪獣の怨念やマイナスエネルギーを取り込んでパワーアップしたというの？」

ネオエンペラ星人はネオエンペラソードからビームスライサーをグレート達に放った。

グレート達「うわあ！！」

グレート達は覇気に捕らえられていて、動けず、ビームスライサーを受け、吹き飛ばされた

だが、そのビームスライサーを受けたからか、少し緊張の糸がほぐれた。グレート達はネオエンペラ星人に近づき、5人はネオエンペラ星人を囲んだ。

ネオエンペラ星人「長い眠りについていたようだ。久しく目覚めたにしては、とてももない力を感じる。そう、全てを押しつぶせるほどの力がなああああ！！！！」

そう、ネオエンペラ星人が叫ぶと衝撃派のような、突風が巻き起さり、グレート達は吹き飛ばされそうになった。

ネオエンペラ星人はウルトラ戦士達をみた。

ネオエンペラ星人「さあ、まずはウルトラ戦士への復讐だ。ふん、準備体操には…ちょうどいい。」

パワード「こいつは、まだ復活して自分の力を制御できていないはず！」

グレート「5人で力を合わせて、倒すのだ！」

チャック「こいつはここで仕留める！」

ベス「先には進ませないわ！」

スコット「ようし、行くぜ、チャック！ベス！」

そういうとスコット達ウルトラチームの3人はエンペラ星人に飛びこむ。

チャックとベスは右手と左手を押さえた。

スコット「くられ！」

スコットは空中で回転し、回転キックをくりだそうとした。

ネオエンペラ星人「ツッ！」

ネオエンペラ星人は両手を抑えているチャックとベスを振り払い、ベスを回し蹴りで吹き飛ばし、チャックもエルボーで吹き飛ばす。

チャック「ぐおっ！」

ベス「きゃっ！」

空中から回転キックで迎えてきたチャックにはネオエンペラソードのビームスライサーを命中される。

スコット「ぬわあ！」

グレートとパワーも向かってくる。

すると、なんとネオエンペラ星人はネオエンペラソードをバズーカ砲の形に変え、バズーカを発射！

グレート&パワー「！！！」

グレート達はなんとか回避、しかし、次にネオエンペラ星人はバズーカ砲から形をチェーンに変え、パワーの首を捕まえた。

パワー「あわあ！！！」

ネオエンペラ星人はパワーを捕まえたらそれをグレートのほうに投げ、二人をぶつけさせふつとばした。

そうすると、背後からウルトラチームの三人がグラニウム光線を発射！

ウルトラチーム「シュー！！！」

しかもこの時放ったグラニウム光線は光線があたるとリング状になり、相手を捕まえるのである。

ネオエンペラ星人は、ぴくりとも動かず、グレートの腹にパンチし、かがんだグレートの前首にチョップ。

倒れるグレートを思いきり蹴り、吹き飛ばした。

連戦が響いたのか、グレートとパワードのカラータイマーが点滅を始めた。

パワード「くっ！このままでは奴は倒せない。ウルトラサインで仲間達に救援を呼ぶぞ！」

パワード「シュワッチ！」

パワードは手からビームを出す。SOSのウルトラサインである。

しかし、ウルトラサインは表示されるとすぐに消えてしまった。

グレートがパワードに近づいてきて、

グレート「何故だ！？ウルトラサインが……」

メフィラス星人「フツハツハツハ」

しばらく姿を見せなかったメフィラス星人とバルタン星人が姿を見せた。

バルタン星人「お前達は畏にかかった。」

メフィラス星人「お前達がネオエンペラ星人と戦っている間に私達は怪獣墓場に強力な電磁フィールドを張った。」

バルタン星人「このフィールドを張ったことにより、私達がバリアを解除しない限り、怪獣墓場は内部からも外部からもいかなる影響を受けないのだ。まあ、怪獣墓場への生物の侵入と内部から出ることはできないがな。」

ウルトラチームが近づいてきて、

チャック「くっ！なんということだ。」

ベス「仲間達を呼べないなんて。」

そうすると、メフィラス星人がエンペラ星人に近づき、耳打ちをする。

ネオエンペラ星人「くつくつく、それはいいな！では、行け。」

メフィラス星人「残念だが、ウルトラ戦士達よ！我々とはここでお別れだ。ネオエンペラ星人に倒されがいい！」

スコット「どこへ行く気だ？」

バルタン星人「教える必要はない！さらばだ」

メフィラス星人とバルタン星人はそう言うと、飛び上がった。

スコット「逃がすか…。」ぐだぐだにスコットは立ち上がり、メフィラス星人達を追おうとする。しかし、

ネオエンペラ星人「どこへ行くのだ？」

ネオエンペラ星人はネオエンペラソードを変化させたネオエンペラマシンガンを放つ。

スコット「どわあ！」

スコットをまたひざまずかせる。

ベス「スコット、しっかりして！」

ベスが立ち上がり、ネオエンペラ星人に向かって行く。

キックをくりだす、ベス。ネオエンペラ星人はガード。そのまま裏拳でベスの背中を攻撃。

ベスの手をつかみ、放り投げる。

ネオエンペラ星人はネオエンペラマシンガンからネオエンペラ星人に形を戻し、ビームスライサーを放った。チャック「危ない！！！」

チャックが背中でベスを守り、身代わりになった。身代わりになったチャック

チャック「ああ…。」

チャックはその場に倒れた。

ベス「チャック！！！！！」

ウルトラチームの三人のビームランプが点滅を始めた。

ネオエンペラ星人「消え去れ！」

ネオエンペラ星人は空中に飛び、片腕をあげ、指の上で球状の玉を作る。

紫色のその玉は大きさは人間でいう、大玉のぐらいの大きさである。徐々に大きくなる。そして、ネオエンペラ星人は地面に思いつきりその玉を放つ。

グレート達「ぐわあああああー！」

爆炎は広がり、グレート達を5人を吹き飛ばした。

5人はもはや、瀕死状態であった。5人は立ち上がろうとするも立てなかった。

グレート達のカラータイマー、ウルトラチームのビームランプの点滅が早まる。

ネオエンペラ星人が近づいてきた。そして、スコットに何かを口ずさむ。

スコット「な、何だって！！！！！」

スコットに口ずさむとネオエンペラ星人は不気味に笑い、怪獣墓場を去った。

スコット「くそっ、立てねえ。」

スコット達5人の意識が遠のいていった。

第5話 M78星雲での日常 (前書き)

ここでは、M78星雲の日常的な会話などや、映画、ウルトラ銀河伝説の触りになる部分も含めています。お楽しみに！

第5話 M78星雲での日常

グレート達が怪獣墓場でバトルしている、一方M78星雲では……

タロウは宇宙警備隊員育成所にいた。

そこには未来を培っていくたくさんの宇宙警備隊員の生徒が訓練に励んでいた。

タロウは地球を去ってから宇宙警備隊員の筆頭教官を勤めている。

生徒達の互いに切磋琢磨しあい、時にはぶつかり、時には助けあふ。そんな姿をタロウは見ていつも思う。

タロウ「私にもこんな頃があったな。」

タロウの前に二人の生徒がやってきた。

生徒A「タロウ教官！」

タロウ「どうした？」

生徒B「光線の威力が弱いのです。どうすれば？」

タロウ「ん…エネルギーを集約したらどうだ。若干、タイムロスはするが、威力は上がるはずだ。」

生徒達「なるほど…」

タロウ「また、これは私の場合だが、私はストリウム光線はエネルギーを集約する時としない時がある。そういった使い分けができれば今後成長できるはずだ。」

生徒達「なるほど。ありがとうございました!!」

生徒達は走っていき、練習場に戻る。

???「だいぶ、教官らしくなったわね!」

タロウが振り向くとウルトラマン80とユリアンがやってきた。

ユリアン「昔はわがままでずっとゾフィー兄さん達に甘えてばかりだったのに。」

タロウ「やめてくれよ、そんな昔の話は！それより、今日は二人ど
うしたんだ？80は学校じゃないのか！」

80は地球から帰還後はウルトラ兄弟になる傍ら、普段はM78星
雲のウルトラの小学校の先生に、ユリアンは、銀十字軍隊長、ウル
トラの母のもとで母の手助けをしている。

80「今日ウルトラの小学校でお休みをいただいたので、ユリアン
と…」

タロウ「なるほど、デートとゆうわけか！」

80「そ、そんな、やめてくださいよ」

ユリアン「え！？これデートじゃないの？」

80「それは…まあ。」

タロウ「相変わらずだな。しかしユリアン、ウルトラの国の王女のお前が銀十字軍で働いていて大丈夫なのか？まあ、母さんは助かっ
たているみたいだが…。」

ユリアン「まあ、周りは少し反対したけど、私まだ正式な王女ではないから、まあそれまでの社会勉強よ！」

80「しかし、最近何か不穏な空気を感じる。一応ウルトラの国に戻ったほうがいいんじゃないか？」

ユリアン「大丈夫よ！いざとなったら守ってくれるんでしょ？」

80「た、たしかに言ったが、今は言わなくてもいいだろう！」

タロウ&ユリアン「あははははは」

三人は笑いながら、1日でも早く優秀なウルトラ戦士達になろうと励む生徒達を見るのだった。

M78星雲、光公園ではウルトラマンレオとアストラがいた。

アストラ「レオ兄さん、なんで公園に？」

レオ「セブンから、今日光公園に来てくれと言われたんだ。」

アストラ「なんの用事だろう？」

そうすると、公園にウルトラセブンがやってきた。

セブン「すまない、待たせたな。」

レオ「久しぶりだな！どうしたんだ？」

セブン「レオに頼みがあつてな。」

レオ「頼み？」

セブン「……ゼロのことだ。」

アストラ「ゼロってたしか、セブン兄さんの息子でしたよね。」

セブン「あいつがプラズマスパークのコアを手に入れようとして、法に背き、今、光の国の留置場にいることは知ってるだろ？」

レオ「……ええ。」

セブン「あいつはまだ若い。だから、若さ故の過ちで軽い処分で済んだ。もうすぐ、留置場から出られるのだが、あいつは戦士として大切なことがなんのかが分かっているんだ。だから、あいつを鍛えてほしいのだ。」

レオ「話はよくわかりました。しかし、それは父親であるあなたがすべきでは？」

セブン「あいつは今回の件で捕まえた私をきつと憎んでいる。また、やつは私が父親であることは知らないんだ。」

アストラ「なぜ、父親だと言うことを言わないんですか？」

セブン「私は任務などが忙しく父親として接するどころかろくにあいつの顔を見てやることができなかった。だから、妻や回りのウルトラ戦士にも私が父親であることは伏せさせた。父親に頼らずともたくましく成長して欲しかった。私はそれを影で支えたかった。」

アストラ「そうだったんですか。」

セブン「しかし、あいつはひねくれてしまった。誰かがもつとあいつと正面からぶつかりあってやることがよかったのだ。しかし、私は相変わらず任務が忙しくあいつと接してやれない、だから、レオ

…」

レオ「わかりました。僕はかつて、地球であなたにお世話になりました。だから今度は僕があなたに借りを返す番なんです。ただ、セブンの息子と言えど、あいつは僕の弟子として厳しくしていきます。いいですね？」

セブン「ああ、頼むぞ、レオ！ゼロは私以上に優秀な戦士になる。なにより、あいつは素直じゃないがとても優しい奴なんだ。だから、あいつを肉体的にも精神的にも鍛えてやってくれ。」

レオ「わかりました。」

アストラ「僕もレオ兄さんとゼロの特訓に付き合います。」

セブン「ああ、頼んだよ！」

セブンの瞳はどこか遠くを見つめていた。

メビウスは地球へ飛び立とうとしていた。ゾフィーから一週間の休暇をもらい、地球にいる仲間達に会いに行くのだ。

光

国の出口にきたメビウス。そうするとヒカリが見送りにきた！

メビウス「ヒカリ！」

ヒカリ「見送りに来たぞ。リュウに会ったらよろしく伝えておいてくれよな！」

メビウス「わかったよ！じゃあ、行ってくるよ。」

そういうと、メビウスは飛び立った。

ヒカリ「リュウのやつ元気かな…」

ヒカリが感傷に浸っていると

「謎の声1」「ここ、どこだよお？」

謎の声2「君がトロトロしてたから置いていかれたんだぞ…！」

ヒカリは声のする方を振り向いた。

そこには、ウルトラマンゼアスとウルトラマンナイスがいた。

ナイス「トロトロとはなんだよ。久しぶりに光の国に来たから建物をじっくり見ていたんだよ。」

ゼアス「もう、どうするんですかあ！？上司は怒ると怖いんですからねえ！！」

ヒカリ「ゼアスにナイスじゃないか！久しぶりだなー！

ゼアス「あ、ヒカリ！久しぶりだね！」

ヒカリ「どうしたんだ？君達が光の国に来るなんて珍しいじゃないか！」

ゼアス「最近、不穏なマイナスエネルギーの影響で、今日、Z95星雲や他の星から使いが来て、光の国会で会議を行うのは知ってるだろう？」

ナイス「僕達はその使いの護衛で来たってわけ！」

ヒカリ「なるほど、でも護衛なのに、なんでこんなところに？」

ナイス「それは……。まあ……………」

ヒカリ「……………光の国会に案内するよ、大急ぎでな……………」

ゼアス&ナイス「お願いします!!!!」

ヒカリはゼアスとナイスを光の国会入り口に連れてきた。

ヒカリ「この奥で今会議をやっているから、護衛はこの入り口で待っているよ。」

ゼアス「助かったあ、ありがとうヒカリ!!!危うく、上司に怒られるところだったよ。」

ゼアスはそういって、ヒカリに抱きついた。

ヒカリ「やめろ、うっとうしいなあ!」

ヒカリ達がじゃれあっていると二人のウルトラ戦士がヒカリ達の前に降り立った。

ウルトラマンマックスとウルトラマンゼノンである。

二人はなにやら急いでいるような感じで会議室に向かった。

ナイス「どうしたんだろう?」

ゼアス「マックスさんとゼノンさん、なんか焦っている感じだったなあ…。」

ヒカリ「…………嫌な予感がする。」

光の国会、会議室では…………

他国の使いA「私達が調べた情報では、今宇宙人同士で手を組み、CCOとゆう団体を作り、密かに暗躍しているみたいです。」

他国の使いB「また、最近では、数々の惑星からエネルギーを採取する跡がたくさんみられ、おそらく、マイナスエネルギーかと…。」

ゾフィー「…………以上のことを整理すると、やはり宇宙人達はなにか計画を企んでいる線が強そうですね！大隊長、やつらが何かをする前に手を打ったほうが…。」

ウルトラの父「そうだな。まずは、近くの宇宙人達から…。」

突然、会議室のドアが開かれ、ウルトラの父の声がかき消された。

ドアからウルトラマンマックスとウルトラマンゼノンが入ってきた。

マックス「大変です！M78星雲に怪獣や宇宙人達が侵入し、攻撃を始めてきました！！」

ウルトラの父「なんだと！！！！」

ゼノン「先程、M78星雲の関門を突破し、多くの怪獣達が侵入し、我々の星を襲っています。被害はまだ、浅いですが、このままでは中心部まで攻められてしまいます。」

ゾフィー「直ちに、ウルトラ戦士を召集させる！！やつらに攻め込まれる前に一気にたたくんだ！！」

ゼノン「しかし、敵にはあのエンペラ星人らしき見たとゆう情報もあります。そこそこの戦力では足りないと思われます！！」

ウルトラの父「エンペラ星人だと！！？？まさか、復活したとゆうのか？」

マックス「おそらく、今まで暗躍していた宇宙人達の動きは全てはこのために……」

ゾフィーがウルトラの父の方を向き、

ゾフィー「大隊長！」

ウルトラの父「直ちに光の国全勢力を召集させる！やつらを倒し、光の国を守るぞ！」

ゾフィー「ちなみに今やつらの影響を一番受けている場所はどこだ？」

マックス「M78星雲、U40のエリアです。」

ゾフィー「よし、マックスとゼノンはウルトラの戦士達をここに召集しよう、みなにウルトラサインを送ってくれ。それが終わったら、直ちにU40に向かい、そこで戦っている戦士達の援護に回ってくれ！」

マックス&ゼノン「わかりました。」

マックス&ゼノンは会議室から出て行った。

他国の使い達は突然の出来事に同様していた。

ウルトラの父「大丈夫です！みなさんは必ず私達が守ります。」

他国の使いA「ありがとう！たのむよ。我々はあなた達とは違い戦闘能力には長けていない。だから、君達の手助けはできない」

ゾフィー「大丈夫ですよ、我々を信用してください。」

ウルトラの父「とりあえず、もうすぐ、ウルトラの戦士達がここに召集されるはずだ。まずは外にしよう。」

ゾフィー達は外に出た。

一方、M78星雲から地球に向かって旅立ったメビウスは宇宙を飛行していた。

メビウス「リュウさん、みんな元気かな!？」

メビウスがウキウキした気持ちで怪獣墓場付近に來ると、なにやら人影が見える。

メビウス「誰か倒れてる!？」

メビウスは怪獣墓場に着地した。メビウスは目を疑った。なんと、5人のウルトラ戦士が倒れているではないか！

メビウス「はっ！グレートさん、パワードさんしっかりして！スコットさんなにかあったんですか？ベスさん、チャックさん、しっかりして！」

メビウスは必死なり呼びかけたが応答はなかった。 どうやら、一時的にエネルギーが切れているようだった。

メビウスは5人にエネルギーをわきあたえた。

「ピコンピコンピコンピコン」

グレート達5人のカラータイマーが点滅を始めた。 なんとか意識を取り戻したようだった！

メビウス「大丈夫ですか、みなさん！？」

パワード「ありがとう、メビウス、助かったよ…。」

メビウス「いったい、なにがあったんですか？」

グレート「宇宙人達が暗躍し、さっきエンペラ星人を復活させてしまったんだ！」

メビウス「なんですって！？エンペラ星人を？」

ベス「あいつらは、エンペラ星人がパワーアップしたネオエンペラ星人と言っていたわ。」

チャック「やつの圧倒的な力の前に我々は歯が立たなかった。」

パワード「ウルトラサインで救援を呼ぼうと思ったが、どうやらこのエリアはいかなる影響を受けないように電磁バリアが張られたらしいのだ。」

スコット「メビウス、早く光の国へ戻ってくれ！」

チャック「そういえば、ネオエンペラ星人のやつ、お前が倒れる前になにか言っていたな。」

スコット「あいつら、M78星雲を消滅させるって！怪獣墓場で復活させた怪獣達でM78星雲を襲うって！！」

メビウス達「なんだって！！！！」
スコット「だから、早く行かなくちゃ……。ぐはっ。」

スコットは立とうとしたが、傷は思ったより深く立つことはできなかった。

メビウス「スコットさん、無理をしては行けません。その傷で例え、M78星雲に戻ってもやられるだけです。5人はどこか安全な星で体力を回復したら来てください。僕は先に行きます。」

パワード「わかった！我々は後から行く。」

スコット「頼むぜ、メビウス！」

メビウス「はい！」

そういうと、メビウスは怪獣墓場から飛びたち、M78星雲へ向かった。

メビウスがM78星雲近辺にきた、その瞬間

メビウス「うわあ！！」

背中から火球弾が飛んできた。メビウスはそれを受け、近くの星へ落下した。

メビウスは振り替えると、そこには、インペライザーがいた。それも数体のインペライザーであった。

メビウス「くっ！こんなにインペライザーが！早く戻らなくちゃ行けないのに！！あ、そうだ、パスワードさん達の救出をゾフィー隊長に頼もう！もうウルトラサインを出せるはずだ。」

メビウスはそう言うと、ウルトラサインを右手から出した。意味はパスワード達の救出の要請である。

メビウス「はやく、こいつらを！」

メビウスは勢いよくインペライザー軍団に飛びかかっていた。

第6話 戦場！M78星雲

(前書き)

今回はめちゃめちゃバトル多いです。自分の悩みとしては、プロレス技や格闘技の技を知らないのです、ちょっと書きにくかったです。なので、読んでくれたみなさんにそういった、技の名前などを小説の感想と共にもらえたら嬉しいです

第6話 戦場！M78星雲

今、M78星雲は戦場と化していた。

その中でも一番最初に被害を受けたM78星雲、U40では……

U40の戦士1「ダメです！我々の戦力では彼らを防ぐことはできません。」

U40の戦士2「くっ！我々の大きさではそもそも怪獣達とは戦えない……。」

そう、U40はM78星雲、光の国と少しかけ離れた星である。そのため、プラズマスパークの影響をあまり受けない星なのである。

だから、U40は8人のウルトラ戦士以外はみんな巨大化ができず、人間と同じくらいの大きさなのである。

そのため、U40の勢力はたかが知れていた。

U40の戦士1「うわー！踏みつぶされる。」

そこには、テレスドンがいた。

テレスドンはまるでアリの踏み潰すかのように豪快に足を振り下ろそうとした。

???「シュワッチ！」

ある、ウルトラ戦士がテレスドンに体当たり、テレスドンを吹き飛ばした。

U40の戦士1「あー、ジョーニースー！」

そう、胸に星型のカラータイマーを付けた彼はM78星雲、U40最強の戦士、ウルトラマンジョーニースーである。

ジョーニースー「ここから北に向かったところが安全だ。早く逃げんだ。」

U40の戦士2「すまない！」

そういつとU40の戦士二人は北に向かって走りだした。

テレスドンは起き上がり、逃げる二人を追おうとした。しかし、

「ジョーニース、シュワッチ！」

ジョーニースがテレスドンを抑える。ジョーニースは抑えた体をそのまま押し倒した。

マウンドを取り、そのまま、顔は殴りまくった。

テレスドンも負けまいと尻尾を使い、ジョーニースね背中を叩き、吹き飛ばす。

テレスドンは起き上がり、ジョーニースに体当たりをした。ジョーニースはそのまま持ち上げられ、地面に投げられた。

今度はジョーニースの反撃！

膝を蹴り、テレスドンを転ばす。

腹にエルボーを三発食らわせ、そのまま両手でテレスドンを持ち上げ、空中に飛ばす。

30M付近までくると、テレスドンを地面に投げ捨てた。

テレ斯顿は空中30Mのあたりから、落ち、泥の地面から土しぶきがとぶ。テレ斯顿はダウンした。

テレ斯顿はまだ、もがく。口から火炎放射を放つ

しかし、ジョーニアスはあっさり回避

ジョーニアスは地面に着地し、ブラニウム光線を放つ。

青い閃光がテレ斯顿に放たれる。

テレ斯顿「ぎゃおおお」

テレ斯顿はブラニウム光線を受け、爆発した。

ジョーニアス「ふうっ…なんとか勝ったな。」

ジョーニアスはそういうと、後ろから殺気

ジョーニアスの背中を光線が貫く。そう、ガッツ星人である。

ジョーニアス「うわあ！」

ジョーニアスは横にそのまま投げ飛ばされた。

ジョーニース「お前、ガッツ星人か…。」

ガッツ星人「ジョーニース、出会ったばかりだが、お前には消えてもらおう！」

そう言うと、ガッツ星人はリアットをかまそうとする。

ジョーニースはそれを回避。だが、ガッツ星人はすばやい。

そのまま、ジョーニースの足を蹴る。

ジョーニース「ジョワツ！」

ジョーニースは倒れる。ガッツ星人が襲いかかる。

ジョーニースはそれを回避。ガッツ星人の手を蹴り、立ち上がると、その勢いで背負い投げ。

「ぐほお!!」

ガッツ星人はなぎ倒された。

ジョーニースは倒れたガッツ星人に向かって飛び込む。

ガッツ星人はそれを回避。分身を使い、三人に分裂した。

ジョーニース「なに!？」

一体のガッツ星人は消耗光線を放つ。

2体目、3体目も消耗光線を放つ。

ジョーニース「うわあああ!!！」

ジョーニースは消耗光線に捕らえられ、エネルギーを奪われて行く。

すると、

「ジュジュジュジュジュジュ!!!」

空中から謎の光線が一体のガッツ星人を葬る。

ガッツ星人とジョーニースは上をみた。

ウルトラマンマックスとウルトラマンゼノンが駆けつけた。

マックス「大丈夫ですか、ジョーニースさん!」

ゼノン「M78星雲、光の国より援護に来ました。」
ジョーニース「よく来てくれました!!!」

ガッツ星人「フン！三人とも消してあげましょう！」

2体のガッツ星人はマックス達に向かってきた。

マックスとゼノンが一体のガッツ星人を、ジョーニースがもう一体のガッツ星人と戦う。

マックスとゼノンの空中リアット！ガッツ星人は回避する。

マックスとゼノンはそのまま飛行し、ガッツ星人がそれを追う。

マックスはガッツ星人をつかむ、そのままガッツ星人をゼノンの方に投げる。

ゼノンは2段蹴りで投げ飛ばされてきたガッツ星人の腹を蹴る。

そのまま、ゼノンはガッツ星人の手をつかみ、今度はマックスの方へ投げ飛ばす。ガッツ星人は投げ飛ばされると、そのままマックスの体を登り、空中連続キック！

マックス「うわあ！」

マックスは落ちそうになる。

ガッツ星人に近づくとゼノン。

ガッツ星人「くらえ！」

ガッツ星人の消耗光線を何発も発射。

ゼノンはそれを全て回避！

ガッツ星人はマックスの存在を忘れていた。

マックスはガッツ星人の頭上に行き、パンチで思いきり、地面に叩き落とした。

地面に落下したガッツ星人。

ガッツ星人「ぐおおお！！！」

マックス「今だ！」

ゼノン「おう！」

マックスとゼノンは光線集約ポーズをし、

マックスはギャラクシーカノン、ゼノンはゼノニウムカノンを発射
！！

二つの光線は絡み合い、ガッツ星人に直撃！！

ガッツ星人「ぐうおおおおお！！！！」

ガッツ星人は断末魔とともに大爆発した。

一方、ジョーニアスはガッツ星人と直角の取っ組み合い。

そのまま、ともえ投げ。

ガッツ星人は立ち上がるとマックスとゼノンがガッツ星人の体を抑える。

マックス「今です、ジョーニアスさん！」

ジョーニアスはブラニウム光線集約ポーズ。

ブラニウム光線を発射。しかし、ガッツ星人はマックス達を払い飛ばし、ブラニウム光線を回避。

ゼノン「くっ！もう少しだったのだが…。」

ガッツ星人「そう簡単にやられる私ではないわ！おっと、そろそろか…。悪いが、お前達との勝負はお預けだ。まあ、もう2度と会うことはないがな！さらばだ。」

ガッツ星人はそういうと消えていった。

マックス「なにか始めるつもりなんだろうか？」

ゼノン「ああ、かもしれないな。だが、今はとりあえず、このU40を守ることに先決だ。ジョーニアスさん、力を貸します。」

ジョーニアス「お願いします！今、このU40で怪獣達と戦える戦士はもう私しかいません。U40の主力戦士、エレクやロトも倒れました。」

マックス「なんてことだ……。」「

ゼノン「だが、我々は負けた訳ではありません。3人で力を合わせ怪獣達を叩きましょう。」

マックス「しかし、勢力が3人とゆうのは少な過ぎると思うので、ウルトラサインで救援を要請しておきます。」

ジョーニース「…お願いします。とりあえず、これから怪獣達が一番暴れている、U40の中心地に向かいましょう」

ジョーニース達三人はU40の中心地に向かった。

一方のM78星雲、光の国では……

ウルトラマンネオス、ウルトラマンセブン21、ウルトラマンヒカりは宇宙情報局本部の近くで敵とバトルしていた。

ネオスとセブン21はサドラとデットンと戦っていた。

ネオスはサドラの首を捕まえ、背負い投げをする。

ネオス「シエア!!」

倒れるサドラ!のしかかるネオス。首にチョップをし、サドラを抵抗させなかった!

サドラ「ぎええ!!」

怒るサドラ、ネオスを吹き飛ばす。

ネオス「シエアア!!」

ネオスはサドラの腹に突っ込む。突っ込んだまま、持ち上げて後ろに投げ飛ばした。

セブン21もデットンと戦っていた。宇宙保安庁の格闘戦士、セブン21は回し蹴りの連発でデットンを圧倒!!

回し蹴りをくらったびに回るデットン。

セブン21は次に首を捕まえ、デットンの顔を膝の前に持ってきて、そのまま、膝でデットンを蹴り上げる。

ネオスはサドラの尻尾を持つ。セブン21もデットンの尻尾を持つ。

ネオスとセブン21は尻尾を持ったまま、それぞれの怪獣をジャイアントスイング。

サドラ達は目を回していた。ネオスとセブン21は息を合わせ、ジャイアントスイングしている怪獣達の顔と顔をぶつけさせ、ダメー

ジをあたえる。

そして、おもいきりサドラ達を投げた。サドラ達は投げ飛ばされ、ダウンし、よろめく。

セブン21「いくぞネオス!!」

ネオス「はい!くられ!」

ネオスとセブン21はネオマグニウム光線とレジアショットの集約ポーズをとる。

ネオス「シュワッ!!」

セブン21「ジュワッ!!」

二人は光線を発射!!光線がサドラとデットンに直撃。2体の怪獣はきれいな閃光とともに大爆発した。

ネオスとセブン21は手を組み、勝利ポーズをした。

一方、ウルトラマンヒカ리는超獣ドラゴリーと戦っていた。

ドラゴリーがヒカリに向かってくる。ヒカリはドラゴリーに足を駆け、倒す。

ヒカリ「シュワッ！」

ヒカリはドラゴリーの手を持ち、一回回し投げた。ドラゴリーは転がる。

立ち上がるドラゴリー。ヒカリは走り、ドラゴリーの体を使い、空中に登る。そのまま、頭にかかと落とし。

ドラゴリーは頭にかかと落としをくらいよろよろしている。

ヒカリ「シュワッ！」

ヒカリはよろよろしているドラゴリーの顔面を少し、ジャンプして回し蹴る。

ドラゴリーは地面に倒れる。倒れたドラゴリーは口から火炎を吐いた。

ヒカリは爆転し、火炎を交わす。

ヒカリはナイトビームブレードを出す。

ヒカリはドラゴリーに切りかかる。ドラゴリーが立ち上がるとすでにヒカリが目の前に。

ヒカリ「ハッ」

ヒカリは左斜めからドラゴリーを切る。ドラゴリーの体はにヒカリに切られた所が光りはじめる。

ヒカリ「ハッ！」

ヒカリは今度は右斜めからドラゴリーを切る。

×印に切られるドラゴリー。×印に切られた所が光る。

ヒカリ「シュワッ！」

最後にヒカリは×印のちょうど真ん中から縦にドラゴリーを切る。

そして、ヒカリは後ろを振り向き、ナイトビームブレードを天にかざす。

ドラゴリー「ぎゃああああー!!」

ドラゴリーは断末魔を上げるとともに、ヒカリに切られた所から体が爆発し、吹き飛んだ。

ヒカリはナイトビームブレードをしまう。ネオスとセブン21がヒカリの所に来た。

ネオス「やったな、ヒカリ!!」

ヒカリ「ですが、まだまだ怪獣達の襲撃は続いています。ここで、もたもたしている暇はありません。」

セブン21「ヒカリの言う通りだ。いくぞ、ネオス、ヒカリ」

三人は飛び立とうとする。その瞬間

????「久しぶりだな、ウルトラマンネオス、ウルトラセブン21。

」

後ろから声がし、ネオス達は振り向く。

ネオス「ザム星人!!」

セブン21「こいつも復活したのか…。」

ザム星人「ついでにドレンゲランもつれてきてやったぞ!」

ザム星人の後ろから怪獣ドレンゲランが姿を現す。

ザム星人「覚悟しろ!いつかの恨みをはらしてやるう!!」

ザム星人が向かってきた。

ヒカリ「くっ、厄介な!三人で一氣に叩きましょう。」

ネオス達もザム星人達に向かっていく。

ヒカ리는ドレンゲランに飛びつこうとする。しかし、

ドレンゲランは体を回転させ、尻尾攻撃!

ヒカリ「ぐわあ！」

ヒカリは倒れる。倒れたところにドレンゲランがのしかかる。足でヒカリを踏みつける。

ドレンゲランは重く、ヒカリはドレンゲランをどかせなかった。

一方、ネオスとセブン21はザム星人に飛びかかる。二人でザム星人の腕を持ち、投げ飛ばす。

セブン21はザム星人に向かってジャンプキックしようとした。

ザム星人の目から怪光線が放たれ、

セブン21「ジュワツッ！！」

セブン21は怪光線をくらい、地面に落ちる。

ネオスがザム星人に向かう。しかし、

ネオス「ぬわあ！」

なんと、ドレンゲランは首を伸ばし、ネオスの背中にアタック。

ネオスは前に倒れそうになると今度は前から、ドレンゲランは首使い、ネオスに攻撃した。

セブン21とネオスはドレンゲランの下に埋もれているヒカリを見つめる。

セブン21「ヒカリ、大丈夫か!？」

ネオス「今、助けるぞ!!！」

セブン21とネオスはドレンゲランに向かう。

ドレンゲランはネオスに向かい、口から冷凍噴射。

ネオス「うわああ!!！」ネオスはダウンした。

しかし、冷凍噴射を食らわなかったセブン21はドレンゲランに向

かう。

ドレンゲランは尻尾を伸ばし、セブン21の首を締めあげる。

セブン21「うわああー!!」

セブン21はもがき苦しむ。ドレンゲランはそのまま、セブン21をザム星人のほうに投げる。

投げ飛ばされるセブン21。ザム星人が待ち構えていた。

ザム星人はセブン21にアイアンクローをし、空中に持ち上げる。

ザム星人「アツハツハツハツハ、苦しいか!？」

「ミシミシミシミシミ」

ザム星人は手に力をいれる。凄まじい音がし、セブン21をさらにしめあげる。

セブン21「ジュワアアアアアアア!!!」

ヒカリはドレンゲランの下からなんとか脱出、ザム星人に向かってナイトシュートを放つ。

しかし、ザム星人はナイトシュートを直接食らってもダメージをな
にひとつ受けなかった。

ザム星人「ええい、引っ込んでろ！」

ザム星人はセブン21を捕まえていない、もう一つの手から怪光弾
を発射。

ヒカリ「うわああ!!」

ヒカリは吹き飛ばされた。

ドレンゲランは倒れているネオスに近づき、首でネオスをヒカリの
近くまでぶっ飛ばす。

セブン21はザム星人の顔を蹴り、なんとかアイアンクローを逃れ
た。そして、セブン21の頭にある角、ヴェルザードをザム星人に
飛ばす。

ザム星人は胸を張り、なんとヴェルザードですら、跳ね返す。

セブン21の頭に戻るヴェルザード。セブン21はヒカリとネオスのところまで、爆転で戻る。

ザム星人とドレンゲランがネオス達に近づく。

ヒカリ「っ、強い!!」

ネオス「こいつら、明らかに以前より数段パワーアップしている。」

セブン21「しかも、光線技や武器攻撃が聞かないなんて!」

ザム星人「アツハツハツハ、困惑しているようだな。そう、我々は40年前、お前達やメビウスにエンペラ星人を倒されてから、お前らに復讐するため、生きてきた。」

ヒカリ「……………」

ザム星人「私達は人間やその他の生物のマイナスエネルギーでいくらでも復活する。だが、いくら我々が再生してもお前達ウルトラ族には勝てない。」

セブン21「……………」

ザム星人「だが、我々悪の宇宙人はある宇宙人の仲裁で手を組み、ウルトラ族の研究はもちろん、エンペラ星人の復活にも労力を費やしたわけだよ。」

ネオス「ある宇宙人??」

ザム星人「レイブラッド星人だよ。」

ヒカリ「レイブラッド星人だと!??」

ネオス「何万年前にいたエンペラ星人などの最強クラスの宇宙人の一人。」

ザム星人「レイブラッド星人は精神体はまだ生きていた。やつは、自分の計画に協力するなら、我々を全面的にバックアップすると言ってきた。だから、我々悪の宇宙人は手を組むことができた。」

セブン21「レイブラッド星人…。」

ザム星人「そして、我々は初段階にエンペラ星人を復活させようと40年マイナスエネルギーを集め、さらにはM78星雲のウルトラ戦士の武器や光線技を研究し、それに耐えられる体や能力を得たのだ。」

ネオス「それで我々の能力が…。」

ザム星人「つまり、お前達ウルトラ族は我々には勝てない。」

ザム星人はそう言うと、怪光弾をネオス達に放つ。ドレンゲランも口から火炎弾をはなった。

爆炎が広がり、ネオス達は爆炎に巻き込まれる。

ネオス達「うわああああ!!!」

爆炎が止むと、ネオス達3人は倒れる。

ザム星人はネオス達の前から去ろうとする。

ヒカリ「まだ、俺達は負けていない。」

ヒカリが立ち上がろうとするが、虚しく立てない。

ザム星人「真の絶望はこれからだ。アツハツハツハツハツハ！」

ザム星人はそう言い残し、ネオス達の元から去る。

セブン21「真の絶望…だと。」

ネオス「いったい、どういう…意味なんだ。」

3人はそのまま、意識を失ってしまった。

第7話 80とユリアン、レオとゼロ（前書き）

久しぶりの投稿です。今回は80とユリアンの絆、レオとゼロの出会いを描いて見ました。ちゃんと読んでくださいね

第7話 80とユリアン、レオとゼロ

ユリアンは他の銀十字軍の隊員と共に老人や戦えない者、女性や子供達をM78星雲にある光の避難所に避難させていた。

光の避難所にはバリアが張られている。これは大半の怪獣や宇宙人は通ることはできない協力なバリアなのである。

また、この避難所は目立たない場所に設置されている。宇宙人達や怪獣達はこの星に侵入したら、真っ先に中心地やプラズマスパークタワーを攻めてくる。

だが、この避難所はそういった場所からかけ離れている。だから避難警告が出て、真っ先にここに迎えば、怪獣達とも遭遇せず、ここまですることが可能なのである。

ユリアン「はい、大丈夫だからね。気をつけて中に入ってね！」

ユリアンが子供達を誘導していると、少し遠くのほうでざわざわしていた。

ユリアンが様子を見にいくと、ユリアンが知らない一匹の宇宙人が銀十字軍の隊員達を襲っていた。

宇宙人は右手の剣で隊員に切りかかり、そのまま足で蹴り飛ばす。

ユリアン「大丈夫ですか!？」

ユリアンは隊員達に駆け寄る。

隊員「こいつ、なぜバリアを突破できたの？」

クリア星人「私はクリア星人!私の体はクリアズムとゆう物質で構成されていて、バリア系統のエネルギーや光線エネルギーなどの効力を受け付けない。だから、ここの避難所のバリアも突破できたのだ。」

ユリアン「そんな...。」

ユリアンは焦っていた。この避難所には戦力になるウルトラ戦士は今ほぼ皆無で銀十字軍の隊員しかない。

銀十字軍の隊員は治療などの回復役としての技術しか基本は会得しておらず、ほとんどの隊員は戦闘経験はないのである。

クリア星人「ここは避難所とゆうことは、大半のウルトラの民が避難している。まずはここを人質に取り、最後は一人残らずぶっ殺ろしてやる。」

クリア星人は隊員達をなぎ倒してゆく。銀十字軍の隊員達はやはり相手にならない。

ユリアン「(80…。)」

クリア星人「そらそらあ！」

クリア星人が暴れていると…。

???「シュワッ！」

クリア星人「ぐふっ！」

クリア星人は後ろから、何者かに蹴りとばされる。

そこにはウルトラマン80がいた。

80「大丈夫かユリアン？それに、銀十字軍の隊員達も！？」

ユリアン「80、来てくれたのね！」

80「他のみんなは下がっているんだ！クリア星人、私が相手だ。」

「

クリア星人「おのれ、ウルトラマン80!!せっかくいい気持ちでこいつらをいたぶっていたのに。」

クリア星人が向かってくる。

80「シュワッ!」

80はクリア星人の手前でジャンプ!そのまま、後ろにジャンプしながら、クリア星人の背中を蹴る。

クリア星人の後ろに着地!次に80はクリア星人の足首を蹴り、転ばせる。

クリア星人「ぐわあ!」

80は片足をそのまま持ち、銀十字軍隊員達とは反対方向に投げ、少しでも避難所から遠ざける。

クリア星人「おのれええ!!」

クリア星人は右手に持っている剣、クリアブレードから光刃を飛ばす。

80はウルトラダブルアローでそれを相殺させ、空中へ飛ぶ。

空中で回転し、ムーンサルトキックでクリア星人をふっ飛ばす。

クリア星人「ぐはっっ!!」

ユリアン「80負けるな!!」

遠くからユリアンが80を応援する。

クリア星人「なかなかやるな。数十年前、地球に滞在していたころ、怪獣達に無敗で地球を守った戦士ウルトラマン80。その強さは本物とゆうわけか…。だが、勝負はこれからだ。」

そういうとクリア星人は消えた。

80「なに!?!」

80は辺りを見渡すがクリア星人はいなかった。するとその刹那、

80「うわあ!」

なんと、なにもないはずのところからいきなり80は左脇腹を切られた。

80は左脇腹を抑えた。次に腹にダメージがきた。また、何者かに切られた感じである。

80「くっ！クリア星人め。」

そう、クリア星人の特殊能力、自分自身の体を透明にする能力である。

クリア星人は次々に透明になりながら、クリアブレードを使い、80にダメージを与えていく。

数回、クリアブレードで切られ、倒れる80。

ユリアン「80!!!!!!」

????「痛いよおおお!!」

ユリアンは横を見た。なんと、子供が倒れていた。どうやら、避難所に行く途中に転んで、足を怪我したらしい。

ユリアン「大丈夫かな、僕!？」

ユリアンはやさしく声をかけ、ヒール光線で傷口を直す。

ユリアン「もう大丈夫よ！ここは危ないから早く、避難所の中へ！」

子供は元気よく立ち上がり、

子供「ありがとう、お姉ちゃん！」

子供は元気よく、お礼を言い避難所へ逃げていく。

ユリアン「!？」

ユリアンが後ろを振り返ると、透明能力を解除したクリア星人がクリアブレードを上に掲げ、立っていた。

クリア星人「さあお嬢さん、あの世へ行け!!！」

クリア星人はかかっていたクリアブレードを振り下ろす！

ユリアン「くっ！」

ユリアン顔を横に向けたが、クリアブレードは来なかった。ユリア

ンが前を見ると、

80「いったたろう、お前は私が守ると！」

80がユリアンの前に立ち、ウルトラ白刃取りでクリアブレードを止めていたのだ。

ユリアン「80!!!!」

80はクリア星人の腹を蹴り、横に倒す。80はサクシウム光線集約ポーズをとり、

80「シュワツ!!!」

80はサクシウム光線を放つ。しかし、

クリア星人「あははは、無駄なあがきよ！」

クリア星人は透明能力を使い、透明になるサクシウム光線を回避した。

80「くっ!!」

クリア星人は再び、見えなくなる。

クリア星人「俺がどこにいるか見つけてみるお！」

80は片手を掲げ、光の刃ウルトラレイランスを持ち、気を集中させる。

緊張が走る。

80「!?!」

80は2時の方向にウルトラレイランスを投げる。

クリア星人「ぐわああ!!!」

80が投げた方向からクリア星人が現れた。

クリア星人「なぜ、おれがここだと…。」

80「姿を消せても、お前は気配だけは消せていなかった。だから、気を集中すれば、簡単にお前を見つけることができたのだ。」

クリア星人「おのれえ、ウルトラマン80!くりあああああああ!

!!!!!!!」

クリア星人は断末魔と共に木っ端微塵に吹っ飛んだ。

ユリアンが80に近づいてきて

ユリアン「80大丈夫？」

80「ああ、大丈夫だ。ユリアンこそ平気か？」

ユリアン「ええ！さっきは助けくれてありがとう！」

80「間一髪だったな！」

銀十字軍隊員達が80に近づいてきた。

隊員A「80さん、助けられてありがとうございます。あなたがとっございました。あなたが来てくれなかったらここはきつと…。」

80「いえいえ！このバリアはいくら怪獣達を引きつけないといえ、決して完璧に近づけさせないとは言えません。さっきのクリア星人のような特殊な奴もいます。だから、私はゾフィー隊長から、こここの避難所を守るよう言われました。」

隊員B「そうなのですか!!」

80「あと、数十人は護衛が来ると思いますが。ですから、あなた達は安心して、人々を避難させることに専念してください。」

隊員B「それは助かります!!お願いします。」

80はうなずくと隊員達は元の定位置に戻り、人々の避難の案内を続けた。

ユリアンは80の方を向き、

ユリアン「あ、言い忘れてたわ、今日のデートの続きはまた今度ね!!」

80「こんな時にそんな話を!はあ、やれやれ。」

80は、頭の後ろをかきながら、しぶしぶ言うのだった。

そうするとウルトラの父とウルトラの母、それに他の星の使いがやってきた。

80とユリアンは敬礼をする。

80「大隊長、どうなされましたか?」

ウルトラの父「うん、この他の星の使い達を避難所に送りに来たのだ。この人達を巻き込むわけにはいかないからな。」

ウルトラの母「ユリアン、案内してあげなさい。」

ユリアン「わかりました。みなさんこちらです。」

ユリアンは他の星の使いを避難所に案内していく。その場には80とウルトラの父とウルトラの母が残る。

ウルトラの父「80、もうすぐ護衛が来ると思っが、お前がここでは指揮をとってくれ！避難所の人達を絶対を守るのだ。」

ウルトラの母「あと、ユリアンや他の銀十字軍の隊長達も守るのですよ。」

80「はい、わかりました。」

ウルトラの父「よし、いくぞ、マリー！あいつらはおそらく、最終的にプラズマスパークタワーに来る。一応あのタワーは6兄弟達に守らせているが、我々もいくぞ！」

ウルトラの母「はい、ケン!」

2人はそう言い、飛び立つ。

80はそんな2人が飛んで行く姿を見送るのだった。

ウルトラマンレオとアストラは光の国の西に向かっていった。

しばらく行くと、2人は謎の洞窟前に立つ。

レオ「ここか、あいつがいるのは…。」

アストラ「良いんですか、レオ兄さん?今は国の緊急事態ですよ!」

レオ「セブンの命令だ。それに、今のあいつが怪獣に見つかれば、きっとすぐやられてしまう。」

レオ達は洞窟の中へと入っていく。

とても暗い洞窟。小さな音でも鳴り響くくらい、研ぎ澄まされた洞

窟。

レオ達は行き止まりにさしかかった。洞窟の行き止まりは洞窟とは思えないくらい、天井が高く、奥行きもあつた。その奥には、一人の戦士が座っていた。

???。「外が騒がしいようだが…。誰だ、てめえ?」

アストラ「お前、レオ兄さんにてめえ呼ばわりするなんて…!」

アストラが一步前になると、レオが押さえ

レオ「お前か、ゼロと言うのは?」

ゼロ「ああ、久しぶりに他人から名前呼ばれたなあ。俺に何の用だよ?」

レオ「お前を強くしてやる、私に付いてこい!」

レオが言った瞬間にゼロはレオになぐりかかる!

レオ「!!!」

レオは片手でゼロのパンチを止める。

ゼロ「俺を強くするだと？笑わせんなよ。」

????「おやおや、ここにもウルトラ戦士がいたのですか？」

レオ達の後ろから声がし、三人は声のした方を向く。

するとそこには、2体のリフレクト星人が立っていた。

リフレクト星人弟「おっ、兄貴！あいつは確か、ウルトラマンレオ。40年前、おいら達の同胞を倒したやつだ！」

リフレクト星人兄「やつがウルトラマンレオ！そして、双子の弟アストラか！レオ兄弟と我ら兄弟、どちらが上か勝負だ！」

レオとアストラが戦闘ポーズをとると、ゼロがレオ達の前に立つ。

ゼロ「あんたらは引っ込んでな！ちょうどむしゃくしゃしてたんだ！あいつらはおれがぶっ飛ばす！」

ゼロはそういうと、リフレクト星人兄弟に向かっていった。

アストラ「行かせていいんですか？」

レオ「まずは、お手並み拝見とゆうところだ…。ギリギリまでやらせてみよう。」

ゼロは2体のリフレクト星人の前に立った。

ゼロ「さあ宇宙人、いくぜえ!!」

ゼロはそういうと、リフレクト星人に向かう。

リフレクト星人弟を掴む。だが、ゼロは頭で持ち上げられ後ろに投げられる。

次にリフレクト星人兄が襲いかかる。

ゼロ「デュアッ!!」

リフレクト星人兄は頭でゼロに体当たり。ゼロは吹き飛ばされる。

リフレクト星人弟がゼロを立ち上がらせ、体を十字固めにして抑える。

リフレクト星人弟「未だ、兄貴、やっちまいな」

リフレクト星人兄は笑いながら近づく。

リフレクト星人兄はゼロの体を殴っていく。

ゼロ「ぬわあ！がはあ！」

ゼロのうめき声が飛ぶ。

リフレクト星人弟はゼロを話し、リフレクト星人兄の方に投げる。

リフレクト星人兄はもう一度体当たりでゼロを吹き飛ばす。

吹き飛ばされるゼロ。すると、吹き飛ばされた岩が雪崩のように、ゼロに降ってくる。

アストラ「兄さん、ゼロが！！」

レオ「待て、アストラ！」

雪崩のように落ちてきた岩になにかで斬られたような亀裂ができ始め、その岩は砕けていった。

その中からは、ゼロスラッガーを片手に持った、ゼロが立っていた。

ゼロ「てめえら、これでぶったぎってやるよ……。」

ゼロはゼロスラッガーを持ったまま、リフレクト星人兄に接近。

ゼロ「うらあああああ！！」

ゼロスラッガーで斬りかかるが、リフレクト星人の左手にある盾であっさりガードされる。

ゼロ「くそっ！！」

ゼロスラッガーを振り回すがリフレクト星人兄はあっさりかわす。

リフレクト星人兄「まったく当たらないなあ」

リフレクト星人兄は余裕綽々な感じで軽快なステップで交わしていく。

するとリフレクト星人弟がゼロの後ろからきりかかる。

ゼロ「ぬわあー！」

ゼロは回避できず、脇腹を抑える。

ゼロ「くそっ！」

ゼロは斬りかかってきたリフレクト星人弟に立ち向かっていく。しかし、今度はリフレクト星人兄に脇腹を斬られる。

ゼロは戦闘経験はほぼ皆無。故に戦い方がわからずにいた。故に、自分にダメージを与えてきた方に立ち向かい、もう片方にやられるとゆうパターンにはまっていた。

ゼロはもてあそばれている戦闘に耐えきれなくなっていた。

ゼロ「ぬわああああ！！くらええええええ！」

怒りのエメリウムスラッシュがゼロのビームランプから放たれた。

リフレクト星人兄「まったくおもしろくない。」

リフレクト星人兄はエメリウムスラッシュを盾で防ぎ、その光線をカウンターにして返した。

ゼロはその光線をくらい、
ゼロ「うわああああ！」

ゼロは勢いよく吹き飛ばされる。

ゼロは体力が限界であった。

2体のリフレクト星人が近づいてくる。

ゼロ「（ちくしょう。おれ、ここで死ぬのかよ。ふっ、まあいいさ。どうせ俺みたいになくすは…。」

リフレクト星人兄が右手の剣を上へ上げ

リフレクト星人兄「さらばだ！」

リフレクト星人兄はゼロに斬りかかった。

……ゼロは目をつぶっていたが、なかなか剣が降りてこない。

ゼロは前を見ると、一人の男が素手でリフレクト星人兄の剣を止めていたのだ。もちろんその男とはウルトラマンレオである。レオ「ゼロ、お前の強くなりたい、誰かを見返したい、そんな気持ちにはよくわかった。」

レオは剣を振り払う。リフレクト星人2体は後退する。

ゼロ「あんた……。」

レオ「戦いとゆうのはこういうものだ。よく見ておけ！」

リフレクト星人兄「ウルトラマンレオ！私達の一番の標的。」

リフレクト星人弟「同胞の敵、今こそはらしてやる！！」

リフレクト星人達はレオに向かっていく。

レオ「えいやあ！」

レオは達人拳法の構えをとる。

リフレクト星人弟が剣で斬りかかった。

レオは片手で止め、腹を蹴り、投げ飛ばす。

兄も剣で斬りかかってきた。レオはそれを体をよらせ、回避。腹にパンチを叩きこみ、持ち上げでリフレクト星人弟めがけて投げる。

リフレクト星人弟が立ち上がる瞬間、リフレクト星人兄が飛んできて2人は倒れた。

リフレクト星人弟「くそおおおおお！！」

リフレクト星人弟はレオに向かっていく。レオはリフレクト星人弟に抑えられるも頭を叩き、リフレクト星人弟をひざまずかせる。

レオ「はああ、でやあ！」

そのまま、リフレクト星人弟を立たせ、体を回転させ、リフレクト星人弟を倒す。次に腕を持ち、投げ飛ばす。

リフレクト星人兄もレオに向かうも、体を登られ、かかと落としされる。リフレクト星人はよろめく。

レオ「えやあ！はああ！」

レオは首を左足で蹴り、右の回し蹴りでリフレクト星人兄を倒す。マウンドをとり、リフレクト星人兄を殴りつける。

リフレクト星人弟「うおおおお！」

リフレクト星人弟がレオに向かって突進してくる。

レオはそれに気づき、よろめくりフレクト星人兄を立たせ、リフレクト星人弟と激突させる。

リフレクト星人2体はくらくらしながら、倒れていく。

レオは近くに木の棒が落ちていることに気づく。

レオはそれを持ち、レオヌンチャクに帰る。

リフレクト星人兄は剣を振るも、レオヌンチャクで振り払われ、レオヌンチャクで殴られていく。

レオヌンチャクで2体を相手に戦う姿をゼロが呆然と見ている。

ゼロ「っ、強い！2体を同時に相手にしてる。」

アストラ「レオ兄さんの強さはこれからだよ！」

レオは空中へ飛ぶ！

レオ「えやあ！！」

レオはレオキックでリフレクト星人に攻撃しようとする。

リフレクト星人兄「ばかめ、弟よ！」

リフレクト星人弟「あいよ！」

その押し合いにより、レオキックはリフレクト星人弟の盾を貫き、さらに弟も貫く。

そして、リフレクト星人兄も貫くかとおもいきや、リフレクト星人兄は盾を犠牲にし、なんとか回避。

リフレクト星人弟「あ、兄貴iiiiiiiiiiii!!!」

レオキックにより、貫かれたリフレクト星人弟は大爆発を起こした。

リフレクト星人兄はなんとか助かったが、もはや虫の息であった。

レオ「来い、アストラ！行くぞ！」

アストラ「はい!!!」

アストラはレオのところまで、飛んでいき、そのままレオの前に着地し、しゃがむ。

アストラはそのまま腕を上げながら、両手を組む。レオがそのアストラの手の上から、レオの両手を重ねる。

レオ&アストラ「ウルトラダブルフラッシュャー!!」

「ビビビビビビビビビ」

赤い波状の光線がリフレクト星人兄を貫く。

リフレクト星人兄「ぐわあああ!おのれ、ウルトラマンレオオオオオオ!
」

リフレクト星人兄は断末魔を叫びながら、爆炎とともに散った。

アストラ「やったね!レオ兄さん。」

レオ「ああ。」

レオとアストラは握手を交わす。

すると、洞窟に地響きが始める。

「ジュジュジュジュジュ」

洞窟の辺り一面の岩が砕けていく。

アストラ「レオ兄さん、この洞窟はもうすぐくずれてしまう」

レオ「うむ!」

ゼロ「お、おい！なんで洞窟がくずれてきてんだよ！？」

アストラ「おそらく、さっきの激しいバトルで岩壁が耐えられなくなってきたんだ！」

ゼロ「大丈夫なのかよ、おい！」

レオ「大丈夫だ！さあ、早く脱出だ！！アストラ、ゼロ、行くぞ！」

レオ達は岩が崩れ落ちる間一髪で飛び立つ。

洞窟を飛行し、出口まで戻ろうとする3人。

岩壁が崩れてくる。当然ながらレオ達の頭上の岩壁も崩れてきた。

岩壁のつぶてが粉雪のように沢山降ってくる。しかし、レオとアストラはそれをなんなく回避。

ゼロもなんとか回避していたが、

ゼロの回避したちょうどその場所に岩壁の沢山の岩のつぶてが落ちてきた。

ゼロ「だめだ、回避できない！」

ゼロがもはやこれまでかとおきらめようとした。その時、ゼロの体は持たれ、ゼロを救う。

ウルトラマンレオである。

レオ「何をあきらめている。どんなことにおいても最後まで全力を尽くせ！」

レオはゼロの体を持ったまま、岩壁の雪崩を回避して行き、出口へ向かう。

担がれながら、ゼロは

ゼロ「（この人なんかすげえや…。）」

と思いつつ、レオの顔を見る。

レオ「出口の光が見えたぞ！」

レオはなんとか出口にたどり着く。アストラは先に出口にたどり着いていた。

アストラ「レオ兄さん、無事だったんだね！」

レオは担いでいたゼロを地面におろした。

ゼロ「た、助かったのか。」

ゼロはホッとため息をつく。

その瞬間、洞窟はくずれ、入り口は出入り不可能の状態になった。

アストラ「ヒヤヒヤしたね、レオ兄さん。」

レオ「ああ。」

立ち上がるゼロが近づいてくる。

ゼロ「おい！えっと……ウルトラマンレオ。あんた、なかなかやるな。」

レオ「……………」。

ゼロ「まあ、なんだ。あのよ………あんたの特訓に付き合っことしたよ。強くしてくれるんだろ？」

レオ「今のお前は強くなれん。」

ゼロ「んだとお！！」

ゼロが怒鳴る。

レオ「戦略、知識、精神力、すべてにおいてまだまだお前は未熟だ。お前は弱いのだ。」

ゼロ「俺は弱くねえ！」

レオ「弱い！リフレクト星人の事を知らずに飛びかかり、リフレクト星人にもてあそばれ、挙げ句の果てに、光線を連打し、エネルギーをなくしたではないか！」

ゼロ「くっ！」

ゼロはなにとも言えなかった。

レオ「だが、お前はまだまだ成長できる時期だ。まずはおのれを弱さを知ることから始めるんだ。」

ゼロは無言だった。

レオ「まあいい。まずはこの星を救うことが先決だ。お前も付いてこい。」

レオ&アストラ「でやあ！」

レオとアストラが飛び立つ。

ゼロ「けっ！俺は弱くねえってとこ、今に見せつけてやるよ！」

そう言い、レオ達の後を追うゼロであった。

第8話 ウルトラ6兄弟対ネオエンペラ星人（前書き）

久しぶりに投稿です。ほんとはもっと早いペースで投稿したいんですけどねえ…。

今回はウルトラ6兄弟のバトルシーンです。お楽しみ下さい!!

あ、新しく違う小説も連載始めましたのでそちらもよろしく

第8話 ウルトラ6兄弟対ネオエンペラ星人

ウルトラ戦士と怪獣達との死闘は続いていた。建物は壊れ、そこから煙がたくさんあがってある。

不振なことに空が曇ってきて、M78星雲に暗黒さを感じさせる。

戦士A「おい、大丈夫かあ!？」

ウルトラ戦士の一人が倒れているウルトラ戦士を見つける。

戦士B「ああ、なんとかな!くそっ、宇宙人達め、こんな戦争を仕掛けてきやがって。こんなに敵がいて俺達は勝てるのか!」

戦士A「大丈夫!私達にはウルトラ兄弟や信頼できる戦士達がいる!きつと勝つさ。」

戦士B「ああ、そうだな…。」

戦士A「そんなことよりまずは傷口を直そう。もう少し歩けば、避難所だ。そこで手当してもらおう!」

戦士Aは戦士Bと肩を組む。

戦士B「すまない。」

戦士A「気にするな。」

肩を組み合った二人。戦士Aはそのまま空に飛び立ち、避難所へ向かう。

プラズマスパークタワーの中心部にはゾフィー、ウルトラマン、セブン、ジャック、エース、タロウのウルトラ6兄弟がいた。

ゾフィー「黒幕達はきつとここに来る。なんとしてもここで止めるのだ。決して、最上階には行かせてはならん。」

中心部の先の階段を上るとプラズマスパークのコアがある。これを取られるとウルトラの国は太陽を失い、氷りの世界になり、ウルトラの国の人達はみんな氷りついでしまうのだ。

そのプラズマスパークのコアを狙う宇宙人は多かった。何故なら、プラズマスパークのエネルギーは怪獣復活やマイナスエネルギーの増加など、善悪両方幅広く使えるのだ。

「ずばあああん」

プラズマスパークタワーの入り口のドアが吹き飛び、

「うわああああー!!」

外からウルトラ戦士3人が吹き飛ばされてきた。

そして外から、とてつもない暗黒のオーラを漂わせている宇宙人が侵入してきた。それはまるで全ての物をねじ伏せるかのような威圧感であった。ネオエンペラ星人である。

吹き飛ばされてきたウルトラ戦士を踏みつけ、ネオエンペラ星人はプラズマスパークタワーの中心部に立つ。

プラズマスパークタワーの最上階に向かおうとしているネオエンペラ星人を前にウルトラ6兄弟は羽織っていたブラザーズマントを脱ぎ捨てファイティングポーズをとる。

ウルトラ6兄弟はプラズマスパークタワーの最上階への入り口を防ぐ。

ネオエンペラ星人「ウルトラ兄弟達よ、そこをどいてもらおうか！」

ジャック「ここから先は通すわけにはいかない。」

エース「お前はここで倒す。」

ネオエンペラ星人「おろかなウルトラ兄弟達め！」

タロウ「俺達は絶対に負けない！」

セブン「このプラズマスパークタワーは必ず私達を守り抜いてみせる。」

ウルトラマン「ウルトラの魂をここに！」

ゾフィー「よし、いくぞみんな！！！」

ウルトラ6兄弟達はネオエンペラ星人に向かっていく。

ウルトラマン「シュワッ！！！」

セブン「ジュワッ！」

ウルトラマンとセブンがネオエンペラ星人に体当たりする。

ネオエンペラ星人は一瞬よろめき、すぐさま体勢を立て直す。

エース「テエエエ！」

エースが走りながら左足を前にだし、キックを放とうとするが、ネオエンペラ星人はエースの左足を手で捕まえ、一回転させ転ばす。

ネオエンペラ星人「どらあ！」

そして、右手に持つネオエンペラソードを杖に変え、エースをなぎ払った。

なぎ倒されるエース、その後ろから、タロウがジャンプし、空中で回転する。

タロウのスワローキックである。

タロウ「デヤアア!!!」

ネオエンペラ星人「ぬっ!!」

タロウはスワローキックをネオエンペラ星人に放つと、ネオエンペラ星人の胸を使い、もう一度使い、空中へ。

また、空中で回転し、スワローキックを放つ。

ネオエンペラ星人「ぐふっ!!」

そして、またタロウはネオエンペラ星人の胸を使い、空中へ飛ぶ。

またタロウは空中で回転し、スワローキックを放ち、ネオエンペラ星人の胸を借り、空中へ。

タロウのスワローキックコンボである。徐々に空中へ飛ぶ高さが高くなる。

タロウ「これで、最後だ!!!」

タロウは4度目のスワローキックを放とうとして、ネオエンペラ星人の胸を狙う。

ネオエンペラ星人「しつこいわぁ！」

ネオエンペラ星人はスワローキックをしてきたタロウの両足を捕らえ、そのままスイングして、ウルトラマンのいる方へ投げる。

ウルトラマン&タロウ「ぐはっ！」

タロウとウルトラマン2人は衝突し、倒れ込む。

ジャック「シユワツチ！」

ネオエンペラ星人の横から、ジャックがウルトラブレスレットをウルトラスパークにして投げる。

ネオエンペラ星人「むっ！」

ウルトラスパークに気づき、瞬時に杖の形をしたネオエンペラロッドで跳ね返す。そのまま、ジャックに突撃！

ネオエンペラロッドを横持ちに変え、自分の前に持ってきて、ジャックの首をネオエンペラロッドで押さえながら、ジャックを壁に叩

きつける。

ジャック「うわっ！」

ネオエンペラロッドで首を押さえつけられるジャック！

ゾフィー「でやあ！」

ゾフィーがネオエンペラ星人の背中を掴む。ネオエンペラ星人は掴むゾフィーに左肘でエルボーを喰らわし、よろめく、ゾフィーに右ストレートキックで吹っ飛ばす。

セブン「ジュワッ！」

セブンがネオエンペラ星人に向かっていき、回し蹴りをするも、あっさりネオエンペラロッドでガードされ、ネオエンペラロッドで胸を数回、つつかれ、ネオエンペラロッドでなぎ払われる。

エース「むんっ！」

エースは立ち上がりざまに、バーチカルギロチンを放つ。

ネオエンペラロッドでバーチカルギロチンを斬り、相殺させ、ネオ

エンペラロッドでカウンターの光弾を放つ。

エース「おおっ、んん！」

エースは光弾を喰らい、吹き飛ばされ、壁に張り付く。

タロウ「ブレスレットランサー！」

タロウがブレスレットからブレスレットランサーを作り、ネオエンペラ星人に向かって投げる。

ネオエンペラ星人「おっと！」

ネオエンペラ星人はブレスレットランサーを回避し、そのブレスレットランサーに光線を当てて、タロウに向かうようにする。

ブレスレットランサーがタロウに向かって飛んでくる。もちろん、ブレスレットランサーはタロウの腕に戻ろうとしておらず、タロウを狙っている。

タロウ「ぬっ！」

タロウはウルトラ念力でブレスレットランサーの動きを止め、そのまま自分の腕に戻す。だが、

ネオエンペラ星人「どらあ！」

ネオエンペラ星人はブレスレットランサーを回収する際、隙を見せたタロウに向かって数発の光弾をエンペラロッドからタロウ向かってに放った。

タロウはタロウバリアを張るも、数発の光弾にバリアは耐えられず、バリアが破られる。

タロウ「うわああ、ぬうう！」

光弾はタロウに直撃。タロウは喘ぎ声とともに吹き飛ばされる。

ウルトラマン「シュワッ！」

ウルトラマンはネオエンペラ星人の動きを止めようと、両腕を胸の前でX字に組み、その場で回転を始める。ウルトラマンの特技、キヤッチリングである。

ウルトラマンが回転を始めると、ウルトラマンの体の回りからリング状の輪が数個現れ、ネオエンペラ星人に向かって飛んでいく。

それはゼットンバリアである。

八つ裂き光輪とアイスラッガーは共にバリアに跳ね返された。

ウルトラマンとセブンは動揺しながら、地面に降り立つ。

ウルトラマン「どういうことだ!？」

セブン「なぜ、ゼットンのバリアをやつは使えるのだ!？」

ネオエンペラ星人「私はお前達に倒されていった、幾多の怪獣達の放っていたマイナスエネルギーで復活した。故に私の体の中にはその怪獣達のエネルギーが流れているために、怪獣達の特殊能力も使えるのだ。」

ウルトラマン「なんとゆうことだ。」

セブン「この身体能力に他の怪獣達の特殊能力とは…。」

ネオエンペラ星人「とりあえず、さらばだ。」

ネオエンペラ星人は両手からゼットンの技である一兆度の火球をはなつた。

赤い火の玉がウルトラマンとセブんに飛ぶ!その球は早く、そして大きかった。

ウルトラマンとセブンはそれを回避できず、

ウルトラマン&セブン「うわああああ!!!!」

空中にいた二人は一兆度の火球を喰らい、勢いよく地面に落ち、倒れこんだ。

ジャックがネオエンペラ星人の後ろに回り込み、

ジャック「死角をついてやる。シュワツ！」

ジャックは腕を十字に組んで、スペシウム光線を放つ。

水色の光線がネオエンペラ星人に向かう。スペシウム光線は決まる
と思っただが、

ネオエンペラ星人の背中になにやら、不思議な口のようなものが出
現。それはスペシウム光線をあっさり吸収してしまった。

ジャック「なに!?!それはまさか…!」

ジャックは動揺した。さらに、ネオエンペラ星人がスペシウム光線を吸収する時に見せた口のようなものは見たことがあったのである。

ネオエンペラ星人「そうだ、ベムスターの腹部だ。」

そう、なんとネオエンペラ星人は背中にベムスターの腹部を張り、スペシウム光線を吸収したのだった。

ネオエンペラ星人「おまけだ、あびておけ!!」

ネオエンペラ星人はベムスターの腹部からスペシウム光線を跳ね返しジャックに攻撃する。

ジャックは回避するも、そのスペシウム光線は壁にあたり、その壁が爆発し、爆炎がジャックに飛ぶ

ジャック「うわっっっ!!」

ジャックは爆炎をうけ、うつ伏せに倒れた。

A「ヤアア!!」

Aはエースブレードを出し、ネオエンペラ星人に向かっていく。

ネオエンペラ星人「剣か、おもしろい！」

ネオエンペラ星人はネオエンペラロッドをネオエンペラソードに変え、切りかかってきたエースのエースブレードを止める。

エース「ぬんんん!!!」

エースとネオエンペラ星人の剣技のバトルが続く。

互いに剣を交えるたびに火花が飛ぶ。

だが、エースの振り抜きが一瞬遅れ、

ネオエンペラ星人「そらっ！」

ネオエンペラソードがエースブレードを空中に振り飛ばす。

宙に舞うエースブレードはエースの後ろの地面に刺さった。

エース「くっ！」

エースはあせる！

ネオエンペラ星人「どらあ！そらあ！だらあ！」

ネオエンペラ星人はネオエンペラソードを鞭形態、ネオエンペラウ
イツプに変える。

ネオエンペラウイツプには強力な電流が流れておいる。そのためネ
オエンペラウイツプは光を帯びていた。

ネオエンペラウイツプを振り回し、エースを痛めつけるネオエンペ
ラ星人。

ネオエンペラウイツプがエースを痛めつけるたびにエースの喘ぎ声
がとぶ。

エース「おわあああ！！んんんんっ」

ネオエンペラウイツプは最後にエースに巻きつく。巻きついたその
光を帯びた鞭は感電させるがごとく、強力電流を流す。

エース「おっ、おわああああ！！」

強力電流を流されたエースも他のウルトラ戦士同様、倒れこんでし
まう。

タロウ「たああ！！」

ゾフィー「シュワッ！」

タロウとゾフィーはそれぞれ、左、右の壁を走りながら、ネオエンペラ星人に向かう。

ネオエンペラ星人は尾骨から尻尾を生やした。その尻尾はそう、古代怪獣ゴモラの尻尾である。

ゴモラの尻尾を振り回し、ゾフィーを狙う。

ゾフィーは突然の攻撃に対処できず、尻尾攻撃をくらい、そのまま壁に叩きつけられた。

タロウ「ゾフィー兄さん！」

タロウが尻尾を捕まえる。だが、その尻尾からなんと高圧電流が流れる。

タロウ「うわあああ！」

タロウが膝を落として倒れる。

それを見た、ウルトラマンとセブンは立ち上がりながら、

ウルトラマン「なんだ、今は!？」

セブン「ゴモラの尻尾には電撃の能力はなかったはず！」

ネオエンペラ星人「アツハツハツハツハ。私の特殊能力は怪獣達の能力をコピーするだけではない。怪獣達の特殊能力を合体させることも可能なのだ。」

ジャックが立ち上がる

ジャック「どういうことだ!？」

ネオエンペラ星人「つまり、今はゴモラの尻尾にエレキングの電流の能力を加えたのさ。怪獣達の能力を合わせることにより、さまざまなコンボ攻撃が生まれるのさ。」

エース「くっ!ここまで厄介な能力を持つとは!」

エースが立ち上がりながら言う。すると、

ピコンピコンピコンピコンピコン

ゾフィー、ウルトラマン、ジャック、エース、タロウのカラータイマー。

セブンのビームランプが点滅を始めた。

タロウ「カラータイマーが点滅し始めた!？」

ゾフィー「この国での我々のエネルギーの消費は少ないはず!なぜだ?」

一方、他のウルトラ戦士や光の国の戦士達のカラータイマーも点滅を始めていた。

光の国の西側にいたレオ達のカラータイマーも点滅していた。

レオ「なんだ!？」

アストラ「レオ兄さん、これは!？」

ゼロ「なにがどうなってんだよ!？」

避難所にいた、80にも影響が。

80「なぜだ、カラータイマーが？」

U40で戦っていたジョーニース達も！

ジョーニース「カラータイマーの色が変わるほど、エネルギーの消費をしたつもりはないはずなのに…。」

マックス「でも、カラータイマーが点滅し始めたという事は…。」

ゼノン「我々のエネルギーも少ないという事…。」

他にもネオス達や光の国の戦士達もカラータイマーは点滅し始めていた。

戦士A「カラータイマーが…。」

戦士B「これは一体。」

各場所で戦っていたウルトラ戦士達も突然の事に動揺する。

ウルトラ6兄弟達も動揺隠せずにいる。

ウルトラマン「それだけではない。」

ジャック「か、からだが動かなく、なってきた…。」

セブン「しかも…体の色が銅色に変化して、きている。」

エース「なにが、どうなっている…んだ。」

ウルトラ6兄弟達は苦しそうに言葉を交わす。

???「その答えは、私から説明しよう。」

ウルトラ6兄弟とネオエンペラ星人が声のした方に目をやる。

数色の光が集まり、その光の中からヒッポリット星人が現れた。

エース「お前はヒッポリット星人!!」

ヒッポリット星人「久しぶりだな、ウルトラマンエース。私もマイ

ナスエネルギーを与えられ復活させてもらったよ。まあ、私の場合はレイブラット星人により40年前には復活させてもらったがな。」

エース「ならば、なぜこの40年姿を見せなかった。」

ヒッポリット星人「今回の計画のため私はヒッポリット星で身をひそめていたのさ。」

エース「なに、どういうことだ!?!」

ネオエンペラ星人「私も今の状況は理解できない。説明しろ。」

ヒッポリット星人「いいでしょう。私は復活後、レイブラット星人の言われた通りバルタン星人やヤプール、メフィラス星人が作りあげたCCO、COSMIC（宇宙）、CRIME（犯罪）、ORGANIZATION（組織）に入った。」

タロウ「CCO!?!」

セブン「我々の知らないところでそのような組織が作られていようとは...。」

ヒッポリット星人「それから、全ては今日の日のため、ヒッポリッ

ト星に住む我々全ヒツポリット星人は、遂に…「ヒツポリットエネルギーパネル」を完成させたのだ。」

ゾフィー「なんだそれは??」

ヒツポリット星人「「ヒツポリットエネルギーパネル」は我々ヒツポリット星人達のエネルギーをそのパネルに与え、反射させた対象物をタール漬けにしてブロンズ像にしてしまうのさ。」

ウルトラマン「なんだと!?!」

ヒツポリット星人「そして、今回のそのヒツポリットエネルギーパネルの対象、それはこのM78星雲とゆうわけだよ。ワツハハツハハツハハツハ。」

セブン「この星事態をタール漬けにする気か!?!」

ネオエンペラ星人「アツハツハツハツハ!!派手にやるではないか、ヒツポリット星人よ!」

ウルトラマン「つまり、M78星雲に今いる我々にそのヒツポリットエネルギーパネルの影響が来ているとゆうのか??」

ヒツポリット星人「そういうことだ。ヒツポリットエネルギーパネルは対象物だけでなく、対象物の中に存在するものまでタール漬けにする。」

ウルトラ兄弟達の体はどんどん銅色になっていく。

ジャック「くっ！ばかな！？そんなことできるはずはない！この星の質量を考えてみる！」

ヒッポリット星人「そう！普通では、そんな一つの星、惑星をタール漬けのブロンズ像にするなんてできはしない。だが、もしお前達の星にこのヒッポリットエネルギーパネルを生かすことのできるものがあるとしたら！？」

ゾフィー「なに、なんだそれは！？」

ヒッポリット星人「プラズマスパークコアさ！」

エース「なに！」

ヒッポリット星人「あれは、この星では太陽のような働きをしていて、この星を支えるエネルギー源となっている。

だから、我々はヒッポリットエネルギーパネルの対象物をプラズマスパークコアに置き、プラズマスパークコアをタール漬けにすることで、それを源に生きているお前達やこの星は、そのプラズマスパークコアが発したエネルギーによってタール漬けになると考えたのだ。」

ジャック「なんとゆうことだ。」

ヒッポリット星人「ハッハハッハハッハ！プラズマスパークコアはヒッポリットエネルギーパネルに受けた影響をそのままお前達に反映させるだろう。」

エース「くっ！」

ヒッポリット星人「お前達は自らの命の源の発しているエネルギーによって死ぬのだ！しかも、そのプラズマスパークのエネルギーで生きていない我々CCOや怪獣達には当然影響はないのだ！」

タロウ「はっ！でも父さんや母さんがプラズマスパークの近くにいきつと止めてくれる！」

ヒッポリット星人「やつらはプラズマスパークコアの異変に気づいているだろうが、

ヒッポリットエネルギーパネルのことまでには気づかないであろう。」

ウルトラマン「タロウ、父達にヒッポリットエネルギーパネルの事を知らせて破壊させるようウルトラサインで伝えるのだ。」

タロウ「はい！」

ヒツポリット星人「おやおや、ウルトラの父達を行かせたら、その間に我々はプラズマスパークコアを奪いとってしまっぞ！そしたら、お前達の星はタール漬けにはならないが、氷漬けにらなるだろうな！」

ネオエンペラ星人「アツハハツハハツハハツハ！まさか、そこまで計算済みとは！ヒツポリット星人よ、見事だな。」

エース「ならば、他のウルトラ戦士に頼めば！」

ヒツポリット星人「ハツハハツハハツハ。他のウルトラ戦士ももうお前達と同様動けないはずだ。」

ピコピコピコピコピコピコピコ

ウルトラ兄弟達のカラータイマーの点滅がはやくなってきた。また、ウルトラ兄弟達の体の色もブロンズ像のように銅色になっていく

ヒツポリット星人「さて、私はヒツポリットエネルギーパネルの状態を見てくるから、これで失敬するよ。貴様らの死に様をみれないのは残念だ！！ハツハハツハハツハハツハ！！」

ヒッポリット星人は勝ち誇ったような果敢な笑い声を上げながら、消えていった。

セブン「待て！くっ、仮にこの星がタール漬けにされたら、タールの重さがこの星に加算され、この星は引力の重さでは耐えきれず落下してしまうではないか！そうなれば、宇宙全体が…。」

ウルトラマン「もう、だめだ…。」

ジャック「くそっ！」

ウルトラマンとジャックのカラータイマーの点滅が消えると同時に二人はタールにまみれたブロンズ像になってしまった。

セブン「うわあ！」

エース「おわあ！」

ゾフィー「ぬんん！」続いてゾフィー、エース、セブンもブロンズ像になっていく。

残りブロンズ像になるのはタロウだけになってしまった。

第9話 M78星雲、最期の時（前書き）

ついに……M78星雲が……。

第9話 M78星雲、最期の時

メビウス「シエアツツツ!!!」

メビウスのメビウムシュートがインペライザーを貫く。

地球を去ってから40年、メビウスの能力はかなり上がっており、メビウムシュートもインペライザーを粉砕できるまでの威力になっていた。

インペライザー軍団を全て粉砕した、メビウス。

メビウス「ハアハア、インペライザー軍団、強くはなかったが、思いね他数がいたな。そんなことより、急がなくては！」

メビウスはM78星雲に向かって飛び立とうとした。

????「あ、メビウス!!!」

メビウスは振り返る。そこには怪獣墓場で死闘を繰り広げたウルトラマンパワードとウルトラマングレートの肩を担いでいるウルトラマンゼアス

ウルトラマンチャックとウルトラマンスコットを担いでいるウルトラマンナイス

そしてウルトラマンベスを担いでいるウルトラマンボーイがいた。

メビウス「ゼアスにナイス！あと、君は…。」

ボーイ「ウルトラマンボーイです。」

メビウス「いったいこれはどうゆう…。」

ゼアス「メビウス大変なんだ！今、M78星雲や僕の故郷、Z95星雲は怪獣達に襲われている。僕とナイスは偶然、M78星雲にいて、ゾフィー隊長からパワードさん達の救出に向かうように頼まれたんです。」

ナイス「そして、僕とゼアスは怪獣墓場へパワードさん達を救出に向かった。宇宙で迷子になっていたこの子も途中で拾ってね！」

ボーイ「なんか、迷惑かけちゃったみたいでごめんなさい！！お母さんがお小遣いくれなくて、家出したら、M78星雲は大変なことになって、僕もいつのまにか迷子になって…。」

メビウス「あはは。でも無事なら良かったよ！さあ、早くM78星雲に帰ってお母さんの下へ行こう！」

ボーイ「はい！！」

チャック「メビウス、急ごう！」

ウーマンベス「事態は一刻を争うわ。」

スコット「さあ、行こうぜ！」

メビウス「はい！！」

メビウス達は全員M78星雲に向かった。

M78星雲の中に入ったメビウス達。なんと、目に入る者が次々とあえぎ声と共にブロンズ像になっていくではないか。

パワード「おい、大丈夫か！」

ゼアスの肩を離れ、ブロンズ像になったウルトラ戦士にパスワードが話しかける。

しかし、ブロンズ像になったウルトラ戦士に反応はなかった。

グレート「まさか、こんな。」

ゼアス「ウルトラ戦士全員…。」

ゼアスが言いかけた瞬間にメビウスが

メビウス「違う！兄さんや他の人達はきつと無事だ！僕がそれを確かめてくる。」

メビウスはそう言い放つと一人でどこかへ飛んでいった。

ナイス「メビウス…。」

チャック「だが、私もメビウスと同じ気持ちだ。ウルトラ兄弟や他の戦士はそう簡単にはやられないさ。」

ボーイ「そうですね。」

ベス「信じましょう。」

スコット「ああ！」

グレート「とりあえず、今は我々にできることをしよう。」

パワード「この星の状況を把握しよう！なぜ、ウルトラ戦士がター
ル漬けなのかを！」

???「そうはいかない!!！」

謎の声がした。

パワード「誰だ!!???」

謎の声「ふん、残念ながら君達もゲームオーバーだ。」

なんと、いつのまにかグレート達は透明なカプセルに閉じこめられていた!!!

スコット『こ、これは!!!』

ヒッポリット星人が現れた。彼が謎の声を発していたのである。

ヒッポリット星人は気配を消し、ウルトラ戦士の間を付いて、透明なヒッポリットタールに閉じ込めたのである。

ゼアス『う、うごけない。』

チャック『それだけじゃない!!!』

ウーマンベス『すごい勢いでエネルギーがなくなっていく!!!』

グレート達のカラータイマーが点滅を始める。

ヒッポリット星人『くっくっくっく!!ウルトラ戦士は一人も逃がしはしない死ねえ!!!』

グレート達『うわあああああああ!!!』

グレート達の喘ぎが響く。

カプセルが解かれるとそこにはブロンズ像になった、ウルトラ戦士達がいた。????『そうはいかない!!!』

謎の声が出た。

パワード『誰だ!!???』

謎の声『ふん、残念ながら君達もゲームオーバーだ。』

なんと、いつのまにかグレート達は透明なカプセルに閉じこめられていた!!

スコット『こ、これは!!!!』

ヒッポリット星人が現れた。彼が謎の声を発していたのである。

ヒッポリット星人は気配を消し、ウルトラ戦士の間を付いて、透明なヒッポリットタールに閉じ込めたのである。

ゼアス『う、うごけない。』

チャック『それだけじゃない!!』

ウーマンベス『すごい勢いでエネルギーがなくなっていく!!』

グレート達のカラータイマーが点滅を始める。

ヒッポリット星人『くっくっくっく!!ウルトラ戦士は一人も逃がしはしない死ねえ!!!!』

グレート達『うわああああああああ!!』

グレート達の喘ぎが響く。

カプセルが解かれるとそこにはブロンズ像になった、ウルトラ戦士達が入った。

メビウスはプラズマスパークタワーに着いた。

急いで中に入る。

メビウスは絶望とゆう2文字で表されるような光景を目の当たりにする。

そこにはタール漬けになったゾフィー、ウルトラマン、セブン、ジヤック、エースの姿があり、

カラータイマーが消えかけ、顔までタールの色化していても必死に耐えているタロウの姿だった。

タロウの体の周りから炎が噴き出している。タロウはウルトラダイナマイトを応用させ、体にバリアを張り、タール漬けを防いでるようだ。

しかし、タロウの体は限界に近づいていた。

メビウス「タロウ教官!!」

メビウスがタロウに向かって走る。

タロウ「メビウス!!」

タロウは安心したかのような返事を返す。

メビウス「タロウ教官、この状況はいつたい!? エンペラ星人が復活したってどうゆうことなんですか? 奴らの目的はいつたい!?!」

メビウスの質問攻めする。タロウは手短に一連の流れを話す。

タロウ「今はこんな状況だ。とりあえず、私達のブロンズ化を解き、エネルギーを分け与えてくれないか。」

メビウス「はい!」

メビウスがタロウ達にエネルギーを与えようとした瞬間、

メビウス「うわあああ!」

メビウスの背中に火炎弾が直撃する。

タロウ『メビウス!』

タロウが叫ぶ。

その火炎弾を背中に喰らい、倒れるメビウス。

メビウスが振り向く。そこにはネオエンペラ星人がいた。

メビウス「エンペラ…星人なのか…。」

ネオエンペラ星人「久しぶりだな、ウルトラマンメビウス。40年ぶりの再会といったところか。」

タロウ「メ……………ビ…ウ……………ス。」

タロウのカラータイマーも消え、ついにタロウもブロンズ像になってしまった。

メビウス「タロウ教官！……！！くっ、ネオエンペラ星人！お前の好きなようにはさせない！まだ僕達には『最後の光』がある。今すぐ『最後の光』を解き放ち、ウルトラ戦士達を復活させてみせる。」

???「そうはいきませんよ、ウルトラマンメビウス。」

ネオエンペラ星人の後ろからさらに声がした。

メビウス「誰だ!?!」

メビウスが言っていると4つの影が姿を表す。

それはメフィラス星人、デスレム、グローザム、ヤプールであった。そうかつての暗黒四天王達である。

メビウス「お前達まで復活したのか!？」

グローザム「レイブラッド星人の力、そして長年集められた大量のマイナスエネルギー!それらが、合わさり我々は復活した。」

デスレム「はっはっは!我々の復活、そして怪獣達が手の組んだ組織、そして、M78星雲の今の状況!もはや、全宇宙は我々の者よ。」

メビウス「しかし、お前ら暗黒四天王までなぜこのプラズマスパークタワーに!？」

ヤプール「我々はレイブラッド星人に命令されたことを一つやらなければならぬ。」

メビウス「なんだ、それは!？」

メフィラス星人「M78星雲のプラズマスパークタワーにある『最後の光』を消し去ることさ。」

メビウス「なんだと!？」

グローザム「この星がヒツポリットエネルギーパネルのエネルギーにより、タール漬けになるのは近い。」

デスレム「だが、この星の『最後の光』はこの星に奇跡をもたらすと言われている。」

ヤプール「だから、その奇跡と呼ばれる物を処理しに行くのさ。」

メフィラス星人「とりあえずメビウス、そこをどいてくれるかい！」

メフィラス星人はメビウスに怪光線を放つ。

メビウス「シュワツ!!」

メビウスもメビウムショットで対抗する。だが、

グローザム、デスレム、ヤプールも怪光弾を放ってきた。

メビウス「うわああああ!!!!!!!!」

暗黒四天王達の攻撃を受け、メビウスは吹き飛ばされた。メビウス

は立ち上がろうとするも、立てなかった。

ネオエンペラ星人「貴様はそこでタール漬けになりながら、甘美な光景を見ているといい！」

ネオエンペラ星人はメビウスにそう言い、暗黒四天王を連れ、最上階への階段に登っていった。

プラズマスパークタワー最上階。

そこにはタール漬けになりそうなウルトラの父と母がいた。

父「くっ！もう動けなくなってきました。だが、ここを離れるわけには。」

ウルトラの父がもがき苦しんでいる。

ウルトラの母「ケン……。」

ウルトラの母ももがき苦しみながら父の名を呼ぶ。

ネオエンペラ星人「久しぶりだな、ケン、マリー」

ネオエンペラ星人が暗黒四天王と共に階段を上り、やってきた。

ウルトラの父「エンペラ星人！！はっ、兄弟達は！？」

ネオエンペラ星人「ふっふっふ、貴様のかわいい6人の部下達は下の階でタール漬けになったよ。」

ウルトラの母「そんなタロウ達が！」

ウルトラの母が悲壮感を込め、言う。

ネオエンペラ星人「『最後の光』を潰させてもらっ。」

ウルトラの父「そうはいかない！私が『最後の光』を解き放ち、ウルトラ戦士を復活させる。」

だが、ウルトラの父の体はほぼ動かなかった。

ネオエンペラ星人「その体でなにができる??」

ウルトラの父「黙れ！！」

ウルトラの父は苦し紛れに腕をL字に組み、ファザーショットを放つ。

だが、狙いも定まっていないファザーショットをネオエンペラ星人はあっさり回避。

ネオエンペラ星人「さあ、これで終わりだ。ネオエンペラ星人が近づき最後の光を取ろうとする。」

ウルトラの母「やめなさい！」

ウルトラの父「やめろお！！」

ネオエンペラ星人が最後の光を手にしようとした時、謎の光がネオエンペラ星人の手を打ち抜いた。

ネオエンペラ星人「ぐっ！何者だ。」

父「はっ！あれは！？」

天井にウルトラマンキングが現れた。

ヤプール「ウルトラマンキングー!!」

キング「これ以上お前達の好きなようにはさせん!!」

キングは手のひらから光線を放つ。

ネオエンペラ星人達「ぐわああ!!」

メフィラス星人「う、動けない!!」

デスレム「くっくっ!!くそっ!!」

グローザム「このままでは『最後の光』が!!」

ネオエンペラ星人「私の超能力を持ってしてもこの光線の効力を解けないのか!!」

父「キング、今です!!『最後の光』を解放させ、ウルトラ戦士を!!」

キング「うむっ!!」

ネオエンペラ星人「くっ！おのれええええ！」

キングが『最後の光』を手にしようとした。その瞬間。

キング「くっ！これは!？」

キングが動けなくなる。

キング達の前に光があつまる。そう、今回の事件の発端である、レイブラッド星人が現れた。だが、肉体は滅んでいるからなのか、まるで映像のように精神体のみ現れた。

キング「レイブラッド星人!!」

レイブラッド星人「ウルトラマンキング、私の計画を邪魔しないでください。この『最後の光』を解き放ち、この星を死の星にする計画をな！」

レイブラッド星人はネオエンペラ星人達の方を向き

レイブラッド星人「ネオエンペラ星人よ、『最後の光』を破壊し、この星を完全にタール漬けにするのだ！」

レイブラッド星人が手から放った光線はネオエンペラ星人と暗黒四

天王達を動けるようにした。

父「ばかな！やつらの動きを封じていたキングの光線を解放しただと！」

レイブラッド星人「ふん、いくら伝説の超人と言われた貴様も歳をとるにつれ、能力は落ちたようだな！」

キング「くっ！」

ネオエンペラ星人「ふっふっふ、形成逆転だな！待っている、貴様達を完全にタール漬けにしてやる。」

レイブラッド星人「ネオエンペラ星人よ、あとは任せたぞ。」

そういうと、レイブラッド星人は消えた。

メビウス「待て！！！」

全員の後ろから、メビウスが駆けつける。しかし、体はボロボロでカラータイマーも点滅を始めていた。

父「メビウス！！！」

メビウス「お前達の好きにはさせない！」

メフィラス星人「ええい、うつつしい！」

メフィラス星人は怪光線をメビウスに向かって放つ。

メビウス「んんん!!! シュワツツツツ!!!」

メビウスの体が真っ赤に燃えたぎる。メビウスは傷ついた体ながら、バーニングブレイブの姿になる。

メビウスに向かって放たれた怪光線はその爆炎とともに弾きとばされた。

メビウス「はあああ!!! でやあ!!!」

メビウスが体の前で赤いエネルギー玉を作る。メビュームバーストである。

炎をまとったメビュームバーストが暗黒四天王達に向かって飛んで行く。

グローザム「甘い!!!」

80やユリアン達や近くにいる子供達。そして、ジョーニアス、マックスにゼノン、レオ、アストラ、ゼロ、メビウスの親友のヒカリもどどんブロンズ化していく。

メビウス「みんな…。」

メビウスのカラータイマーの点滅が早くなり、メビウスの体は銅色になっていく。メビウスの頭にウルトラ戦士たちと同時に一緒に戦った元G.U.Y.Sのメンバーの顔が頭をよぎる。ほんとであれば、今日からメビウスは久しぶりに仲間たちと再会する予定だったのだ。ゾフィーから地球への許可をもらった時心踊る気持ちだったのだ。でも今は……。メビウスの目から涙がこぼれた。

ネオエンペラ星人「全員ブロンズ化して地獄へと行くんだ。お前も兄弟と共に死ねて幸せだろ。さらばだ、メビウス！いや、全ウルトラ戦士達よ。」

ネオエンペラ星人が話し終わる頃にはメビウスもブロンズ化していた。

ネオエンペラ星人は水晶の玉でM78星雲を一通り見渡す。

ネオエンペラ星人「生き残りはいないみたいだな。四天王達よ、これからは再び我らの時代だ！！我らが宇宙を支配するのだああ！

！」

四天王達「はっ！！！」

ネオエンペラ星人「星自体はブロンズ化してないから星が落下することはないし、ウルトラ戦士は全員始末したが、万が一だ。四天王達よ、この星に近づけさせないようにこの星にバリアを張っておけ！」

四天王達「はっ！」

ネオエンペラ星人「ウルトラマンキングの投げたビームは気になるが、まあいい。まずは、因縁の星、地球に怪獣達を送りこんで、地球人達を絶望させるか！」

ネオエンペラ軍団の宇宙支配作戦が始まる。ウルトラ戦士達にそして地球人達や他の宇宙人達に明日への希望はあるのだろうか！！！？！？？

番外編、地球の現在の状況や歴史の説明（前書き）

今回はストーリーはなく、僕のこの小説での世界観について書かせていただきます！僕がつくったパラレルワールドなので、世界観ではつじつまがあわないところがありますが、まあよろしく願います！

番外編、地球の現在の状況や歴史の説明

しょうせ　　（地球の歴史）

2007年　　メビウスが地球を去る

2010年　　新たな防衛チーム、科学警備隊が作られる。GUY Sは解散するが、GUY Sで貢献した人物はそのまま科学警備隊の上層部に配属になる。

ウルトラマンジョーニアスが侵略者から地球を守る。（ジョーニアスの原作）

2011年　　ウルトラマンジョーニアス地球を去る。

2013年　　オーストラリアを防衛しているUMAとウルトラマングレート地球を防衛。オーストラリアに現れた怪獣達やゴードスと戦う。

さらにそのあと、ウルトラマンパワーも現れる。アメリカを中心にアメリカ防衛チームW・I・N・Rと地球を守る。（グレートとパワーの原作）

2014年　　グレート、パワー、地球を去る。

また、この時日本では科学警備隊からチーム名はHEARTになる。

2017年 ウルトラマンチームが地球を守る（ウルトラマン
USAの原作）

2017年、ウルトラチーム地球を去る。

2013年から2017年は海外で怪獣出現が多くなる。

2018年ウルトラマンネオス、セブン21がザム星人の魔の手か
ら地球を守る。（ウルトラマンネオス原作）

2019年、ネオス、セブン21、地球を去る。

小さな平和を守るため、小さな防衛チーム、MYDOとGOKAZ
OKU隊が誕生。

2022年 ウルトラマンゼアス、ナイスが地球を守る。（ゼアス、
ナイスの原作より）

2023年、ゼアス、ナイス、地球を去る。

防衛チーム、DASH誕生。HEARTからDASHにチームが変わる。

2026年ウルトラマンマックス、DASHと共に、地球を守る。
(マックス原作より)

2027年、マックス、地球を去る。

全地球上の防衛チームを、海外などとは問わずすべて統合することが、地球連合会議で決まり、地球防衛連合TPCが誕生する。本部は日本に置かれ、地球を防衛する中心チームGUTSが誕生する。地上の異変や海洋の異常を主に担当する。

2040年、TPCは気象観測や空の生物を取り締まりGUTSをサポートする用の防衛系列チームXIG(発足後の主な仕事は地球の気象を正確に調べたり、日本以外の海外の分野に携わったり、また自然に関する調査(山や川や海洋など)に携わることもこのチームが担当をしている。)をつくり、さらに天才の人間達が集まり、XIGをサポートするアルケミスターズが誕生。

2041年、TPCは地球上生物、異性物、古代生物を保護するチームEYES(発足後の主な仕事は、地球の生物の研究、地球の動物・植物の保護や治療または生物の医療研究、動物園や植物園の仕事にも携わっている)を系列部隊でつくる。

2044年、TPCは、チームEYESが保護できない微生物や平和を乱す人間や宇宙人を処罰する、TPC系列チームTLTをつくる。さらにその任務全うのため、少数精鋭部隊ナイトレイダーが誕生。しかし、ここ数年は微生物や宇宙人は出現していないので、発足後は主に全チームのサポート、また宇宙に関係する調査もこのチームが担当している。ちなみにTLT兼ナイトレイダーは基本的に表ざたに出ることはないため、一般人には認知されていない。

2027年から今現在の2047年までの20年間は地球上では怪獣は現れていない。

地球は平和な時が流れている。

第10話 2047年、地球（前書き）

いよいよ、本格的になっていきます！てか更新頻度は急激にあがり
ましたね！笑

第10話 2047年、地球

目覚まし時計がなる。あくびをしながらゆっくり目覚ましを止める。

大悟「ふああああ！朝かあああ。」

僕は目覚ましを止めたら、顔を洗い、トーストの用意をした。朝は最近ずつとこうだから、なんか脳より体が勝手に動いてる感じた。

僕は円 大悟。23歳、3月3日生まれのA型。なんかほのぼのした朝の過ごし方をしているが、これでも一応GUTS隊員だ。

20年怪獣は現れていないが、地球を守るのが僕達の使命。パトリールはもちろん、異常はないかの監視など。徹夜なんて当たり前である。でも地球を守る仕事をしてるんだ。当たり前である。

昨日はちょうど仕事は休みで羽を伸ばし、体力回復！そしてまた今日からまた仕事再開である。

僕はトーストを口にくわえながら、GUTSの隊員服に着替え、GUTSの作戦室に向かう。

????「おはよー！大悟」

僕が作戦室に入るとすぐに女性が話しかけてきた。

柳瀬レナ、ショートの髪雰囲気も今風な女の子だけど、操縦は多分僕よりうまいし、正義のパワーもある。ただ、たまによくわからんことでおこるんだよなあ。

大悟「おはよー、レナ」

僕はレナにあいさつを返す。

レナ「昨日休みだったよね、なにしてたの??」

大悟「まあ、いろいろだよ。」

レナ「なにしてたのよ、女の子とデートとか?」

大悟「いや、それはないよ。」

レナ「どうだが!」

そんないつものようにレナと話していると二人の男性隊員が作戦室に入ってきた。

一人目のぼつちやりした隊員は堀井正美隊員。

GUTS内のメカニック担当である。天才的なアイテムをつくってGUTS戦力にかかせない人だ。普段はノリがよく明るい、生粋の関西人だ。

もう一人の背の高い男前な人は新庄哲夫隊員

GUTS隊員一の熱血漢で、レナと同様にパイロットとしての実力はトップクラスだ。ちなみに妹の真弓さんもGUTSの医務室で働いている。堀井隊員とはでこぼこコンビだ。

新庄「よっ、大悟！昨日は休暇だったみたいじゃねえか！いいよな、休暇…。」

おれもはやく休暇とりたိぜ。」

堀井「アホウ！お前は2日前に休暇とつたばつかやないかい！」

新庄「ふん、GUTSのエースパイロットはプレッシャーを誰よりも感じて疲れやすいのさ。」

堀井「なにがエースパイロットや！この前のGUTSウイング射撃

訓練では大悟やレナに負けとったやないか！」

新庄「あ、あの日は胃の調子が悪かったんだ！お前なんて、あの日は最下位だったじゃねえか！普段はバックアップで前線にはでないはずの矢住にだって負けてたしな！」

堀井「なんやとっ！！！」

????「二人ともよしてくださいよ！！！」

作戦室の大型コンピューターの位置から少年が立ち上がる。

大悟「矢住、来てたのか、会話に夢中で気づかなかったよ。」

矢住「大悟さん、おはようございます。いえ、いいんですよ。ちょうど体の姿勢を低くしてたので見えなかったんでしよう。」

彼は矢住 純 18歳でGUTSのコンピューター制御のバックアップに配属した天才プログラマーだ。異常地帯の場所などは彼がコンピューターから正確な位置を割り出す。普段は温厚で優しい少年だ。

矢住「僕が前にGUTSウイング射撃訓練で成果が出せたのは偶然ですよ！」

レナ「しかも、矢住隊員はあまり前線にでてなくても、もともと射撃能力は高いのよね。」

矢住「レナさん、ありがとうございます！！レナさんにそう言ってもらえるなんて嬉しいです。」

新庄「なんだよ、みんなで堀井の肩もつのかよ！！！！ひどいぜ、みんな。」

一同「あっはっはっはっは」

そんな日常的な会話していると、隊長と副隊長が入ってくる。

入間恵 隊長 防衛チームには珍しいGUTSの女性隊長だ。責任感、正義感は強く、僕達は隊長を信頼し、隊長もまた僕達を信頼してくれている。

宗方 誠一 副隊長 GUTSの副隊長。副隊長ではあるが、事件現場では僕達のリーダーである。だから、僕らもリーダーと読んでいい。普段、表には出さないが、とても仲間思いで、僕達を信頼してくれている人だ。

宗方「みんな、揃ってるみたいだな、おはよう。」

大悟達「おはようございます。」

人間「さっそくですけど矢住隊員、ここに書いてある文字を解析して。」

そういつて人間隊長は右手に持っていたB5サイズ of 用紙を矢住にわたした。

矢住「わかりました。」

矢住は紙を受け取り、コンピューターで解析を始めた。

レナ「隊長、なんですか、今の紙は??」

人間「今から一時間前、TPCの衛星通信が宇宙から謎の信号を受け取ったのよ。誰がどこでどうやって発信してきたかはわからなかった。しかも、書いてある文字も意味不明のものだったわ。」

堀井「GUTSの衛星通信にあまり情報を与えず、送るとはな!送ってきたやつ、相当のコンピューター系に強いで!」

新庄「そうなのか!??」

堀井「衛星通信になにかしらの信号を送るときその信号以外にも必ず通信方法や名前などになにかしらの手がかりが残るはずなんや！まあ、例外はあるけどな。」

新庄「例外！？」

堀井「地球圏からだいぶ離れた場所や星からなら、衛星通信も信号を受け取るが限界やろうな！」

大悟「つまり…宇宙人とかですか？」

堀井「まあ、そんなことは万に一つの可能性でしか…。」

矢住「いえ、どうやらその万に一つの可能性だと思いますよ。」

矢住が堀井隊員の言葉を遮るように言った。どうやら、解析が終わったようだ。

宗方「矢住、解析が終わったのか？？」

矢住「はい、今モニターに文字の訳文を映します。みなさん、席についてみてください。」

作戦室の真ん中には台形のような形をした大きなテーブルと二人一

人座るイスがある。作戦会議などをするときにはここに座り、みんなで話しあう。

矢住がモニターに訳文を映した。そこにはこう記されてあった。

「地球に危機が迫っている。宇宙人の侵略。防衛態勢をとれ。」

大悟「地球に…危機？」

人間「宇宙人の侵略？」

宗方「内容はこれだけか？」

矢住「いえ、実際はまだ文はあるんですが、だいぶ遠い星から送られたものなので、他の文字は解析が不可能でした。むしろ、この文ですら解析できたのは奇跡に近いんですから。」

人間「矢住君、説明を！」

矢住「はい。この文章はだいぶ地球から離れた星、予想ですが何万年も先の星から送られた信号だと思われます。これはしかも宇宙語ですね。先程も言ったように他星からの通信で間違いないようです。」

堀井「んなアホな…。」

新庄「でたらめじゃないか、これ？宇宙人の侵略とかよ！」

レナ「でも、他星の宇宙人がわざわざわたしたちにこんな信号を送ったのよ。そんなことするかしら？」

堀井「まあ、宇宙人言うても、いっぱいおるしな！いたずら好きな宇宙人がいてもおかしくないやろ。」

宗方「大悟はどう思うんだ？」

大悟「僕は…レナと同じ意見です。いくら宇宙人はたくさんいても、こんなことを冗談で使う宇宙人はさすがにいませんよ。それに、なんとなくですが、胸騒ぎがするんです。だから、僕はこの信号に従い、民間人を避難させ、防衛態勢をとったほうがいいと思われま

す。」

入間「そうね、大悟の言う通りね？とりあえず、防衛態勢を…」

「ファンファンファンファン」

入間隊長の言葉を遮るようにGUTSの警報装置がなる。

堀井「な、なんや！」

矢住「調べてみます。」

矢住はコンピューターで調べる。矢住の表情が険しくなった。

矢住「大変です！謎の宇宙人と怪獣が飛来し、街を破壊しています。これは、バルタン星人とベムラーです。かつて80年前、ウルトラマンと戦った怪獣達です。」

人間「矢住隊員、モニターに街の状況を！」

矢住「わかりました。」

矢住は作戦室のモニターに街の様子を移した。そこにはバルタン星人とベムラーが街を破壊している光景がうつる。街が無惨に破壊されていく。先程まで平和な時が嘘のようだ。その恐ろしさはモニターに映る街の人達の表情から伝わってくる

レナ「ひどい……。」

宗方「先程の信号で伝えた事はほんとだったんだな！」

新庄「くそっ、こいつらあ！！好き勝手に街を破壊しやかって！隊

「長早く行きましょう！」

矢住「場所は…神奈川県横浜市にある科学センター近くです。」

人間「矢住隊員は、自衛隊や警察に援護と民間人を安全な場所に避難させる申請を！レナ隊員はGUTSウイング1号機で、堀井隊員と新庄隊員は2号機で科学センターに向かい、怪獣を迎撃。リーダーと大悟隊員はシャーロックで科学センターに向かい、民間人の避難を！」

大悟達「了解！！！」

これがのちに僕の運命を大きく変える出来事とはこの時の僕はまだ……。

11話 目覚めよ！光の勇者（前書き）

めっちゃめっちゃ久しぶりに投稿です。最近も忙しくてなかなか投稿できませんでした。まあ、これからもマイペースに投稿（極力は早く登校していきます）のでよろしくお願いします。

11話 目覚めよ！光の勇者

僕はリーダーとシャーロックで現地に急行した。

街は火の海で建物も崩壊していき、その崩壊していく街の中で逃げ回る人達。その街をさらに絶望に追いやるのはバルタン星人とベムラー。バルタン星人はハサミから破壊光線を放ち、ベムラーは熱線で街を破壊していく。僕は3歳のころかすがだが、このように怪物が街を破壊する光景をかすがだが覚えている。3歳のころの記憶で曖昧だが、その時の気持ちは今でも覚えている。現地につき、僕の頭の中はそんなことを思っていた。

僕達はシャーロックから降り、そこにいる自衛隊員達と合流。安全地点を確認し、人々の避難を開始する。そこにレナ達の2機のGUTSウイングが到着する。

リーダーがレナ達に指示をだす。

「レナ、新庄、2体に攻撃だ！」

レナ達「了解！！」

GUTSウイング2機の攻撃が始まる。2機のビーム攻撃の雨が怪

獣達に浴びる。

新庄「さあ、どんどん行くぜえ！」

堀井「調子に乗って間違つて、街とか撃つなよな！」

新庄「ばあか！こうなつた時の俺が百発百中なのは知ってるだろう！」

GUTSウイング2号は積極的に攻撃していく。怪獣達も少しひるみ始めた。

バルタン星人「フオッフオッフオッフオッフ、無駄なあがきはよせ地球人たちよ！」

バルタン星人がしゃべりはじめた。

バルタン星人「地球人がどれだけ頑張つても我々には勝てん！」

バルタン星人はハサミから光線を放ち、2機のGUTSウイングを狙う。

なんとか回避する2機。ひるまず、攻撃していった。2人ともさがだなあ。

僕はリーダーとは別れ、一人で違う場所にいる人達を非難させていた。ふとした時だ、人々はこう言い始めた。

「ウルトラマン、助けてくれ！」

「ウルトラマン、怪獣達をやっつけて！」

怪獣達が現れて街を破壊し、人々が絶望の淵に立たされた時、M78星雲から来たヒーロー、ウルトラマンが怪獣を倒してくれる。バルタン星人はそのような地球人達の叫び声をきくと

バルタン星人「フォッフォッフォッフォッ、地球人達よ、残念だったな、ウルトラマン達は来ない。ウルトラマン達はみな死んだ。」

な、なにを言っているんだ。こいつは。

バルタン星人「貴様らはウルトラマン達に希望を抱いているようだが、一気に絶望とゆう名のプレゼントを与えよう。これを見るがいい！」

バルタン星人はそう言い、空に向かいハサミからビームを放ち、スクリーンのようなものをつくった。そこに流れた映像は……。

なんだ、あれは……。次々とウルトラマン達のブロンズ像が映像に流れた。ウルトラマン達もがき苦しみながら、ブロンズ像になっていったの読み取れるくらい痛々しい光景だ。

バルタン星人「この光景はすべて現実だ。ウルトラマン達は我々怪獣軍団が制圧し、ウルトラマン達全員をブロンズ像にした。ウルトラマンもセブンもメビウスもな！！もう生き残ったウルトラマンは一人もいない。」

人々のたくさんのかすれたような声が僕の耳をよぎる。

「マックスが……。」 「そんな、タロウ……。」 「ゾフィーまで。」
「ネオス……。」

僕は下唇を噛んだ。許せない、こいつらだけは、絶対に！

バルタン星人「フォッフオッフオッフオッフオッフ、地球人達よ、あきらめろ！安心しろ、我々が『支配』とゆう名の平和的な星を築き上げてやるさ。まずは、私の因縁の地、この科学センター付近を完全に破壊してしまおう！」

周りの人々は絶望に朽ちた表情をみせていた。

人間隊長の通信が入る

人間「レナ隊員、新庄隊員、攻撃を続けて！ウルトラマンがいたとしてもいなかったとしても、私達が……この星を守らなくちゃいけないの！」

レナ達「了解！！」

人間「リーダーも大悟隊員もシャーロックで攻撃に参加してちょうだい！」

宗形&大悟「了解」

僕はシャーロックに向かって走りだす。だが、一瞬の油断。ベムラーの熱線が僕に向かって放たれた。幸い、周りに人はいなかったが僕はそれをよけきれず、吹き飛ばされた。そして、僕の意識はなくなっただけ……。

夢……？ 現実……？ 見渡すかぎり光のようなきれいな場所だ。

僕があたりを見渡しもなにもなかった。

「????」よくきてくれました、大悟！」

振り返えると、そこには光の巨人が立っていた。この人もウルトラマンかな?でも、ウルトラマンはみなブロンズ像に…。

そのウルトラマンは、とても高貴な雰囲気をだし、まるで女神のような清楚さが醸し出されていた。目は赤色でどこか、ウルトラマンキングを思い出させる銀色のマントを羽織りついていた。

大悟「あなたは……いつたい???」

「????」私の名は、ウルトラマンクイーン」

大悟「ウルトラマンクイーン!?そんなウルトラマン聞いたことない。」

クイーン「無理もないでしょう。私は地球には現れたことはありませんしね。」

大悟「ここはどこでなぜ僕の前にあなたが?それに今の地球やM78星雲はどうなっているんですか?いろいろ状況がわかりません。」

たぶん、これは夢なのかもしれない。でも、夢とゆう感じではない。むしろどこかにつれてかれた気分だ。

クイーン「そうですね、時間もないようですので、ちゃんと説明していきます。今なにが起こっているのかも、ウルトラ戦士の状況も、そして私のことも。」

クイーンは僕にいろいろ話してくれた。ウルトラ戦士のブロンズ化のこと、エンペラ星人の復活とその組織についてを。

大悟「つまり、ウルトラ戦士がない今、宇宙を守るものがいなくなり、宇宙人達のやりたい放題なのか……。」

クイーン「はい！みんなタール漬けにされてしまいました。」

大悟「でも、あなたはタール漬けにされなかったんですか？」

クイーン「その説明を今からいたしましょう。」でも、今まで知らなかったとはいえ、キングがいたらクイーンもいなきゃおかしいよな。

クイーン「私はクイーン星にいました。するとキングが現れました。

「

大悟「え！？でもキングもタール漬けにされたのでは？」

クイーン「彼は、タール漬けになる前に魂をM78星雲にある「最後の光」に移したのです。そして、光になった状態で私の星を訪れました。」

大悟「なるほど、キングはタール漬けになる前に「最後の光」に魂だけわたしたのか。あ、じゃあGUTS基地に緊急信号を送ったのも！？」

クイーン「彼です。彼は限られた時間の中で、少しでも地球人に危機を知らせようと信号を送りました。そのキングの信号を拾ってくれたのがあなた達GUTSだったのです。」

大悟「そうだったのか……。」

クイーン「私は、現在のM78星雲のことについて、キングから話を聞きこの宇宙のこと、地球のこと、M78星雲のことをたくされたのです。そして、キングは「最後の光」の力で肉体を維持するのが限界を迎え、消えてしまいました。」

大悟「じゃあ、ウルトラマンキングは完全に死んだのか………？」

クイーン「いえ、彼は魂を「最後の光」に移したとはいえ、完全に移したわけではありませんし、タール漬けを直せばきっと生き返ります。」

大悟「しかし、なんでクイーンは宇宙人達から見つからなかったんだろう？」

クイーン「私の住むクイーン星は次元と次元の狭間にあります。現在、次元と次元を超えられる存在は全宇宙でも私だけなのです。それに、普段は宇宙のことはM78星雲のウルトラ戦士やキングが守り続けていました。だから、私はキングから次元と次元の管理や防衛を任されていました。なので、あまりこの次元には現れなかったのです。だから、見つけることができなかつたのでしよう。ちなみに、今あなたがいるここも次元と次元の狭間です。私が気絶したあなたの意識だけをここに連れてきたのです。」

次元と次元の狭間に住んでるとか、僕の意識だけを別次元に連れてきたとか…。普通じゃありえない話だけどな。

大悟「クイーン…」

クイーン「何でしょうか？」

大悟「まだ一番の疑問があるんだ……。なぜ、僕はここに呼ばれ

「たんだ？」

クイーン「……………」。

大悟「今までの話を聞いてそれを理解しても、それが僕がここに呼ばれるような理由とはつながらないんだ。いったいどうして?？」

クイーン「それは……………あなたが……………ウルトラマンだからです。」

僕は言葉を失った。クイーンは何を言ってるんだ。心に突き刺さった言葉を振り返っても聞こえた言葉は一つしかなかった。

僕が……………ウルトラマン？

大悟「何を言ってるんだ？」

クイーン「正確には別次元であなたはウルトラマンなのです。あなたは別次元では『ウルトラマンティガ』として地球を救っているのです。」

大悟「!!!!!!!!!!!!!!」

僕の頭に一瞬にかがよぎった。なんだ、今は……。『ティガ』…

…。

クイーン「どうかしましたか、大悟、一瞬険しい顔をしましたか？」

大悟「今、僕の頭の中に一瞬なにかがよぎったんだ！クイーンが『ティガと言った瞬間に。』」

クイーン「……クロスメモリーですね。」

大悟「クロスメモリー??」

クイーン「この次元の狭間では、見えないところでたくさんの記憶や想いが次元を通して流れています。そして、今いる自分と他次元の自分の記憶が交差し、まるで本当の自分の持つ記憶のようになる。それがクロスメモリーです。」

大悟「クロスメモリー……。」

クイーン「しかし、クロスメモリーはよほど、他次元の自分に影響がないと交差することはありません。他次元のあなたにとって『ティガ』はそれだけ、影響を与えたのですね。」

『ティガ』…… クイーンのゆうクロスメモリーの影響なのか、自分はティガを知っている。ティガの姿、ティガの能力、全てがわかる。

クイーン「やはり、あなたでしたね。これで、私の能力を発動できます。」

大悟「能力!!??」

クイーン「私は、次元を操るウルトラマンクイーン。私の能力の一つ、それはクロスメモリーを具現化できるのです。」

大悟「え!!!??」

クイーン「クロスメモリーを具現化することにより、別次元にある能力や力を他次元のものに移し、別次元のものがその能力などを使うことができるようになります。」

大悟「それは…つまり。」

クイーン「あなたにティガの能力を移します。」

大悟「でもそんなことして、次元は平気なのか?」

クイーン「確かに多少危険が垣間見られるかもしれませんが、でも、今はこの『クロスメモリー能力』に頼るしか方法はないのです。

さつきから、頭の中が混乱していた。クイーンとの会話をしてはいるが、状況は把握できていない。そもそも僕がウルトラマンだなんて。何時間も前の何事もなかった平和な時が嘘のようだ。

クイーン「大悟……………」

大悟「ん!？」

クイーン「もうすでに具現化は済みました。大悟……………この地球を、M78星雲を、宇宙を、そして…この世界を救ってください。」

大悟「具現化がもう終わったってなにもしてないじゃないか!？」

クイーンは微笑んだ。同時に辺りの視界が砂嵐のようにはやけ始めた。その見えない中でクイーンのかすかな言葉が聞こえた。

クイーン「頼みましたよ大悟。いえ……………光の勇者ウルトラマンティガ。」

僕はかすかに目を開けて、徐々に立ち上がる。周りを見渡すと、相変わらずバルタン星人とベムラーが町で暴れている。しかし、そこか、ベムラーの攻撃を受けて、気絶していたのか。しかし、気絶してた時間は短かったようだな。……しかし、変な夢をみたなあ。僕がウルトラマンとかよくわからない夢を……。今起きてる出来事も全部夢だったらしいのにな。

ふと、GUTS服の左胸ポケットに内側に違和感を感じた。なにか入ってる。手を入れ取り出してみると、僕がもっているはずのない形のものでできた。初めてみるのに、触るはずなのに、僕はこのアイテムの名前を知っていた。「スパークレンス」と……。

第12話 光の勇者 ウルトランティガ（前書き）

久しぶりに戦闘シーン書きました！てか、感想読ませていただきました！僕自身もまだまだほんと未熟だしみなさんの感想見ると書く気おきるんでこれからもよろしくお願いします。

第12話 光の勇者 ウルトラマンティガ

僕は今、スパークレンスを握っている。なんでだろうこの感触に対して違和感がないんだ……。

このスパークレンスを一度かざせばどうなるかもわかる……。

僕はスパークレンスをじつと見つめていた。様々な葛藤というべきものなのか、心は無心だが頭の中は今にでもパンクしそうだった。そのなかでも何回も頭をよぎる言葉に僕は一番歯がゆさを感じていたのかもしれない。

クイーン「あなたはウルトラマンです。」

……僕がウルトラマン。頭がパンクしそうだった。

そんな時、現実に戻される。

街ではやはりベムラーとバルタン星人が暴れている。

怪獣達の笑い声、人々の叫び声。

レナ達のガッツウイングが怪獣達に攻撃を仕掛ける。怪獣達に攻撃が効いていないのは明らかだった。

バルタン星人「フオツフオツフオツフオツ。無駄だ、地球人あきらめろ！」

レナ「悔しい……。勝てないの??」

新庄「俺達に怪獣は倒せないのか??」

堀井「アホッ!!最後まで諦めたらアカン！」

バルタン星人とベムラーはガッツウイングの攻撃に怯むことなく街を破壊し続けていく。そしてまた多くの人が犠牲になっていく。

僕は怪獣達の方に目を向ける。人々に罪はないのに……。徐々に怒りがこみ上げてくる。

人間隊長が言っていた。

人間「この星は私達を守るのよ。」

ウルトラマンクイーンが言っていた。

「頼みましたよ、大悟。いえ……。光の勇者ウルトラマンティガ。」

僕は一瞬だけよぎった言葉に従うことにした。

「地球は僕が守る！！」

僕は右手を前に出し、左手を右腕に重ね、そこから時計回りに腕を回し、スパークレンズをかざした。

大悟「ティガあああああ！！！！！！」

その瞬間、僕は光に包まれた。

街が突然光輝く。誰もが、一瞬目をつぶり怯む。

目を開けるとそこには…光の巨人が立っていた。今までのウルトラマンとは違い、紫と赤が入り混じった体。また、顔つきも今まで地球に来たウルトラマンとはどこか違った。

その姿に誰もが驚愕している中、巨人はファイティングポーズをとる。

ベムラー「ぎゃん！！??？」

バルタン星人「ウ、ウルトラマン！！！！馬鹿な、ウルトラマンはみ

な死んだはずだ。何者だ、貴様！！！！？？？？」

街中もざわめく。

街の人A「ウ、ウルトラマンだ」

街の人B「ウルトラマンが来てくれた！」

街の人C「生きてたのか！負けるな、ウルトラマン！」

街中からは希望が込もった声援がとぶ。

宗形「まさか……………」

レナ「ウルトラマン？？？」

堀井「アカンアカン、ほんまかいな！」

新庄「まじかよ……………」

GUTS基地では…。

「矢住「すごい！これがウルトラマンですかあ！？初めて見ましたよ。」

人間「ウルトラマン？光の巨人？……歴史は、繰り返されると言うの？」

ティガ「バルタン星人、ベムラー！お前達は僕が倒す。僕は……ウルトラマンティガだ！！」

ティガ「デユワ！」

ティガはベムラーに向かっていき、しがみつく。そこからベムラーを投げ倒した。ベムラーに乗りかかりマウンドをとる。ベムラーに攻撃する。

バルタン星人「ウルトラマンティガだと。そんなやつ聞いたことがない。ウルトラ戦士なのか？くっ！状況は把握できないがとにかく倒す！」

バルタン星人が後ろから襲いかかりティガを捕まえティガを投げ倒

した。

バルタン星人は倒れたティガに襲いかかるが、ティガは寝転んだまま、両足でバルタン星人を蹴り飛ばした。

ティガ「ハッ！！！！」

ティガは立ち上がり、バルタン星人の両腕を掴み、投げ飛ばした。バルタン星人は投げ飛ばされ寝転んだ状態からティガも転ばそうとティガの足をハサミ手で攻撃しようと手を思い切りふる。

ティガ「フッ！！」

しかしティガはその攻撃を回避し、ジャンプし一回転しながら、立ち上がるうとするバルタン星人の頭にかかと落としする。バルタン星人は頭をくらくらさせながら倒れる。

その瞬間、ティガはなにか気を感じ左方向にジャンプした。

ベムラー「ギャオツツ！！！！」

ベムラーの熱線がティガに向けられて放たれたのである。

ティガ「ジュワ！！！！」

ティガは間一髪で回避した。だが、ベムラーは熱線を連発してきたのである。

ティガはそれをバリアで受け止める。なぜなら避けすぎるとかえって街が破壊されてしまうからだ。ティガはその熱線を跳ね返した。

熱線を浴びたベムラーは倒れる。ティガが追撃する。ベムラーの足を両腕で掴み、ジャイアントスイングして投げ倒した。再びマウンドをとった。

ティガ「ジュワ、ジュワ、ハッ！！！」

首や顔をなぐるティガ。またまたバルタン星人がティガに襲いかかる。ティガは右腕でバルタン星人の腹に渾身のエルポーを入れる。

バルタン星人「グフォ！！！！！」

バルタン星人をダウンさせる。

街の人A「あのウルトラマンめっちゃ強いぞ！！！」

街の人B「勝てるぞ、ウルトラマンー！！！」

街の人の声援はさらに強くなる。

新庄「リーダー、俺達はどうすれば？巨人の援護をするんですか？」

宗形「んー、そうだな。」

レナ「私は…まだ巨人が信用できません。あの巨人が味方かどうか
も実際はわからないんですよ！」

レナはティガを信用できなかった。レナはきちんとウルトラマンを
見るのは初めてた。人からしかウルトラマンの存在は聞かなかった
し、彼女自身もウルトラマンをうそくさいとあまり信じていなか
ったのである。

人間「責任は私がつとるわ！今回はあのウルトラマンを援護して。」

人間が全員の通信機から指示をだす。

堀井、新庄、宗形「了解！！」

レナ「……………了解。」

ガッツウイングは右往左往からバルタン星人に攻撃をかける。ティガはまだベムラーにマウンドをとって攻撃を続けている。

ティガ「ンンンツツ！ハツ！！！」

ティガはベムラーをそのまま、両腕で頭の上まで持ち上げバルタン星人の方に向かって投げつけた。

バルタン星人「ドフォ！！！」

バルタン星人はそれを回避できずベムラーの下敷きになる。ベムラーはダメージを受けすぎたのか虫の息だった。

バルタン星人はベムラーの下から立ち上がる。

バルタン星人「くっ！今日のところは一旦引き上げてやる。行くぞ、ベムラー！フォッフォッフォッフォッフォッ」

バルタン星人はそう言い残し、姿を消した。ベムラーは青い玉になり逃げようと空中に浮かぶ。

ティガ「逃がすか!!」

ティガは両腕を腰で引きその両腕を胸前でX字にクロスさせそのまま広げ、最後にその両腕をL字にクロスさせた。

ティガ「ジュワッ!!」

そのクロスした腕から鮮明色の光線が放たれた。ゼペリオン光線である。

その光線はベムラーの青い玉に直撃。青い玉は粉々に爆発した。

ベムラーを倒したティガ。街中からはたくさんの歓喜な声が湧いている。その声が飛び交う中、

ティガ「ジュワッ!!」

ティガは空高く飛び上がり空の彼方へ消えた。

ここはどこだ。あ、僕がさっきまでいた場所だ。

……人間としての感覚が不思議な感じだ。さっきまで僕は「ウルトラマンティガ」として戦ってたんだもんなあ。

そんな僕が途方に暮れているとPDI（GUTSの小型コンピューター通信機）に連絡が入った。宗形リーダーからだ。

宗形「大悟！無事か！？」

大悟「はい、なんとか……。」

宗形「今までどうしてたんだ？何回か連絡を入れたんだが……。」

大悟「あはっ！ベムラーの熱線で吹っ飛ばされて気絶してました！」

宗形「お前ってやつは……。まあ無事でよかった。とりあえず基地に帰ろう。シャーロックで迎えに行くからいる場所を教えてくれ。」

大悟「わかりました。」

僕は宗形リーダーに現在地を伝え、通信を切った。みんなには僕が光の巨人とゆうことは秘密にしておこう。きっとその方がいいから……。

しばらくして宗形リーダーが迎えに来て僕はシャーロックに乗り込んだのだった。

第13話 ウルトラマンクイーンの頼み(前書き)

書いていて思いました。僕の構想………だいが長編になりそうです。
長くなりますがみなさんお付き合いください!!

第13話 ウルトランクイーンの頼み

僕はリーダーと基地に帰ってきた。そしてそのまま作戦室に向かった。

作戦室に入ると、堀井隊員、新庄隊員、そしてレナもすでに帰還していた。もちろん、そこには隊長と矢住もいた。

宗形「ただいま戻りました。」

リーダーの言葉と同時に堀井隊員、レナ、新庄隊員が駆け寄ってくる。

レナ「大悟！！！！……よかった、心配してたんだよ、宗形リーダーが連絡とれないって言うから。」

大悟「心配かけてごめんね！」

新庄「ほんとだぜ、まったく！！ま、俺はお前は無事だと思ってたけでな。」

堀井「なに言うてんねん！！さっきまで「大悟がいなくなるなんてやだぁー！」って泣きわめいottaやないかい！！」

新庄「ば、ばかぁ！あれは、その……迫真の演技ってやつだよ、うん。」

堀井「演技には……とても見えへんかったが、まあ大悟……お前が無事でなによりや！」

人間「みんなに心配されて君は幸せ者ね！」

ミーティングルームのイスに座っている人間隊長が話しかけてきた。

大悟「ほんとに心配をかけました。」

宗形「あまりみんなに心配かけるなよ！」

宗形リーダーが僕の肩を叩いてきた。

大悟「はい!!！」

人間「じゃあ早速だけど、今からミーティングを始めるわよ。みんな席について。」

僕達はいつものミーティングに位置に座った。

人間「ミーティング内容は怪獣達の出現、タール漬けになったウルトラ戦士について、そして……あの巨人はなんなのか。」

矢住「人間隊長には言ったんですが、朝送られてきた謎の通信をあの後、XIGやアルケミスターズ、TLTなど他のチームに送って解析を頼んだんですが……」

矢住がコンピューターをいじりはじめる。

新庄「なにかわかったのか!？」

その瞬間モニターに言葉が表示され、皆がモニターに注目する。

矢住「まだ完全ではないんですが、要約するとどうやらほんとにM78星雲のウルトラ戦士はタール漬けになり全滅させられ、怪獣達も復活し地球に攻めてくるみたいなんです。」

周りの空気は一気に重くなった。

矢住「さらにもっと恐ろしいことが……。」

矢住はコンピュータをいじりモニターに新しい映像を映しだした。その映像に皆驚愕する。

レナ「こ、これって……。」

宗形「エンペラ星人か??」

堀井「なんでこいつが出てくんねん。」

矢住「……復活したんです。悪の宇宙人達が集めたマイナスエネルギーによって……。」

新庄「まじかよ……。じゃあ、いつかこいつと戦うことになるってのか。」

入間「多分ね……。厄介な相手よ。しかもこいつはネオエンペラ星人と言って、エンペラ星人がさらにパワーアップさせた姿なのよ。」

大悟「強敵ですね……。」

新庄「すべての元凶はこいつか……。」

矢住「いいえ、こいつが元凶ではありません。」

入間隊長以外は矢住に顔を向ける。

矢住「まだ解析が済んでいないので元凶はわからないんですが、ネオエンペラ星人より上に立つものがいるんです。」

堀井「なんやと!？」

入間「アルケミスターズの解析からわかった情報よ。もしこの情報が正しかったら相当厄介よ。」

僕はウルトラマンクインから全てを聞いていたからその意味は解っていた。

……………レイブラット星人。僕はそいつのことは知らないが今回の事件の黒幕だ。相当なやつだろ。

でも僕は黒幕の正体はみんなには言わなかった。ここで黒幕の正体を言つとなぜ僕がそのことを知っているのかを疑うに違いないからだ。

入間「きつと、昔のようにまた怪獣や宇宙人達はこの星を襲いにくるわ。」

宗形「地球侵略のために……。我々GUTSは全力でこの星とこの星に住むものを守る……！」

一同「はいっ……！」

隊長の言うとおりまた今日みたいに怪獣達は侵略のために現れるだろう。僕もそんなことはわかっていた。

……僕がこの星を守らなくちゃ。

人間「全滅したかに見えたM78星雲のウルトラ戦士に変わり光の巨人。ウルトラ戦士にも見えるけど……光の巨人についてどう思うか、みんなの意見を聞かせてちょうだい。」

宗形「自分は……まだなんとも。」

矢住「僕も宗形リーダーと同じ意見ですね。まだ信用するのは早いかと……。」

新庄「俺はあいつは味方だと思うぜ！M78星雲のウルトラ戦士なのかそもそもウルトラマンなのかすらいろいろわからねえが、なんだろうーな、あいつは悪いやつじゃねえってなんとかなく頭の中であるんだよな。」

堀井「随分、曖昧な意見やな……。まあ、正直わいも敵ではない気はするな。」

人間「レナ隊員は？」

レナ「私は……信用できません。いきなり現れて……。彼がもし味方だとしても信用できるのか……。正直な意見はそれです。」

レナは信用できないのか。無理はないよな。年齢を考えるとレナは物心ついた状態でウルトラマンを見たことないんだもんな。まあ、僕も同じようなものだけど……。

宗形「大悟!!」

僕はびっくりして飛び跳ねた。

大悟「な、なんですかいきなり!？」

宗形「何をボーっとしている。お前はあの巨人についてどう思うんだ。」

みんなの視線が僕に集まった。

大悟「僕も……なんとも言えませんが、味方だと信じたいです。今日の一件で怪獣を追っ払ってくれたのも彼でしたし。」

人間「なるほどね……。」

味方と断定的な言い方を今したら怪しまれるからね。ここは無難に曖昧な感じにしておこう。

大悟「隊長はどう思われているんですか。」

人間「……大悟と同じ意見よ。私も味方かはわからないけど信じたい気持ちがあるの。隊長の意見としては具体性はないけれど。」

まあ、今信用されないのはしょうがないよな、実際。

人間「まあ、まだ情報も少ないし、今日のミーティングはここまでにして情報が増えてきたらその都度話し合っていきましょう。じゃあ、ミーティングは終わりね。後は宗形リーダー。」

宗形「この後は各自今日のシフト通りに行動してもらおう。」

宗形リーダーがポケットから折り曲げられた一枚のシフト表の紙を
だす。

宗形「2時間の仮眠の後、新庄は1号機で上空をパトロール。私の
堀井は2号機で上空パトロール。大悟とレナはシャーロックで街を
パトロールだ。」

一同「了解！」

……さっきの一件からかなんか疲れたな。じっくり体を休めて任務
に望もう。

僕は一目散に自分の部屋に向かい、部屋についた途端ベッドに横た
わった。今日が始まってまだ半日ちょっとしか立ってないのにこ
んなに疲れるなんて。

そのまま僕は眠りについた……………。

……………目を開けると、辺り一面光に包まれていた。

なぜだろう、驚きはあるけどそれほどない。

この光景は数時間前にも見たからだ。

そして目に前に立っている光の巨人。慈愛を姿に現したような姿だ。

でも、正直僕自身内心ではこの空間に来る事を望んでいた。

大悟「ウルトラマンクイーン。」

クイーン「大悟……。よく怪獣を倒してくれましたね。」

大悟「ほんとに今僕は……。光の巨人になのか……。あの怪獣達は僕が。」

クイーン「はい。すべてあなたが。あなたは今光の巨人、ウルトラマンティガなのです。」

大悟「僕が……。光の巨人。あー、聞きたいことはたくさんあるのに、今はなにも出てこない。」

クイーン「そうですね。混乱して当然ですよ。」

沈黙が続く中、僕はクイーンに聞き返した。

大悟「僕をこの空間に呼び出したのはなぜだ？僕を慰めるためだけじゃないだろ？」

クイーン「わかっていましたか。あなたにこの地球を守ってもらった以外のお願いをしたくてあなたの意識の中に侵入しました。」

大悟「お願い？」

クイーン「どうか、M78星雲のウルトラ戦士達を復活させてください！彼らはブロンズ化してしまったとはいえ、まだ命はあります。」

大悟「ウルトラ戦士達は死んだわけじゃないのか？？」

クイーン「なんとか。命を奪われたわけではないので……。ですが、敵達がM78星雲を本格的に破壊し始めたならそれと同時にウルトラ戦士達も……。」

大悟「そもそもなぜ彼らはM78星雲を破壊しないんだろう？万が一ウルトラ戦士に復活させられてしまったらそれこそ形成逆転してしまうではないか。」

クイーン「それは私にもわからないんです。M78星雲に近づけないようにバリアを張っている意図も。なにか恐ろしい企みを……」

大悟「……………いずれにしても僕一人で太刀打ちできるかどうか。」

クイーン「あなた一人では太刀打ちできる相手ではありません。そのためあなたに今告げておきましょう。この地球にはあなた以外にもあと三人、ウルトラ戦士の力を眠らせている人間がいるのですよ。」

僕は驚愕した。自分でも引くくらいのリアクションをとってしまった。

大悟「僕以外にもウルトラ戦士が!?!」

クイーン「はい。その人間達は時がくればいずれ戦士達の力が覚醒するでしょう。大悟、あなたにはM78星雲を救ってもらったためその戦士を見つけ協力して敵を倒してほしいのです。」

大悟「誰なんだ、それは!?!僕の知り合いか、他人か!?!どこにいるんだ!?!」

僕はとても興奮していた。孤独になるであろう戦いを支えてくれる仲間がいるかもしれないとゆう可能性。その望みは僕をここまで奮い立たせた。

クイーン「……残念ながら私にもその人物が誰でどこにいるのかは見つけることができないのです。」

大悟「そんな……。」

クイーン「しかし、彼らは必ず覚醒しあなたの前に現れます。私の言葉を信じて大悟。自分の力を信じて大悟。お願いしますキングを、M78星雲のウルトラ戦士達を救い出して……。」

そう言い残しクイーンは僕の視界から消えていった。

大悟「あつ。」

一瞬のうちにしてあたりは光の空間から真っ白い雲のような空間へと変わっていく。

気づくと僕は開いた。時計を見ると作戦室に集合する時間だ。あつ

とゆう間に寝てしまったんだな。でも仮眠は…あまりできなかったな、こりゃ。頭がすっきりしてない。僕はベッドから立ち上がり、作戦室へと向かった。

第14話 TYPE CHANGE (前書き)

今回、戦闘中心ですね！てか、格闘技あんま知らないんで戦いで
の技のレパートリー少ないなと気づきました(笑) なんとかしな
ければ…。

第14話 TYPE CHANGE

あれから3日間たった。でもこの3日間では何も起きていなく、いつも続いていた何気ない平和な毎日が続いていた。このまま怪獣達は来ないで平和が続いたりして…。

そんな物思いにふけている僕は今、新庄隊員とGUTSウイング1号でパトロールしていた。

そんな時、通信が入る。

大悟「こちら1号機。」

入間「大悟隊員と新庄隊員、埼玉県の水力発電所に怪獣が現れたわ！急いで現場に急行してちょうだい！レナ隊員達も2号機で今向かったわ！」

新庄「おーい、でやがったかあ！！了解、行くぜ大悟！」

さっきの僕の物思いに老けてた時間は一気に無駄になったなあ。これが現実か、やっぱり。

大悟「了解。行きましょう、新庄さん！」

人間「あと近くには民間人はあまり住んでいなかったみたいだから
非難はすでに完了しているそうよ。だから、戦いに集中できるはず
よ。」

新庄・大悟「了解！」

そういった人間隊長の通信に返事をし、通信を切った僕達は急いで
現場に向かった。

近場をパトロールしたので数分で現場に到着した。街では2体の
怪獣が暴れていた。この光景にはまだ見慣れないなあ…。

そんな中本部から通信が入る。

矢住からだ。

大悟「こちら1号機。」

矢住「2体の怪獣のデータを送ります。参考にしてください。」

大悟「わかった。………透明怪獣ネロンガと彗星怪獣ドラコか。あ
りがとう矢住。」

矢住「ドラコには飛行能力があるので気をつけて攻撃してください。ネロンガは電気を吸収すると透明になる能力があります。だから、発電所などには極力近づけずに戦ってください。」

新庄「まかせとけ！サンキューな矢住！」

矢住「頑張ってください！」

矢住との通信が切れると同時に宗形リーダー達の乗る2号機から通信が入る。

宗形「大悟、新庄。矢住からの通信は聞いたな。俺達ももうすぐ到着する。先程の怪獣達の能力に気をつけながら攻撃を開始だ！」

大悟・新庄「了解！」

新庄「さあ、暴れまくってやるぜ！！」

僕達はGUTSウイング1号機のビーム砲でドラコとネロンガを攻撃した。怪獣達は少し怯んだが、あまり効果はないようだ。

数回の攻撃後、2号機が現れた。

宗形「1号機を援護するぞ！」

堀井・レナ「了解！」

2号機のビーム砲がドラコの翼に直撃。ドラコも怯む。

一方僕ら1号機はネロンガを攻撃していた。ネロンガは発電所から電気を吸収し始めた。

新庄「電気を吸収するんじゃねえよ!!！」

新庄隊員の握られた操縦機に付いているボタンを新庄隊員は押す。

GUTSウイング1号機のビーム砲が放たれる。しかし、ネロンガは姿を消してしまった。

新庄「き、消えた。」

大悟「しまった！ネロンガはエネルギーを吸収すると透明になるん

だ。」

ネロンガはGUTSウイング1号機の後ろに出現し、頭部の触覚から電撃を放ち、その電撃はGUTSウイング1号機に直撃した。

大悟「く、操縦不能!!」

新庄「脱出するぞ!!」

僕と新庄隊員は脱出ボタンを押し、なんとかGUTSウイング1号機から脱出した。

空中でGUTSウイング2号機が空中に羽ばたくドラコを狙う。しかし、ドラコはすばやくなかなか攻撃が当たらない。

堀井「なんつちゆうすばしっこいやつや。」

宗形「無意味に攻撃はするな!攻撃を外して民家に被害が及ぶ可能性がある。」

レナ「あ、ドラコが地上に降りた。」

宗形「よし、今だ狙え!」

一方、地上に降りることができた僕と新庄隊員。

GUTSスーツの両腰に付いているPDI（GUTS通信機）から宗形リーダーから連絡があった。

宗形「2人とも無事か!？」

大悟「なんとか……。」「

宗形「よし、2人は地上から引き続きネロンガを攻撃してくれ。」「

新庄・大悟「了解!」「

新庄「行くぜっ!大悟!」「

僕は新庄隊員とネロンガに立ち向かう。GUTSハイパーガンでネロンガに攻撃するも、まったく怯まない。

新庄「くっそ!全然聞いてねえ!」「

GUTSウイング1号機の攻撃でもあまり効果がないのにハイパー

ガンではネロンガからしたらくすぐったいぐらいだろう。

………仕方ない。

僕は新庄隊員がネロンガの攻撃に集中して視線を集中している間に横の物陰に隠れ、胸ポケットからスパークレンズを取り出し、それを天にかざした。

まばゆい光がドラコとネロンガの前に現れた。

現れたのは…ウルトラマンティガであった。

ティガ「ジュワッ！」

ティガはファイティングポーズをとる。

新庄「どうやらまた来てくれたみたいだ。」

GUTSウイング2号機内で宗形と堀井は笑みを浮かべる中レナは

レナ「……………」。

GUTS基地では

人間「ウルトラマン…………」。

ティガはドラコにしがみつき、左膝でドラコの腹を2回蹴りドラコを投げ飛ばした。

ネロンガ「ブオオ！」

ネロンガがティガに向かってくる。ティガはそれを交わし、バランスを崩し倒れたネロンガにまたがりネロンガを攻撃した。

ドラコ「アーギャ！」

しかし、起き上がったドラコが空中に飛び上がり、ティガの背中を攻撃。

ティガ「ウワァー!!」

ティガは吹き飛ばされ、倒れる。その仰向けになったところにドラコが乗っかるうとするが、ティガはそれを転がり回避。

ティガ「ジュワ、ジュワ、ハッ！」

ティガはすぐ立ち上がり連続パンチをドラコに食らわせ、回し蹴りでドラコをぶっ飛ばす。

ティガはそのままドラコに追撃。ドラコの顔を持ち、そのまま地面に殴りつける。

新庄「俺も援護するぜ！」

新庄隊員のハイパーガンがドラコの目に命中。

ドラコ「ウギヤヤヤ！」

さすがにこれは聞いたのか。ドラコは喘ぐ。そこへネロンガがティガの背中に触覚からの電撃を浴びせる。

ティガ「ウワアアア！」

ティガはドラコから離れ、そのまま倒れた。

ティガ「ハッ！」

ティガは体勢を立て直し、ティガは右手からネロンガに向かってハ

ンドスライサーを放った。

しかし、ネロンガは透明になる能力でそれを回避した。そしてまた姿を現しティガに向かって突進する。

ティガはそれは回避できずさらにぶっ飛ばされる。

ネロンガ「ブオオオオ！！」

ネロンガはそこからティガの上に乗っかるうとするも、ティガはそれを回避。だが、立ち上がったドラコの空中体当たりでまた吹き飛ばされるティガ。

ティガ「ジュワッ！」

体勢を立て直し、ファイティングポーズをとるティガ。

ティガの額のティガクリスタルが一瞬赤く煌めく。

ティガ「ンンンンンン、ジュワッ！！」

ティガは額の前で両腕をクロスさせ、その両腕を振り下ろした。

なんと、その瞬間ティガの体の色は紫と赤を帯びた姿から全身赤色

の姿に変わる。

新庄「なっ!!」

堀井「い、色が変わった!!!!」

入間「まさか…。」

怪獣達も同様に隠せなかった。ネロンガはティガの体に向かって電撃を放つ。

ティガ「……………」

ネロンガの電撃を真正面から受けるティガ。しかし、ティガはびくともしなかった。

ティガ「ハアアアア！」

そしてその電撃を手の平で弾いた。ティガはネロンガに体当たりする。そのままネロンガを持ち上げ地面に叩きつけた。

ティガ「ンンンンンツ、タアアアアア!!」

ネロンガをもう一度持ち上げその巨体をドラコに向かって投げる。

ドラコ「ガアアアア！」

ドラコはそれを回避できず、ネロンガの下敷きになった。

ティガの追撃は続く。ティガは下敷きになった2体に体ことプレスを浴びせる。

体をどけ立ち上がるネロンガ。そこにGUTSウイング2号機の攻撃を浴びる。怯むネロンガ。

ドラコも立ち上がるうとするが、ティガはその立ち上がったドラコを抱きしめ、ウルトラバックブリーカーをする。

ティガ「ジュワッ！」

ドラコ「ギエエエ！」

ドラコの苦し紛れの雄叫びが響く。

ティガ「ンンン、ジュワツ！」

ドラコに向かってティガは渾身の右フックを出すもドラコは空中に飛び上がり、回避する。ティガは続けて右足で蹴ろうとするもドラコの素早い動きで回避する。その時、ネロンガがティガの腰に体当たりする。

ティガ「ウワァ！」

ティガは倒れるもすぐ立ち上がり、ネロンガの触覚を握りしめ、それを膝で折る。

ネロンガ「ガアイイイイ」

ネロンガがわめく中、ティガはネロンガを空高く持ち上げネロンガを投げ飛ばした。

一回転して転がるネロンガ。ネロンガが倒れる。

ティガ「ハアア！アアアアアアア、ジュワツ！」

ティガは両腕にエネルギーをためその左右両腕を上げていき、左腕を胸に当て、右腕は前に出し光線を放つ。ティガパワータイプの必殺技テラシウム光流である。

ネロンガ「グオオオオツ！」

ネロンガはデラシウム光流を真正面から受け、爆発した。

堀井「おっしやあああ！あと一匹や！」

レナ「……………」

そんな中、ドラコは空中からティガに体当たり。

ティガ「ウワァ！」

ティガはドラコの攻撃を受け、吹き飛ばされてしまった。

立ち上がるティガしかし、

ピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコンピコン

ティガ「!？」

ティガの胸のカラータイマーが点滅を始める。

宗形「胸のランプが点滅し始めたぞ。」

新庄「エネルギーが残り少ないってことか？援護するぜ！」

新庄隊員はハイパーガンでドラコを狙い撃ちする。新庄隊員の狙いは正確だったがドラコは答えていなかった。

ティガ「……………ンンン、ハアア！」

ティガクリスタルが紫色に輝いた。ティガは再びティガクリスタルの前で両腕をクロスさせ、その両腕を下ろす。

すると今度は全身赤色の姿から紫色の姿へと変わる。先程の太めの体型だったパワータイプとは逆にスリムな体型になったこの形態はティガスカイタイプである。

宗形「また色が変わった！」

堀井「どうなっとなのや！」

ティガはファイティングポーズをとる。そして空中へジャンプ！ドラコの目の前に立つ。

ドラコ「!?!」

ドラコは同様にパンチをするもティガはあっさり回避。

次にティガが攻撃しようとする。パワータイプの動きを予想し避けようとするドラコ。しかし、ティガは一秒間で空中回し蹴りを5発繰り出した。

ドラコは回避できず、まともに回し蹴りを受ける。回し蹴りラッシュが終わり、当たりを見渡すドラコ。しかしそこにはティガの姿はなかった。

ティガ「タアアアアア!」

ティガは上に回り込んでおり、そこからウルトラ空中かかと落としをドラコの脳天に決め、ドラコを地面に叩き落とした。

地面に落下するドラコ。ティガも地面に着地する。ドラコは立ち上がろうとするが、

ティガ「ジュワッ!」

ティガは両腕を胸の前で交差させ、その両腕を左右に広げながら伸ばしていき、エネルギーを集約する。その両腕を左腰に持ってきてから右手を水平の前に伸ばしドラコに向かって光弾を放った。ランバルト光弾である。

ドラコ「カアアアアア！！」

ランバルト光弾を受けるドラコ。一瞬のうちにばらばらに砕け散った。

堀井「うはぁ……………」

ティガ「ジュワッ！」

ティガは空に飛び上立っていき空に消えた。

ふうう…：なんとか勝った。あ、新庄隊員だ。多分僕を探してるんだな。

大悟「新庄隊員！」

新庄「大悟っ！お前どこいたんだ？いつの間にかいなくなりやがっ

新庄「う、嘘だろ。鬼すぎる（泣）」

大悟「だいたい走って2時間で基地に着く訳が…。」

新庄「しかも帰ったら始末書書かせられるぜ…。きっと給料から引かれるんだろうな。」

大悟「今月は節約生活だな。趣味のグルメレポートできないよ。トホホ…。」

一方…ここはとある暗黒宇宙。

宇宙人A「フオッフオッフオッフオッフ、ネロンガとドラコがあの巨人にやられた。やはりウルトラマンはまだいたんだ。」

宇宙人B「ばかなっ！ウルトラ戦士は全員タール漬けになったはずなのに！」

宇宙人C「でも現に地球に送った怪獣を倒す巨人が地球に現れている。しかも、姿はウルトラ戦士と告知している。ネオエンペラ星人様どうお考えですか。」

ネオエンペラ星人「…こいつはM78星雲のウルトラ戦士ではない。まあ…地球で生まれたウルトラ戦士と言ったところか。」

宇宙人D「こいつを知ってるんですか？」

ネオエンペラ星人「まあ…少しな。」

宇宙人C「地球のウルトラマンと言うのは!？」

ネオエンペラ星人「どの惑星にもM78星雲のウルトラ戦士に劣らない強い力を持った戦士はいるんだ。地球でのその力を持った戦士、それが奴なのさ。」

宇宙人A「いずれにしても奴を放置すればいつか我々の組織に影響が出ます。今のうちに怪獣を地球に大量に送り込み奇襲をかけましょう。」

ネオエンペラ星人「いや、それはできん。」

宇宙人B「どうしてですか??」

ネオエンペラ星人「まあいずれわかる。今は深い詮索はせず少ない戦力での奴を倒す方法を考える。」

宇宙人D「…わかりました。」

ネオエンペラ星人「（テイガ、まさかお前がな…。そして別次元の奴をこの世界に連れてきたのはきつと…）」

宇宙人A「どうしました？」

ネオエンペラ星人「いや。そういえば、M78星雲のほうは異常はないか？」

宇宙人B「大丈夫です。相変わらずウルトラ戦士はタール漬けになつたままですよ。」

ネオエンペラ星人「奴らが万が一復活したほうが厄介だからな。特に：ウルトラマンキングがな。M78星雲での戦いの時、奴は全力を出していなかったんだ。その原因は今でもわからない…。いいか、M78星雲には何者も近づけるな！そして何か変化が起きたらすぐ知らせろ。」

宇宙人全員「はい！！」

辺りの宇宙は暗闇に包まれていった。

第15話 クール星人来襲（前書き）

今のところ僕の構想通りかかっています！あ、でももし、皆さんがこうしてほしいとかゆう意見があれば聞きたいし採用できたらしていきたいんでアドバイスとかもらえたらうれしいです（・・）ノ

第15話 クール星人来襲

僕は今作戦室でミーティングをしている。そんな中、矢住が

矢住「あの…僕なりにあの巨人の能力について少し仮説を立てたのですが…。」

宗形「本当か！ぜひ説明してくれ。」

入間「お願いね!!」

矢住「では前にあるスクリーンモニターを見てください。」

そう言つて矢住は、先日のティガ対ネロンガ・ドラコ戦の映像を流し、その中でティガのカラータイマーが流れる映像が流れた。

矢住「この胸の点滅信号は、エネルギーが少なくなると点滅する歴代ウルトラ戦士と同じカラータイマーに近い役割の物のようです。」

入間「やはり、ウルトラ戦士でゆうカラータイマーみたいな物で間違いわなかったのね。」

次にティガの色が変わる映像が流れた。

矢住「そして…みなさんが気になっているこの姿を変えるのは、言わば「タイプチェンジ」。」

レナ「タイプチェンジ!？」

矢住「このレッドとパールの2色の姿が巨人の基本スタイルみたいです。初めは2色なのですが、これがレッド一色になるとパワーが増大するんです。」

そういうとパワータイプの戦う映像、そしてマルチタイプとパワータイプのパラメーターの比較映像が映る。

新庄「だったら、初めからレッドで戦えばいいじゃねえか!」

矢住「僕も最初はそう思ったんですが…。」

パワータイプがドラコの空中戦法に苦戦する映像が流れる。

矢住「パワーが上がった分、スピードが遅くなってるんです。」

そう言うと次にスカイタイプの映像が映し出された。

矢住「これがパープル一色になるとスピードが増大しますが、パワーが落ちるんです。」

そう言うと、3タイプのパワーやスピードのパラメーターを映す。

矢住「そして、2色の基本スタイルはパワーやスピードはバランスがあり安定をしていますが、これといって突出した能力はないと言うことなんです。」

宗形「そうか…敵の特徴に合わせて巨人は自分の力をコントロールできるのか。」

堀井「随分、便利な能力やなあ。」

大悟「確かにそうですね。」

僕はそんな事くらいしか言えなかった。ティガの能力はクロスメモリーによってほとんど把握してるしね。逆に自分の研究されてるみたいで少し恥ずかしい。

そんな中モニターに注目していると急にモニターの画面が砂嵐になり、その直後に謎の生物の姿が現れた。

新庄「な、なんだあ!?!」

堀井「なんや、あいつはあ!?!」

レナ「気持ち悪い。」

クール星人「私クール星人。」

矢住「クール星人!?!確か、ウルトラセブンが倒した怪獣リストに名前があったような...。」

クール星人「それ私の父。私の父数十年前ウルトラセブンに敗れ、さらにセブン私の仲間を次々と殺し、現在私だけが生き残った。私いつかセブンに復習するチャンス狙ってた。しかし、セブン死んだ。今なら地球私の物。地球をこれから侵略する。」

新庄「地球を侵略するだ?!?!ふざけんなこの片言野郎!?!だいたい

てめえ一人に何ができる？」

クール星人「私地球全体に毒を広げる装置ある。それで地球人みんな殺して、地球侵略する。」

堀井「なんやと！そんな馬鹿なマネはやめろやっ！」

クール星人「装置もう作動させた。あと2時間後に毒地球を覆う。」

宗形「なんだとっ！？」

クール星人「でも私優しい。これはゲーム。2時間以内にGUTS、装置見つけられるかな？」

大悟「ゲームだって？」

クール星人「栗森山のどこかに装置あるよ。破壊したらGUTS勝ち、できなかつたら負け。」

新庄「ふざけやがってええ！！！」

クール星人「じゃあ、地球人さよならー。」

通信は途絶えた。

宗形「隊長!!」

宗形リーダーの鼻息が荒かった。これは出撃命令を早く出してほしいと読み取れるほどのオーラを感じた。

人間「GUTS出動よ!!」

一同「了解!」

人間「リーダー、新庄隊員、堀井隊員、レナ隊員、大悟隊員はGUTSウイング1号機、2号機で出撃!矢住隊員はTLTなどの他のチームと連絡をとって事情を説明して。後、怪しげな磁気のでてるエリアの解析もお願い。」

一同「了解」

僕達5人はそれぞれGUTSウイングに乗り込み栗森山に向かい。約20分ほどで栗森山の麓に着いた。

入間隊長から通信が入る。

入間「麓でT.L.T所属チームのナイトリーダーと合流して、作戦を開始してちょうだい。」

一同「了解！」

隊長の言う通り、麓ではナイトリーダーのメンバーが待っていた。

和倉「私がナイトリーダーリーダーの和倉です。よろしくお願いします。今回ナイトリーダーからは和倉、西条、平木、石堀が増援にかけつけました。」

ナイトリーダーの隊員が挨拶したのでこちらも挨拶。なんか恐縮するなあ。

宗形「今回現場の指揮を任されているG.U.T.Sリーダーの宗形です。さっそく山を登り手分けして装置を探しましょう！」

先程気になっていた堀井隊員が両腕になにやら機会を持っている。

堀井「こんなこともあるのかと持ってきた、毒物質反応装置を使え

ばすぐに見つかりますよ!」

新庄「よっしゃー、早速行こうぜ!」

宗形「おっと新庄、お前はここでGUTSウイング1号機に乗り上空で待機だ!」

新庄「な、なんでですかあ!?!」

宗形「我々がもし装置を見つけたとしたら、奴はきつと逃げるはずだ!それを仕留めるのがお前の役目だ。それに…万が一我々にもしものことがあった場合本部と連絡をとる架け橋にもなってほしいんだ!」

新庄「…わかりました!」

宗形「頼んだぞ。よし、では山に入るぞ!あと一時間半しか残されていないのだからな!」

一同「了解!」

こうして僕ら計8人のメンバーは山を登り始める。僕達は山を登り

始める。

歩いていると宗形リーダーの前に丸い影が見えた。そして上空からは気を感じる。宗形リーダーが丸い影を踏もうとする。

大悟「宗形リーダー危ない！」

僕は必死で宗形リーダーに飛び込み影を踏ませないように押し倒した。僕と宗形リーダーは地面に倒れ込む。

宗形リーダー「何をする大悟！」

騒ぎを聞きつけ、少し離れた隊員達も駆け寄ってくる。

西条「どうしたのっ??」

堀井「大悟、どないしたんや！」

大悟「近づかないでっ！」

レナ「どうゆうこと大悟、説明して！」

大悟「いいかい、よく見てて！」

僕は近くにあった石ころを先程の丸い影のあたりに投げた。すると丸い影の上から赤い光線が放たれ石ころは消えてしまった。

一同は驚愕する。

堀井「な、なにが起きたんや？」

レナ「いやっ！」

レナが僕にしがみつく。

大悟「罨ですよ。丸い影の上空には肉眼では見えない円盤が潜んでいて、丸い影を踏むとその餌食になるんですよ。」

和倉「なんと！」

宗形「なるほど、大悟助けてくれて礼を言っぞ！いいか、丸い影には注意して進め。また他にも罨が仕掛けてある可能性があるから気をつける！」

一同「了解！」

装置を探し始めてからすでに一時間が経過した。一時間探しても装置は見つからなかった。

どこにあるんだ！？時間がない。そもそも装置なんてのは本当にあるのか。クール星人の嘘の可能性もある。あるいは地面の中とかか？そうだとしたら残り20分で僕達の力で探すのは無理だ。

一時間搜索していくうちに仲間達はある程度見えるか見えないかわらぬ距離になり分散して装置の探索にあつた。

ようし。

僕は周りを気にしながら隊員の視界に入らない辺りのところまでの離れる。そして完全に隊員達の見えないところに来たところで胸からスパークレンズを取り出した。僕はスパークレンズを上に掲げテイガに変身した。

ティガは人間サイズの状態になる。もちろん周りね隊員達は気づいていない。

ティガ「ンンンン、ジュワッ！」

ティガは胸の前で両腕をクロスさせる。ティガの力を使えば装置がどこにあるかなどすぐに見破ってしまう。

ティガは神経を集中させ、装置の位置を探した。

ティガ「ん、あつたぞ！時間がない、急ごう！」

ティガは両腕をティガクリスタルの前で交差させ、その両腕をふりおそろした。

ティガ「ンンンン、ハアアアアア！」

ティガテレポーターションを使うティガ。これはエネルギーをだいぶ消費するが、一瞬にして行きたい場所まで行けるのだ。

ティガは建物の中らしき場所に移動する。ここはクールル星人の円盤の中である。円盤の大きさはわからないが、とても奥行きがある円盤であり、部屋はたくさんある。

ティガは装置のある部屋を神経を集中させ探す。どうやら一番奥の部屋のようだ。

奥の部屋に飛び込むティガ。ドアを開けるとそこにはクール星人の姿があった。

クール星人「やっぱり来た。見事だよ、光の巨人。」

ティガ「クール星人！……円盤の中に装置とは考えたな。お前は自分の円盤を透明の状態にしておいたんだ。だから人間でもこの円盤さえ見つけることはできなかったんだ。当然装置も見つかるとは思わない。だが…僕が来たからにはもう終わりだ。装置を破壊してお前を倒す！」

クール星人「負けるゲームなんて私しないよ。それに君がここに来ること知ってたよ。君が来るのわかっているのに何もしないわけない君の負けだよ。」

クール星人は触手のような手で右壁の赤いスイッチを押した。その瞬間ティガは螺旋状の光のロープで締め付けられる。

ティガ「な、なんだ…。」

クール星人「その縄からは逃れられない。お前何もできない。お前負け。」

ティガ「こんな縄、パワータイプになれば…。」

ティガは力を入れ、タイプチェンジをしようとするも力が入らずタイプチェンジが失敗した。

ティガ「くっ、この縄のせいか、タイプチェンジができない。」

クール星人「だから、お前負け。あはは、あと10分で装置発動する。」

ティガ「ん、だがお前はどつする？装置が発動したらいくらお前でも死ぬんじゃないのか。」

クール星人「私死なない。なぜなら……。」

クール星人がしゃべろうとすると部屋を2つのレーザーが飛び交う。一本目のレーザーが光の縄のスイッチを破壊し、もう一つが装置を破壊した。

装置は火花を散り、ショートする。

ティガ「残念だったな、クール星人！今度こそお前の終わりだ、くらえ！」

僕は両腕を体の前で交差させ、その両腕を開きゼペリオン光線発射ポーズを取る。しかし、

クール星人「まだだ！」

クール星人は左の壁のスイッチを押す。

クール星人「これこの円盤の爆破装置。あと20秒で爆発する。さ
らばだ、ティガ、下等生物。」

そう言葉を言い残すとクール星人は消えてしまった。瞬間移動で外へ非難したのだ。

ティガ「くっ！あと20秒だと！！時間がない早く脱出しなければ
！」

一方そのころ外の宗形達は……………一つの場所に全員集まっていた。

レナ「大悟、それに石堀隊員、どこ行ったのかしら？」

平木「装置も見つからないし……私達今日でみんな死んじゃうのかな？」

堀井「アホなこと言うなあ……！」

西条「堀井隊員の言う通り……。」

西条隊員が言葉を最後まで言いかけた時、北の方から爆発音になる！！かなりの距離に響くほどの爆音であった。

宗形「な、なんだあ！？どしたあ！」

和倉「あ、あれは……！」

爆発音と共に目を一瞬つぶるような眩い光が飛ぶ。そしてその光からは……ウルトラマンティガが現れる。ティガは巨大化し脱出したのだ。

宗形「光の……巨人。」

全員がティガに注目する。ティガは宗形達の近くに降り立ち、手に握っていた石堀隊員を地上にゆっくり下ろす。

堀井「ん、巨人がやつ石堀隊員を下ろしたで！」

レナ「どうゆうこと？それに大悟は！？」

西条「とにかく石堀隊員から事情を聞きましょう！」

宗形達が石堀隊員のいる方へ向かう中、ティガは空を見上げる。クール星人の気を探しているのだ！

宗形達が石堀隊員の側につく。

平木「石堀隊員大丈夫？」

石堀「なんとかかな！」

和倉「石堀、いったい何があったんだ！装置は破壊したのか！？なぜ光の巨人が！？」

そんな中、ティガのカラータイマーが点滅を始めた。ティガは一点の方向を見つめる。クール星人を見つけたのである。ティガはスカイタイプにチェンジする。

ティガ「ジュワッ！」

ティガは空高くとびあがって行った。

石堀「事情は後で説明します！装置は破壊しましたが、クール星人が宇宙へ逃げようとしています。宗形リーダー、新庄隊員に連絡を取り、あの巨人と共にクール星人を倒すように連絡してください！急いで！」

宗形「わ、わかった！」

宗形は必死の形相をする石堀に圧倒されるもヘルメットについている通信機でGUTSウイング1号機に搭乗し、上空で待機している新庄隊員に連絡をとる。

宗形「こちら宗形、GUTSウイング1号機応答せよ！」

新庄「こちら1号機」

第16話 GUTSの新たな仲間（前書き）

今回は割と短めです。まあ、スラスラと読めるかと思いますが、15、16話とか気づいた人普通にいると思いますが、原作ウルトラマンティガのシーンをオマー・ジュ的な感じで少し入れてるんですよ！（パクリではないですよ！まあ、考えがあつて）笑

第16話 GUTSの新たな仲間

ティガはクール星人は追う。クール星人のスピードよりもティガのスピードのほうが勝っていった。

ティガはクール星人に追いつき、クール星人を捕まえる。

ティガ「ンン、ジュワツ！」

ティガはクール星人の触手をハンドスライサーで切り落とす。

クール星人「あああああああ！！！」

触手を切り落とされ、クール星人が悲鳴を上げる。クール星人を投げ飛ばすティガ。もはやクール星人は虫の息であった。

クール星人は戦闘種族ではない。純粋な戦闘力は存在する怪獣、宇宙人の中でも下位の實力である。もはやクール星人に勝ち目はなかった。

そんな中新庄隊員の乗ったGUTSウイング1号機がティガに追いつきティガの横に着く。

新庄「追いついたぜ！さあ、フィニッシュを決めてやるっぜ！」

ティガは両腕を胸の前で手を組みそれを上に上げてから左腰に持ってきて、右手を前に出しランバルト光弾を放つ。

と同時に新庄隊員はGUTSウイング1号機からビーム砲を放つ！

ティガのランバルト光弾とGUTSウイング1号機のダブル攻撃がクール星人を直撃する！

クール星人「ああああああああ！私騙されてた、あいつ裏切ったあいつ裏切った！」

クール星人はこうして消滅していった。

ティガ「（クール星人、何か言いかけていたような。）」

新庄隊員はティガの方を向き、ティガにGUTSポーズを取る。ティガも新庄隊員と目を合わせ頷いた。新庄隊員のティガを見る視線はもはや「仲間」として見る視線であった。

ティガ「ジュワッ！」

ティガは地球に向かって飛び立っていく。新庄を乗せたGUTSウイング1号機も地球に向かって飛ぶ。

一方地球では宗形達は石堀から話を聞き始めていた。

和倉「それで石堀、事情を説明してくれないか？」

石堀「俺はみんなから少し離れて北の方を探していたんです。そして不振な円盤を見つけ侵入して、先に進んだら奥の部屋にクール星人と巨人がいたんです。二人は何か会話をしているみたいだったんですが、会話はわかりませんでした。しかし、巨人が動けない状況だと気づいたんです。」

西条「巨人が動けない状況？」

石堀「はい！何か光状の縄で捕まっていたんです。俺はドアの物陰に隠れながら、冷静に我々が探した装置と光状の縄を破壊する装置を探しました。そして、一瞬の隙をつき2つの装置を破壊したんです。その後のことはあまり覚えていません。光に急に包まれたと思ったら巨人の手の中にいて、円盤は爆発していて……。」

宗形「なるほど…そうだったのか。何にせよ、装置をまず破壊できたことはなによりの喜ばしいことだ。」

レナ「ところで石堀隊員、大悟隊員を知らない？」

石堀「……………」

レナ「石堀隊員？」

石堀「あ、すまない。大悟隊員かあ、わからないなあ。円盤の中にもいなかったみたいだし。」

レナ「そ、そうですか…。」

堀井「レナ、心配するなや！あいつのことや、どうせまたひょっこりと……………」

大悟「お……………」

僕はみんなのいる場所に走っていった。

堀井「大悟！まったくあいつはやっぱりひょっこりと…。」

レナが僕に駆け寄ってくる。

レナ「どこにいたの？すごく心配したのよ！」

大悟「ごめん、なんかクール星人の装置を探ってたら道に迷っちゃって。」

宗形リーダーの通信機が鳴る。宗形リーダーはヘルメットの通信機に反応する。

宗形「こちら宗形、新庄か？」

新庄「こちら1号機！クール星人は俺と巨人のタッグで倒しましたぜ！」

宗形「……そうか、こちらも全員無事だ、俺達4人は2号機で帰還する。先に基地に帰っていてくれ！」

新庄「了解！！！」

宗形リーダーは新庄隊員との通信を切る。

宗形「巨人と新庄がクール星人を倒したそうだ。これで何もかもが解決だ。さあ、基地に帰るぞ！」

和倉「さあ、我々も帰るぞ！宗形リーダー、今日はお疲れ様でした。

」

和倉隊長が宗形リーダーに挨拶をする。

宗形「いや、こちらこそ！今回の共同戦線によりお互いのチーム間のコンビネーションを高められたと自分は考えることができました。これからこういった共同戦線は多くなると思います。これからも頑張りますよ！」

和倉「はいっ！」

和倉隊長と宗形リーダーは握手を交わした。そして僕らGUTSとナイトリーダーは別れそれぞれの基地へ帰っていった。

僕達はGUTSウイング2号機で基地へ帰還した。作戦室へ戻ると新庄隊員はすでに帰還しており、大声で何か矢住に話している。

新庄「そんでな、巨人と俺のダブル攻撃がクール星人を倒し、勝利を導いたのさ!!」

矢住「でも…新庄隊員それしかしてないんじゃない?」

新庄「ばあか!リーダー達が装置を探している間俺はクール星人がもしも現れた時に備え、プレッシャーとゆう重圧がだな…」

その間で座りながら2人の会話を笑顔で見守る人間隊長。そこに僕らが帰ってきたことに気づき新庄隊員が迎える。

新庄「リーダー!」

宗形「隊長、只今帰還致しました。装置は破壊し、クール星人も撃破いたしました。」

人間「ご苦労。まあ、大まかな流れは先程連絡があつたナイトリーダーの和倉隊長とずっと自慢気に話していた新庄隊員から聞いたわ。」

宗形「ふん、自慢気にか…新庄?」

新庄「いやー、まあー、ねー、あー、」

新庄隊員……動揺しすぎでしょ。

人間「まあ、何はともあれみんな無事で任務も完了してよかったわ
」！

レナ「ほんとですよ。誰かさんはほんと途中から消えた、無事じゃないかと思ったけど……。」

完全なるレナの嫌みだな、こりゃ。

大悟「いやー、ハツハ」

そんな笑いが起きる中、新庄隊員が強張った表情で

新庄「隊長、個人的な意見なんですかあの巨人、やっぱり俺達の味方だと俺は思います。」

場の空気が一気に変わる。みんなの表情も真面目になる。

新庄「もう数回俺達と怪獣を倒すため戦ってくれてるし、今回の件だって彼がいなければ…。」

堀井「新庄がえらいまともなこと言いおった。」

新庄「う、うるせえ！で、隊長達はどう思いますか？」

宗形「俺も…個人的にはお前に近い意見だ。」

人間「そうね、私も同じよ。もしかしたら彼はM78星雲の出身ではない、例えば地球出身のウルトラマンとかなんじゃないかしら？」

レナ「地球出身の…ウルトラマン？」

矢住「その可能性はあるかもしれませんが。」

矢住がコンピューターの前に座りながら言う。

人間「子供の頃本で読んだんですけど、太古の昔どこかの星で大きな戦争が起きたんです。それは他星にも影響して星と星通しの戦争や星の中に住むもの通しでの戦争と宇宙のバランスが崩れた時代があったんです。地球もそのような事態が起きたんですが、その戦争を沈め宇宙のバランスの均衡を再生した、3人の宇宙の神がいたんです。」

堀井「星と星通しの戦争う！？宇宙の神い！？うそんくさい話やわあ。」

堀井隊員がそう言う中、矢住は話を続けた。

矢住「そしてその3人の神は宇宙に無限に存在する各星にそれぞれその星を守る存在「守神」を置いたんです。」

レナ「その「守神」がああ巨人だと！？」

矢住「はい！でもこの話はさつき堀井隊員が言ったように信憑性に欠けますし、未だにこの「宇宙戦争の謎」や「3人の宇宙の神」や「守神」のことだって説明されていません。むしろ全部嘘の可能性も今討論されてますしね！悪魔で可能性の話です。」

新庄「まあ、「守神」とかどうかはわかねえが絶対ああ巨人は味方だよ、間違いねえ！」

宗形「そうだな、今回ばかりはああ巨人の信用してもいいのかもな。」

大悟「ああ……。」

そんな中僕は口を開く。

大悟「さっきから巨人、巨人とみんな言っています、その…名前を付けませんか。あの巨人にもやっぱり呼び方が必要かと…。」

堀井「たしかにそれもそうやな！巨人って名前おかしいもんなあ！」

堀井隊員が笑いながら言う。さっきまでのシビアな空気が少し和む。

入間「そうね、何がいいかしら？」

宗形「山のように大きいから、マウンテンガリバーってのはどうだ？」

堀井「マウンテンガリバー……………」。

一同苦笑いする。

大悟「あ、あのウルトラマンティガ…とゆつのはどつでじょつ？」

周りはビビッときたかのような反応をする。

堀井「それええな!!」

大悟「でしょ!」

矢住「ウルトラマンティガか…なんでかわかりませんがとてもじっくり来ますね!僕はその名前に賛成です。」

新庄「俺もだ!……俺は正直あいつはウルトラマンだと思ってるからその名前は賛成だぜ!」

宗形「マウンテンガリバーは良いと思ったんだが……。まあ、その名前も悪くないな。」

入間「いいんじゃない!私もその名前はすごくなんかしっくりくるの!」

入間隊長が微笑む。

レナ「……………」

大悟「どうしたの、レナ?さっきからしゃべってないけど。」

レナ「え！？んん、別に！」

でもとにかく今、GUTSメンバーに新たな仲間が加わったんだ、ウルトラマンティガとゆう。

第17話 レナの葛藤（前書き）

コメントでまだ出ていないウルトラマンを出してほしいとゆうコメントをもらいました！もちろん、出しますよ！（むしろもしかしたら近いうちに…笑っ）

第17話 レナの葛藤

僕の今日の夜の任務はレナとGUTSウイング1号機で関東地区の上空パトロールだ。

ちなみに他の地区は違う組織のXIGやTLETなどが上空パトロールを担当している。1日で全エリアのパトロールは無理だから、その日その日のパトロール担当地区を決め、上空と地上を朝、昼、夜、深夜とパトロール体制をとっているのだ。

僕はGUTSウイング1号機の格納庫へ向かう。レナはすでに発進準備が完了している。相変わらずきっちりしているな。

僕はそわそわしながらGUTSウイング1号機に乗り込み、後部座席に座る。

大悟「ごめんごめん！待った？」

レナ「別に大丈夫よ。準備できたら発進するから。」

………そういえばレナ、さっきのミーティングでティガの話の時から元気がなかったなあ。

大悟「準備できたよ！」

レナ「じゃあ、発進するわよ！」

GUTSウイング1号機は爆音を上げ、勢いよく発進する。

レナ「……………」

大悟「……………」

無言が続いた。いつもだったら僕達は喧嘩をする以外は会話をほどほどにしつつパトロールをする。やっぱりレナは何か考えている。

大悟「あのさ、レナ」

僕は会話を切り出した。

レナ「なに？」

大悟「ダイレクトに聞くけどさっきのミーティングの時から元気ないけど、何か悩んでるの？」

レナ「……………」。

大悟「……………」。

沈黙が続く。レナは僕の質問には答えてはくれなかった。しかし、
数分後

レナ「大悟……、大悟は巨人についてどう思う？味方だと思う？」

大悟「……………」。

レナ「彼は何者なのかな。そもそもどこから来たの？」

大悟「それは……………」。

僕は言葉をつまらせてしまった。僕がティガなんだ。でもそれは言えない。僕がティガだってわかればレナはティガを信用する。それでも今は言えない。

大悟「レナ……。でもそんなすぐに信用しなくていいんじゃないかな？」

レナ「えっ？」

大悟「ティガをどう思うかの答えなんてすぐに出さなくてもいいんだよ。レナのペースでティガをもっと知ったりしてから答えをだせばいいと思うよ！」

レナ「大悟……………」

大悟「新庄隊員とかがティガを完全に信じてるからってそんなの気にしないでさ。レナのペースでやりなよ。」

レナ「ふっ。ありがとう、大悟。」

レナの顔が少しにこやかになった。少しはレナを元気づけられたのかな。でもその顔を見て少し安心した。

僕達はそのあと、いつも通り会話をし、パトロール任務も終了時刻をむかえ、基地に帰還した。

僕達はそのあとの予定は新庄隊員と堀井隊員に交代し、仮眠である。僕等はあとを2人に任せ、それぞれ部屋に戻り就寝した。

そんな午前3時。突然警報が鳴る。僕は飛び起きて、何かと急いで作戦室へ向かう。

作戦室にはすでに全員集まっていた。

大悟「どうしたんですか。」

矢住「真夜中ですが、怪獣が出現したんです。群馬県船橋市に。」

大悟「怪獣が!?!」

矢住はコンピューターを操り、怪獣が街で暴れている姿をモニターに映す。

矢住「地底怪獣テレスドン。ウルトラマンが倒した怪獣ですね。」

入間「GUTS出撃!新庄隊員はGUTSウイング1号機で出撃!2号機にはレナ隊員とリーダーで出撃!大悟隊員と堀井隊員はシャロックで街の人達の避難と地上からの攻撃よ!」

一同「了解!!」

僕は堀井隊員とシャーロックで街に向かう。GUTSウイングの2機はすでに攻撃を開始していた。リーダーに地上についたと通信機で連絡を入れる堀井隊員。

宗形「真夜中だから、避難仕切れない人は大量にいるとの情報が入っている。二手に別れて、避難の催促に当たってくれ。」

堀井&大悟「了解！」

僕らはリーダーとの通信を切る。

大悟「僕は右に行きますから堀井隊員は左に！」

堀井「おう！」

こうして僕と堀井隊員が別れる。

空中ではGUTSウイング2機とテレ斯顿の攻防戦が続く。

テレスドンの火炎攻撃がGUTSウイングを狙うもGUTSウイングはそれを回避し、反撃する。

思いの他、真夜中のせいと人口の多さで避難は円滑には進まなかった。さらにテレスドンは避難所の方に向かい始めたのである。僕はGUTSウイング2機に通信機で連絡をとる。

大悟「テレスドンが避難所の方に向かっていきます！この地区は住宅街だからまだ人の避難も完了していません。このままだと……。」

レナ「避難所に行かせるものですか！」

GUTSウイング2号機のレーザー砲が発射されるもテレスドンはどンドン近づいてくる。

僕は人ごみに逆らうようにして、物陰に飛び込んだ。そして胸元にしまっていたスパークレンスをかざした。僕を光が包み込む。

ティガ「ジュワッ！」

テレスドンにティガのジャンプキックが炸裂。テレスドンは吹き飛ばされた。

ウルトラマンティガが現れた。ティガが構える。

レナ「あ……………」

新庄「よっしゃ！一緒に戦おうぜえ！」

テレスドン「ゴオオオオ！」

立ち上がるテレスドン。ティガに抱きつくも投げ飛ばすティガ。

テレスドンにまたがりテレスドンの頭に何発かのパンチを入れるティガだが、テレスドンが起き上がりティガはテレスドンの背中から落ちる。

テレスドン「ゴオオオオ！」

テレスドンがティガにのしかかろうとするもティガは回避。そのまま勢いよく倒れるテレスドン。

ティガ「ンンンン！ハアアア！」

ティガは倒れたテレスドンの首を持ち上げそのまま背負い投げした。

テレスドンは怯まず立ち上がる。ティガもテレスドンに向かう。

テレスドンはティガを殴ろうとすれも、ティガをその手をガードし、

ティガ「ハア！ハア！ハア！」

テレスドンの横腹を三段蹴りする。

ティガ「タアアアア！」

テレスドン「ボアアアアア！」

テレスドンにジャンプ回し蹴りをくらわせテレスドンを倒すティガ。そのコンビネーションからGUTSウイング1号機のビーム砲の雨がふる。

テレスドンはまたティガに向かってきて殴ろうとするもワンパターン

んな攻撃にティガは余裕の回避。

ティガ「ジュワッ！」

テレスドンの顔面に膝蹴りをくらわせ、

ティガ「タアアアア！」

ともえ投げでテレスドンを吹き飛ばした。

宗形「我々も攻撃するぞ………どうしたレナ!？」

レナは考えていた。ティガについての考えがまとまらず葛藤する自分。

レナの操縦する2号機はテレスドンを避け、攻撃をしなかった。

新庄からの通信が入る。

新庄「おい、レナ！なんで攻撃しねえんだ。」

レナの見つめる先にはティガが、ティガもまたGUTSウイング2

号機を見つめていた。

ティガ「うわああ！」

ティガがよそ見しているとテレスドンがティガに体当たりし、ティガは吹っ飛ばされた。

テレスドン「グガアアアア！」

テレスドンは頭でティガを持ち上げ後ろに投げ飛ばした。

さらに立ち上がるティガに頭突きをくらわせひるんだところをもう一度頭で投げ飛ばす。

その頃、堀井はティガの戦いを見ていた。避難所にはほぼ避難は完了したので安心していただけだ。しかし、堀井は隊員服を引っ張られる。

堀井「お！」

そこには女性が一人立っていた。どうやら民間人のようだ。

女性「あの！弟が！弟が逃げ遅れてしまったんです！一緒に探してください。」

堀井「なんやと！わかった！どこらへんにおるとかはわかるんか？」

その時子供の声が聞こえた。堀井達は子供の声のしたほうに言ってみた。すると、ビルの屋上から6歳くらいの子供が泣く姿が…。

しかしそれはティガとテレストンが戦っている近くだった。

堀井「何ちゆうこつたあ！こりや隙について救いに行くしかない。」

堀井はヘルメットの通信機でGUTSウイングに乗る隊員達に連絡をとる。

堀井「こちら堀井。ティガと怪獣の近くに子供が一人いるんや！だから怪獣をなるつたけ今いる位置から遠ざけてくれ！」

新庄「なんだって、子供だと！」

レナ「避難は完了したの？」

堀井「今いる子供以外は避難完了や！」

宗形「よし、堀井。我々はなんとか怪獣を遠ざける。その間に子供を救出してくれ！」

堀井「了解！」

そついつて通信機を切ると今度堀井はティガに呼びかける。

ティガに自分の言葉が伝わるかはわからないが伝わることを信じて、堀井はティガに話しかける。

堀井「ティガ！」

ティガがテレアドンを抑えながら堀井の言葉に耳を傾ける。どうやらティガの言葉は通じたようだ。

堀井「子供が二人が戦ってるすぐビルの屋上にいるんや！わいが子供を救出しに行くから怪獣を遠ざけてくれ！」

ティガは近くのビルを見る。そこにいる子供を確認する。そして堀井隊員の言葉を聞き入れ、テレスドンをビルから遠ざけるように押していく。

それをGUTSウイングに乗っている隊員達も聞いていた。

新庄「ティガ、俺達も手伝うぜえ！」

新庄隊員はレーザー砲スイッチを押し、ティガを援護する。

宗形「レナ、俺達もやるぞ！」

レナ「（あの巨人、子供を救おうとしてる。）」

レナは心の中で考えながら、レーザー砲スイッチを押し怪獣を攻撃する。

ティガがテレスドンを遠ざけていく。ビルとの距離はどんどん離れていく。

堀井「よっしゃ！今がチャンスや！大丈夫やあんたの弟は絶対救っ

てみせる！」

堀井はそう女性に言い残し、ビルに入り階段を駆け上る。一秒でも早く子供を救いたい一心が堀井の走るスピードを確実に上げていく。

そして最上階に着く堀井。子供に近づく堀井。助けが来て安心したのか子供は泣き止んだ。

堀井「もう大丈夫や。さあ、一緒に逃げよう！」

子供「うん!!」

一方ティガはテレスドンを投げ技などで遠ざけていく。しかし、テレスドンは気づいてしまった。ビルの屋上にいる子供と堀井隊員の存在に。

テレスドン「ブオオオオオ!!」

テレスドンは彼らを殺そうと立ち上がり様に火球弾を放つ。

堀井「危ないっ!!」

堀井はそれに気づき、子供を守るように抱きしめる。

ティガ「うわあああ！」

その火球弾がビルに放ったことに気づいたティガが堀井隊員達を守るように背中で受け止めた。

新庄「ティガ……………」。

テレスドンは連続で火球弾を放つ。ティガは決して退かずに背中で火球弾を受け止める。

堀井「すまん、ティガ！」

堀井隊員は子供の手をつなぎ、ビルから脱出するため階段をかけ下がる。

ティガはテレスドン堀井隊員達がビルを脱出するまで背中で火球弾を受け止めるつもりなのだ。ティガのカラータイマーが点滅を始めた。

宗形「頑張れ、ティガ！」

ティガのその姿をレナはずっと見つめていた。レナはそのティガの姿こそティガの真意だと感じていた。悪のない、純粹に人を守ろうとしている。

レナ「（ティガを………信じってみるよ、大悟!）」

GUTSウイングで話した大悟との会話を思いだしながら、ティガを受け入れようとするレナ。そして………

レナ「やめなさい!?!?!」

レナはテレスドンの両目をレーザー砲で攻撃し、火球弾を止めさせる。

ティガはGUTSウイング2号機の方を向く。まるでレナに感謝するように。と同時に堀井隊員もビルからの脱出を完了する。

堀井「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア。ティガ今や!?!?!」

ティガは堀井隊員達の脱出を確認するとテレスドンの方を振り向き、手前で両手をクロスさせ、それを広げていきL字型に組み、ゼペリ

オン光線をテレスドンに放った。

ゼペリオン光線を受け、爆発するテレスドン。ティガはレナの乗るGUTSウイング2号機を見つめ、頷く。レナも微笑した。そして、ティガは空へと飛んでいった。

僕達は基地へ期間した。朝っぱらからこんなことになるなんて……。僕は欠伸した。そんな中、

レナ「大悟！」

レナが僕を呼び止め、僕はレナの方を振り向いた。

レナ「まだ、完全ではないけど……ティガのこと……。」

その先の言葉を理解できた僕。

大悟「うん！それでいいよ！」

僕はレナに言い残し、自分の部屋へと戻っていった。

第18話 バラージに眠る神（前編）（前書き）

感想でネクススやコスモスなども登場させてほしいとゆう声が上がりましたが……もちろん登場させますよ！むしろ一番登場させたがってるのは案外僕だったりして。（笑）

第18話 バラージに眠る神（前編）

テレスドンとの戦いが明けてから約2日後の午前10時、僕達は作戦室にいた。すると、ドアが開き澤井総監が入ってきた。

澤井「やあ！GUTSの諸君」

澤井総一郎総監。GUTS隊員みんなが尊敬する誇り高き総監である。

入間「澤井総監！！」

澤井「GUTSの諸君。ここ数日での戦いご苦労だった。私は、これからまた約20年前までの怪獣達が出現して暴れていた「混沌の時代」がまた来ると確信している。今、再び訪れる「混沌の時代」に立ち向かえるのは我々TPCのチームと光の巨人だけだと私は考えている。」

澤井総監もティガの事を味方と考えているのか？

レナ「澤井総監もティガの事を味方だと…。」

僕の考えていた疑問をレナがそのまま総監に聞いてくれた。

澤井「うむ。あの巨人は諸君が考えているように味方の可能性の方が高いと私も考えている。まあ、幹部の中にはそれとは逆にあの巨人を敵視する者もいるみたいだがな。」

宗形「確かに、あの巨人が100%我々の味方とゆう確証はないわけだからな。」

澤井総監は歩きながら言う。

澤井「なぜ、あの巨人を味方と思うのか。ただなんとなくあの巨人は味方だと私の第六感が言っているのだよ。」

新庄「その気持ちわかりますよ、澤井総監。俺もそうです！」

澤井「いずれにしても、今はこの怪獣達の侵略を阻止し、平和のため諸君には苦しくなるであろう戦いを乗り越えてほしい！」

一同「はい!!」

入間「ところで総監、なぜここに？何か用件があるのでは？」

澤井「うむ……実は数週間前にある警視庁のレスキュー隊員が1人行方不明になった事件を知ってるかね？」

レナ「はい！ニュースでも取り上げられていましたね。なんか、アフリカで人名救助の任務中に消えたんだとか……。」

澤井「私はそのレスキュー隊のボスと知り合いでね……。数週間しても音信不通なので調査を依頼されたのだよ。だから君達にそのレスキュー隊員の調査をお願いしたい。」

新庄「でも、数週間しても音信不通では生存の確率は……。」

宗形「新庄！軽はずみな言動は控えろ！」

新庄「すいません。」

新庄隊員「しよぼくれちゃったよ。」

入間「わかりました！引き受けます。」

大悟「その隊員の手がかりみたいなものとかはないんですか？」

澤井「これがそのレスキュー隊員の写真と名前だ。そしてこのデータディスクに彼が最後に警視庁本部に通信してきたデータが入っている。」

澤井総監は人間隊長に写真とディスクを渡した。

僕達は人間隊長の受け取った写真を覗く。

堀井「ほえ〜〜だいぶ男前やな！新庄お前よりももしかしたらこいつの方が…。」

新庄「世間の女子は俺を選ぶさ。」

レナ「私はこの写真の人の方が顔は好きかも！」

新庄「ガクッ！」

澤井「そのディスクをGUTSウィングに読み込ませれば、彼が最後にアフリカのどこから通信したかがわかるはずだ。………では頼んだよ、GUTSの諸君！」

そう言つて、澤井總監は作戦室から出て行く。

人間「では、大悟隊員、レナ隊員、堀井隊員。GUTSウイング2号機で出勤よ！人捜しと言えど危険性は高いから気をつけてね！」

3人「了解。」

新庄「ちえっ！俺は留守番かよ！」

堀井「まあまあ新庄！人捜しが一段落したらアフリカのお土産でも勝ってきてやるさかい。みんなでおいしく食べようや！」

人間隊長はそんな子供っぽい新庄隊員を諭すお母さんのように、

人間「新庄隊員。私達は人捜しの他にもこの日本を守るとゆう義務もあるわ。もしまた怪獣が現れた時、エースパイロットのあなたの力が必要なのよ。」

新庄隊員は右手をこめかみにあて

新庄「ふん、そういうことですか。なるほど…男前でエースパイロットの俺が必要だからあえて基地に残す。さすが隊長わかってらっ

しゃる。」

今声変わったなあ〜かつこつけてたのかな。

堀井「単純やな〜こいつ。隊長も大変やろつ。」

レナ「しかも男前とは言っていないし。」

一回の会話でこれだけ突っ込ませる新庄隊員……すごいなある意味。

宗形「ま、まあ、とにかく大悟、堀井、レナ、頼んだぞ！」

3人「了解！」

僕らはヘルメットをつけ、GUTSウイング2号機の格納庫へ向かう。

レナの操縦で発射した。堀井隊員は澤井総監からもらったディスクをGUTSウイング2号機に読み込ませている。

飛行して一時間半。アフリカに到着。アフリカに2時間で到着できるGUTSウイング2号機は改めてすごい。

レナ「一応アフリカ圏内に入りましたよ。」

大悟「もうデータは読み込めたんですね?」

堀井「ばっちりや!レナもう少しまっすぐ進行や。」

レナ「了解!」

……一瞬の出来事だった。僕らに乗せたGUTSウイング2号機は突然虹色の光に捕らわれる。

堀井「な、なんや!何が起こったんや!」

レナ「わ、わからない!操縦も不能になってしまってる。」

大悟「くっ!堀井隊員、本部に連絡を。」

堀井「今やつとるわ！でも通信できへん！」

大悟「だ、脱出機能も作動しない！」

レナ「す、すごい力で引き寄せられてる……！」

堀井・大悟・レナ「うわあああああ！！！」

僕らに乗せたGUTSウイング2号機は何もできないまますごい力で光に引き寄せられていった。

そして地上にまで引っ張られ、思い切り地面に叩きつけられた。そのまま僕らは気を失った。

あれからどのくらい時間が立ったのか。どうやら最初に目覚めたのは僕みたいだ。

大悟「痛ててて。レナ大丈夫か？堀井隊員もしっかり！」

僕は目覚めるとまず2人の隊員の安否を確認。幸い2人も息はある。気を失っているだけのようだ。僕は必死で呼びかけた。

堀井「んんっ！」

レナ「いたたたた。」

2人もなんとか目を覚ましたようだな。

大悟「よかったあ。」

レナ「どうなったの？」

僕は辺りを見渡し、

大悟「どうやら墜落させられたみたいだね、あの光に。」

堀井「えらい目にあわされたわ！」

レナ「でもすごいみんな生きてるいるみたいね。」

堀井「あー、頭いたいわ。とりあえず、本部に連絡をとれるかやっ

「てみよう。」

堀井隊員はなんとか本部と連絡をとろうと様々なやり方を試みたが、本部には通じなかった。きっと無線機のすべてがさっきの衝撃で破損してしまったのだろう。

それにしても、なかなかの衝撃だった。みんな生きてることが奇跡みたいだ。

堀井「だめや！本部とも連絡がとれへん。あー、どないしょ。」

大悟「とりあえず外に出てみない？」

レナ「そうですね、ただ中においても何も始まらないですし。」

大悟「今この状況を把握することが大切だからね。」

そう言い僕達はGUTSウイング2号機がら降りた。運が良いことに2号機の搭乗口の開閉機能は生きてるようだ。

外にでると、僕達はその光景に絶望した。当たり一面は砂漠であった。どの方向を見ても広がるのは砂漠の一面であった。

堀井「まじでどうすんねん……。」

レナ「なにも目印もないし、町もない。」

大悟「堀井隊員、2号機は直せないんですか？」

堀井「こんだけ破損したんや、無理や！」

レナ「うん、どうしよう?」

僕はそんな時見つめる視線の先で何か光ったのを感じた。

しかも…さっきから…わかる、スパークレンズが共鳴している。僕の視線の先の光と。

その光を求め、僕は走りだした。

レナ「大悟どこ行くのよ!」

堀井「待てや、大悟!」

堀井隊員達は僕を追いかけてきている。

堀井達は10分以上走り続けた。通常、日頃から鍛えているGUTS隊員なら、走ることに10分くらいか、猛暑の砂漠で汗塗れになった僕らの前にあっただのは石堀で作られた小さな村が広がっていた。

レナ「こ、これは！」

堀井「砂漠の村みたいやな！人の気配もある。小さい村だからか、近づかんとわからなかったで！」

レナ「ここに村があるなんて…どうやら私達村の近くに落ちたんですね。それにしても大悟よくここに村があるってわかったわね。」

大悟「え！？い、いいやー、一瞬村が見えたからさ、あそこで立ち止まっただけでも始まらないし、賭けてみたんだよ。」

なんかすごく苦し紛れな言い訳だなあ。まあ、スパークレンスの鼓動に釣られ走ってきたなんて言えないし。

そんな時、村から1人の女性が現れる。

砂漠の暑さで火傷しないように厚着と頭巾をかぶっている。

女性「あなた達が来ることはわかっていました。」

その女性はなぜか日本語をしゃべることができた。

レナ「すごい、日本語をしゃべれてる！なんで日本語喋れるんですか？」

女性「私は全人類の使う言語を話すことのできる能力なんです。申し遅れました。私セラと言います。」

堀井「セラさん、ここはどここの国のなんて村なんですか？」

セラ「国は…わかりません。私達はこの村から出ることはないし、周りの人間はこの村の人間だけ。村の名は「バラージ」と言います。」

大悟「バラージ……。」

レナ「先程私達が来ることはわかっていたとおっしゃってましたが……。」

セラ「はい！ノアのお告げによつて。」

大悟「ノアのお告げ？」

セラ「はい。とりあえず私についてきてください。あなた達に見せたいものがあります。」

セラさんは僕らを連れどこかへ向かっている。こんな砂漠のど真ん中だ。村はオアシス的な感じとは言い難く、どちらかと言えば荒廃しているのに近い感じであった。

村を歩いていると村人は僕らを貪るような目で見る者がほとんどだ。無理もないか。村人からしたら何者だろうとゆう感じだろう。

そついった村の風景に見とれている間に教会が見えてきた。村の殺伐とした風景の割にこの教会はすごく高貴な感じだなあ。

レナ「この教会遠くから見てもわりと目立つわね。」

堀井「なんでこの教会だけこんなきれいなんや！」

セラ「この教会にはノアの神が祀ってあります。神の宿は常に清楚に可憐に美しくしなければなりませんからね。」

教会はまた警備も重厚そうだ。扉の前に2人守護人が立っている。

セラは守護人2人に僕らでは聞き取ることのできないこの村の言葉で話しかけた。

きっと僕らのことを説明しているんだと思う。しばらくして、

守護人は頷き、教会の扉を開けてくれた。

セラ「では、お入りください！」

セラは教会に入る。そして僕らも続いて教会に入る。

教会の中は一般的な社の広さくらいだな。外観はでかく見えたが、内側は普通みたいだ。村人数十名は教会の真ん中にそびえる像に祈りを捧げている。

僕達はその像を覗く。その姿は……初代ウルトラマンそのものだった。

僕が感じた光はこれだったのだろうか。

レナ「これって…初代ウルトラマン？」

セラ「ウルトラマンとそう呼ばれてるみたいですね、ノアの神は！」

大悟「どういう意味だい？」

セラ「80年前、このバラージに住み着く魔物アントラーと戦った巨人。まさにノアの神だったらしいのです。その時偶然村に訪れた人達は「ウルトラマン」と呼んだみたいなんです。」

大悟「らしいって？」

堀井「80年前。待てよ。ちょうど初代ウルトラマンが地球におつたときやな。」

レナ「じゃあ、ノアの神ってやっぱり初代ウルトラマンのことなんですね。」

セラ「ですが……実はノアの神にはもう一つの伝説があるんです。」

レナ「もう一つの伝説？」

セラ「ノアの神はもしかしたら2人いたのではないかとゆう伝説があるんです。」

堀井「2人？どついうこつちゃ？」

セラはノアの神の近くの本を取りページを開く。厚さは普通の本だ。

セラ「この本はバラージの数百年前の歴史書です。このページの絵をみてください。」

堀井「こ、こ、これは！」

レナ「戦士が2人映ってる。しかもこの戦士…翼がある。」

セラ「バラージの解かれていない謎の一つなんですよ。このもう一人の戦士の謎は。」

「???」あの…セラさん！水くみ終わりましたよ！」

バラージの教会に1人の青年が入ってきた。爽やかな好青年っぽそうだ。

……ん、よくみると澤井総監にもらった写真の人物に似ている。それに上は白いTシャツだけど下のオレンジのズボンはレスキュー隊の隊員ズボンだ。

大悟「セラさんこの青年は？」

セラ「はい！数日前この村の前で倒れていたんです。」

レナ「倒れていた!？」

青年はこっちに歩いてくる。そして僕らに挨拶をした。

青年「あ、どうも初めまして。その隊員服を見た限りどうやらGU
TSの隊員みたいですね。」

堀井隊員が小声で僕に話しかけてきた。

堀井「大悟、こいつもしかして。」

大悟「君の名前を教えてくださいかな？」

青年はニヤリと笑いながら自らを名乗った。

青年「はい、日本警視庁レスキュー隊の弧門一輝です。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302/>

ウルトラマン -Cross Memories-

2011年10月26日04時02分発行